

原 遺 跡 14

—第26次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1167集

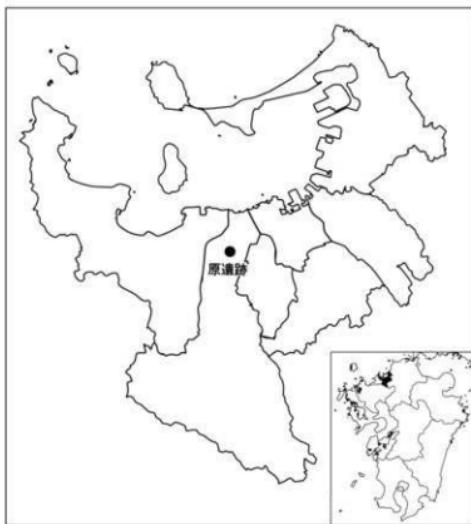
2012

福岡市教育委員会

HARA
原 遺 跡 14

— 第26次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1167集



遺跡略号 HAA-26
調査番号 1017

2012

福岡市教育委員会



(1)原遺跡第26次調査区遠景（博多湾を望む）



(2)原遺跡第26次調査区全景（デジタルモザイク写真）



(1) 原遺跡第26次調査出土遺物



(2) SR062副葬品

序

「九州・アジア新時代の交流拠点都市」を目指す福岡市は、古くから大陸からの玄関口として発展し、海・陸を越えたさまざまな地域との交流を通じて、独自な文化や歴史を形成してきました。また、本市はその文化・歴史的遺産を守り、育み、現在に生かすことで、市民が誇りと愛着を持てる都市を目指しています。

特に、地中に埋もれた埋蔵文化財は、当時の人のびとの生活の痕跡を伝える生きた資料であり、開発等によってやむをえず破壊される遺跡については記録保存調査を行い、その成果をより広く公開するよう努めています。

本書は、平成22年度に実施した飯原中央公園建設に伴う原遺跡第26次発掘調査の成果をまとめたものです。調査では、弥生時代の竪穴住居や掘立柱建物、食糧や加工用木材を貯蔵した穴などが発見され、その中からは弥生土器や石器、木製品が多く出土し、縄文時代から弥生時代へと移り変わった時代の人びとの生活の様子が明らかになりました。また、平安時代の掘立柱建物や井戸、墓も見つかり、特に墓には希少な種類の中国産青磁碗が副葬されていたことから、この地に有力者が居住していたことが分かりました。

本書が文化財保護への理解を深める一助となるとともに、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、多大なご理解とご協力を賜りました関係者の方々に、心から謝意を表します。

平成24年3月16日

福岡市教育委員会

教育長 酒井 龍彦

例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が、飯原中央公園建設工事に伴い、福岡市早良区原7丁目地内で平成22年度に発掘調査を実施した原遺跡第26次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理報告書作成は、令達事業（公園建設費）として実施した。
3. 発掘調査は、1区を比嘉、2・3区を今井、4区を今井・比嘉が担当した。
4. 遺構写真撮影は、1・4区を比嘉、2・3区を今井が行った。
5. 遺構実測図作成は、今井、比嘉のほか、中村、奥野、高、小嶋、中井、朝岡、井上、佐々木が行った。
6. 遺物実測図作成は、比嘉、福蘭美由紀、奥野、山口のほか、石器について山崎純男、吉留秀敏の協力を得た。
7. 遺物写真撮影は、比嘉が行った。
8. 製図は、比嘉、山口が行った。
9. 金属製品、木製品の保存処理は、福岡市埋蔵文化財センター職員が行った。
10. 自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボに委託し、IV章にその成果を掲載した。
11. 空中写真撮影は、有限会社空中写真企画に委託し、その成果を使用した。
12. 本文に掲載した公共座標は世界測地系であり、基準点・水準点の精度は4級である。
13. 本文中に掲載した方位は、すべて磁北を示す。
14. 本文中に使用した遺構略号とその性格は、以下のとおりである。

SA：横列 SB：掘立柱建物 SC：堅穴住居跡 SD：溝
SE：井戸 SK：土坑 SP：ピット（柱穴） SX：その他の遺構

15. 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
16. 調査・整理・報告書作成にあたり、多くの諸氏に協力を賜った。以下に芳名を記して謝意を表したい。

池崎 謙二 池田 祐司 板倉 有大 櫻本 義嗣 大塚 紀宜 上角 智希 佐々木由香
副田 則子 田上勇一郎 長家 伸 西澤千絵里 福蘭美由紀 松尾奈緒子 山口 謙治
山崎 純男 山崎賀代子 屋山 洋 吉留 秀敏 （五十音順、敬称略）
17. 執筆は、Ⅲ章-3・4の遺構を今井、Ⅲ章-6-1）およびV章-1を山崎、Ⅲ章-6-2）を吉留、IV章を株式会社パレオ・ラボ、V章-2を西澤千絵里、その他を比嘉が担当した。
18. 本書の編集は、比嘉が行った。

遺跡名	原遺跡	調査次数	26次	調査略号	HAA-26
調査番号	1017	分布地図幅名	原82	遺跡登録番号	020311
申請地面積	11.000m ²	調査対象面積	4.500m ²	調査面積	4.150m ²
調査地	福岡市早良区原7丁目地内			事前審査番号	21-1-181
調査期間	平成22(2010)年8月2日～平成23(2011)年3月16日、平成23年5月16日				

本文目次

Iはじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II 遺跡の位置と環境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2
III 調査の記録	4
1. 調査の経過	4
2. 1区の調査	5
3. 2区の調査	51
4. 3区の調査	70
5. 4区の調査	87
6. 出土石器	87
IV 自然科学分析 1	92
1. 放射性炭素年代測定	92
2. 花粉分析	94
3. プラント・オバール分析	96
4. 大型植物遺体	99
5. 樹種同定	101
V 自然科学分析 2	104
1. 土器圧痕の調査	104
2. 井戸SD025出土土壤塊の調査	104
VIまとめ	106

挿表目次

第1表 原遺跡発掘調査一覧.....	3	第5表 算出花粉化石一覧表.....	95
第2表 出土石器組成比率.....	88	第6表 試料1g当りのプラント・オパール個数.....	97
第3表 ウィグルマッチング試料および処理.....	92	第7表 出土した大型植物遺体.....	99
第4表 木材試料No.10の放射性炭素年代測定、曆年校正、 ウイグルマッチングの結果.....	93	第8表 樹種同定結果.....	101
		第9表 各試料の樹種同定結果一覧.....	102

挿入写真目次

写真1 SK222出土樹皮.....	62	写真5 出土した大型植物遺体.....	100
写真2 試料No.10の年輪計測結果.....	93	写真6 出土木材の光学顕微鏡写真.....	103
写真3 産出した花粉化石.....	96	写真7 海綿骨針のSEM画像.....	104
写真4 産出したプラント・オパール.....	98	写真8 土器底面のSEM画像.....	105

巻頭図版目次

巻頭図版1 (1)調査区遠景 (博多湾を望む) (2)調査区全景 (デジタルモザイク写真)	卷頭図版2 (1)原遺跡第26次調査出土遺物 (2)SR062副葬品
--	---------------------------------------

図版目次

扉 発掘調査風景	(5SK069 (南から))
図版1 (1)1区全景 (合成写真、上が北) (2)1区北半全景 (南西から)	(6SK069 (南から)) (7SK070 (南から))
図版2 (1)SR062 (南東から) (2)SR062副葬品出土状況 (南東から)	(8SK070土層 (南から))
図版3 (1)SB063・073 (上が北) (2)SB072 (上が北) (3)SC012 (南から) (4)SC012土層 (南から) (5)SK011 (南から) (6)SK013 (南から) (7)SK014 (南から) (8)SK014土層 (南から)	図版6 (1)SK080 (東から) (2)SK080土層 (南から) (3)SK084土層 (東から) (4)SK085 (南から) (5)SK085土層 (南から) (6)SK086 (西から) (7)SK086土層 (西から) (8)SK088 (東から)
図版4 (1)SK022 (東から) (2)SK022土層 (東から) (3)SK024・026土層 (南から) (4)SK024遺物出土状況 (南から) (5)SK027 (北から) (6)SK032 (東から) (7)SK034 (東から) (8)SK035 (南から)	図版7 (1)SE064東半 (北から) (2)SE064西半 (北から) (3)SE003 (東から) (4)SE008 (東から) (5)SE008土層 (西から) (6)SE019・021 (西から) (7)SE025 (南から) (8)SE025土層 (南から)
図版5 (1)SK039 (東から) (2)SK049 (東から) (3)SK068 (北から) (4)SK068土層 (北から)	図版8 (1)SE036 (南西から) (2)SE038 (西から) (3)SE041 (東から) (4)SE046 (西から) (5)SE047 (西から)

- (6)SE047土層（南から）
- (7)SE054（東から）
- (8)SE056（東から）
- 図版9 (1)SE056土層（東から）
 (2)SE081（南から）
 (3)SE081土層（東から）
 (4)SE087（南から）
 (5)SE087土層（南から）
 (6)SE089（東から）
 (7)SE089遺物出土状況1（東から）
 (8)SE089遺物出土状況2（東から）
- 図版10 (1)SE089井戸枠底面（東から）
 (2)SE091（北から）
 (3)SK015（北から）
 (4)SK030（南から）
 (5)SP502土層（東から）
 (6)SX016（東から）
 (7)SD001土層（東から）
 (8)SD071土層（東から）
- 図版11 (1)2区全景（北が上）
 (2)2区全景（西から）
- 図版12 (1)SX201検出（北東から）
 (2)SX201完掘（北東から）
- 図版13 (1)SK203（北から）
 (2)SK204木製品出土状況（南から）
 (3)SK205木製品出土状況（南西から）
 (4)SK211木製品出土状況（南から）
 (5)SK222（南から）
 (6)2区南壁土層（北西から）
- 図版14 (1)SD210（東から）
 (2)SD201 C-C' 土層（北から）
 (3)SK203土層（北から）
 (4)SK204（南から）
 (5)SK204土層（西から）
 (6)SK205（北から）
 (7)SK205土層（西から）
 (8)SK204・205土層（北から）
- 図版15 (1)SK211（南から）
 (2)SK211底面（北から）
 (3)SK211木製品出土状況（南から）
 (4)SK211土層（北から）
 (5)SK222（北から）
 (6)SK222樹皮出土状況（南から）
 (7)SX201検出時（南西から）
 (8)SX201完掘（南西から）
- 図版16 (1)3区全景（上が北）
 (2)3区全景（北東から）
- 図版17 (1)SC301検出（南から）
 (2)SC301床面検出（南から）
 (3)SC301柱穴半裁（南から）
 (4)SC301完掘（東から）
 (5)SK332（西から）
 (6)SK332土層（西から）
- 図版18 (1)3区北壁土層（南東から）
 (2)SK319（南から）
 (3)SK320（東から）
 (4)SK320土層（東から）
 (5)SK320・326土層（東から）
 (6)SK326（東から）
 (7)SK332（南東から）
 (8)SD305・306（西から）
- 図版19 (1)SD316（西から）
 (2)SD316（北東から）
 (3)SD325（北から）
 (4)SD325土層（北から）
 (5)SD331（北東から）
 (6)SD333（南から）
 (7)SK302（南から）
 (8)SK302土層（東から）
- 図版20 (1)SK304（西から）
 (2)SK304土層（東から）
 (3)SK308（東から）
 (4)SK308土層（東から）
 (5)SK309土層（南から）
 (6)SK310（東から）
 (7)SK310土層（東から）
 (8)SK312（東から）
- 図版21 (1)SK312土層（東から）
 (2)4区調査区全景（北東から）
 (3)4区北調査区（東から）
 (4)4区南調査区（北から）
 (5)SC301東側確認調査（北東から）
 (6)3区南側確認調査（南から）
 (7)SX201北側確認調査（北から）
 (8)確認調査遺構検出状況（西から）
- 図版22 出土遺物（1）
- 図版23 出土遺物（2）
- 図版24 出土遺物（3）
- 図版25 出土遺物（4）
- 図版26 出土遺物（5）

I はじめに

1. 調査に至る経緯

平成21年11月10日付で、福岡市住宅都市局公園緑地部公園建設課より福岡市教育委員会に対し、福岡市早良区原7丁目地内の公園建設に伴う埋蔵文化財の有無の照会のため事前調査依頼が提出された（住公建第192号）。申請面積は11,000m²、事前審査番号は21-1-181である。

埋蔵文化財第1課は平成22年2月10、17、24日に同申請地内で確認調査を行い、その結果、遺構および遺物包含層を確認したため、公園建設課に対し現地表下に掘削が及ぶ範囲について発掘調査が必要であると回答した。協議の結果、公園建設に伴う遊具や樹木の埋設によって現地表下に掘削が及ぶ4地区、約4,500m²について、発掘調査を実施することになった。1～3区の発掘調査は、平成22年8月2日に着手し、平成23年3月16日にすべての作業を終了した。また、翌年度の5月16日に4区の追加調査を実施した。1～4区を合わせた発掘調査面積は、4,150m²である。

2. 調査の組織（平成22年度は発掘調査、平成23年度は整理報告）

調査委託 福岡市住宅都市局公園緑地部公園建設課

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

調査総括 埋蔵文化財第2課長 田中壽夫

同課第1係長 米倉秀紀

調査庶務 埋蔵文化財第1課管理係 井上幸江

事前審査 埋蔵文化財第1課事前審査係長 宮井善朗

同係 阿部泰之（現埋蔵文化財第2課）

調査担当 埋蔵文化財第2課調査第1係 今井隆博（現埋蔵文化財第1課）

比嘉えりか

調査作業 朝岡俊也、阿比留一郎、阿部みゆき、有江笑子、井上葵、今村良輔、岩佐克行、大木孝人、大黒正雄、大庭義久、岡本幸子、川田強司、川端秀子、久保田裕子、栗下純也、小嶋麻世、斎馨純子、酒井康恵、坂口壽美子、佐々木華子、定直康浩、須佐恵司、瀬戸啓治、高瀬州、高瀬美代子、時吉ひとみ、富永美千夫、豊田俊八郎、中井歩、中村秀策、中村祐子、野崎賢治、野村広美、旗生勝介、原恵子、平岡富子、深溝嘉江、藤田満、藤野幸雄、前田陽子、松岡久行、水田正敏、水田ミヨ子、御手洗あい、森弘品子、吉安秀三、脇田誠二（発掘作業員）

奥野正人、高赫淳、中村理、韓恩恵（技能員）

整理作業 坂口龍子、鈴木諒子、中村祐子、宮本典子、毛利ヒロミ（整理補助員）

奥野正人、山口朱美（技能員）

調査期間中には、現地にて武末純一氏（福岡大学）、宮本一夫氏（九州大学）、山田昌久氏（首都大学東京）から貴重なご教示を賜りました。また、飯原校区の自治連合会および町内会はじめ、近隣住民の皆様の多大なご理解とご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。

II 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

玄界灘を北に望む福岡市には、山塊や丘陵により隔たれいくつかの平野が広がり、西から今宿、早良、福岡、糟屋平野と呼称される。そのうち、早良平野のほぼ中央部に位置する原遺跡は、油山から北流する西の金屑川と東の油山川に挟まれた微高地を中心に広がる。これまでの発掘調査の成果や既存水路の位置等から、遺跡東側に微高地A、西側に微高地Bが南北に延び、その間には東西幅約150mの低地が広がると推定される。第26次調査区は原遺跡の南部、微高地Aの南端付近に位置する。

2. 歴史的環境

原遺跡では旧石器時代から近世に至るまでの遺構・遺物が見られるが、遺構・遺物数がともに急増するのは弥生時代早期以降で、特に、本調査区も位置する微高地Aの南側に集中して確認できる（12・16・17・30次調査）。その後、弥生時代前期から古墳時代初頭にかけては、遺跡全体で集落や墓地の形成がみとめられる。古代の遺構は少ないが、10・24次調査で確認された条里方向に合致する東西溝は、さらに西側に延長し、有田遺跡群で検出された溝と繋がる可能性が高い。中世以降には屋敷跡が遺跡の各所に出現し、特に中世後半以降には掘立柱建物や井戸を囲う方形区画溝を備えた屋敷跡が微高地A・Bそれぞれで確認できる（12・16・24次、9・22・25・27次）。

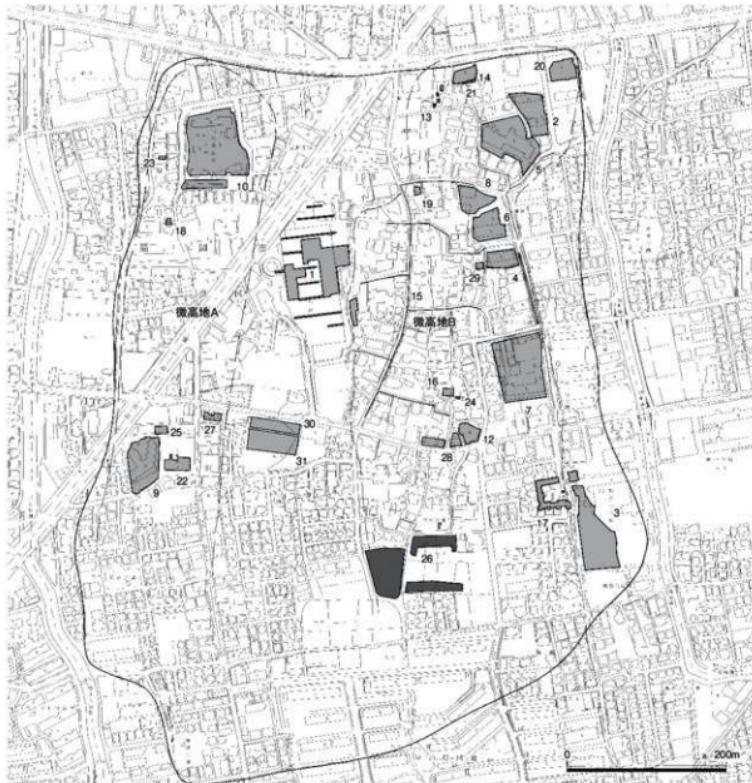
また、原遺跡の周辺には多くの遺跡が存在する。原遺跡の西側には、弥生時代早期の環濠や古代の郡衙関連施設が確認された有田遺跡群、東側には弥生時代前期の環濠や中期の壇塚墓などが見つかった原東遺跡群が隣接する。また、本調査区で確認された弥生時代早～前期と同時期の遺跡としては、有田遺跡群のほか、次郎丸高石遺跡、橋本一丁田遺跡、拾六町平田遺跡、免遺跡などがあり、灌漑技術を伴う水稻耕作や、大陸系磨製石斧を伴う木器加工技術の出現など、弥生時代の開始とともに早良平野に流入した文化複合を総体的に検討できる良好な資料が蓄積しつつある。



第1図 原遺跡と周辺遺跡 (1/50,000)

第1表 原遺跡発掘調査一覧

年度	主な遺構	件文	年度	主な遺構	件文
第1次 S50	墳丘（弥生早—中期）、水路（古代）、溝（中世後期）	市街492集	第17次 H7	土坑（弥生前期）、壁穴住居（古墳）、溝（中世）	市街444集
第2次 S54	溝（弥生中期）、建物・井戸（中世前期）	市街344集	第18次 H7	建物・溝（古代～中世）	「年報」10
第3次 S54	溝（弥生前—中期）、塹・灰坑（六朝後期）	市街21集	第19次 H8	溝、井戸、土坑（中世前—後期）	市街317集
第4次 S55	土坑（中世後期）	市街64集	第20次 H11	壁穴住居、建物（弥生早期）、溝（中世後期）	市街688集
第5次 S56	集落跡（弥生中期、古墳）	市街21集	第21次 H12	建物・有井（中世）	「年報」15
第6次 S57	土坑（古墳時期）、建物・溝・井戸（中世前期）	市街213集	第22次 H15	溝（土坑（弥生中期～後期）、溝（中世前期）、建物・溝（中世後期））	市街18集
第7次 S57	有井（土坑（中世後期））	「年報」12	第23次 H18	土坑（中世後期）	「年報」22
第8次 S59	要辯跡（弥生中期）、溝（古墳）、井戸、土坑墓（中世）	市街140集	第24次 H20	溝（古～近世）	「年報」23
第9次 S59	壁穴住居（溝（生）、溝（古墳）、井戸（古墳時期）、断跡（中世後期））	市街140集	第25次 H21	土坑（中世後期）、建物・溝（中世後期）	市街1129集
第10次 S62	建物・溝・井戸（中世前期）	市街25集	第26次 H22	壁穴住居・建物・有井（弥生早期）、建物・有井・断跡（中世後期）	市街1157集
第11次 S63	市街	市街366集	第27次 H22	溝（中世後期）	市街1168集
第12次 S63	獨立性建物・溝・井戸（中世後期）	市街231集	第28次 H23	壁穴住居・土坑（弥生前期）、溝・井戸（中世）	
第13次 S63	壁穴住居（弥生中期）、土坑（中世後期）	市街233集	第29次 H23	溝・土坑（中世）	
第14次 H1	壁穴住居・土坑（中世中期）、建物・輪界・溝・井戸（中世前期）	市街95集	第30次 H23	溝（弥生）、コトト（古代・中世）	
第15次 H1	溝（土坑（中世後期））	市街366集	第31次 H23	溝（弥生）、コトト（古代・中世）	
第16次 H3	壁穴住居・建物・輪界（弥生早期）、建物・井戸（中世後期）	市街337集			



第2図 原遺跡調査区位置図（1/6,000）

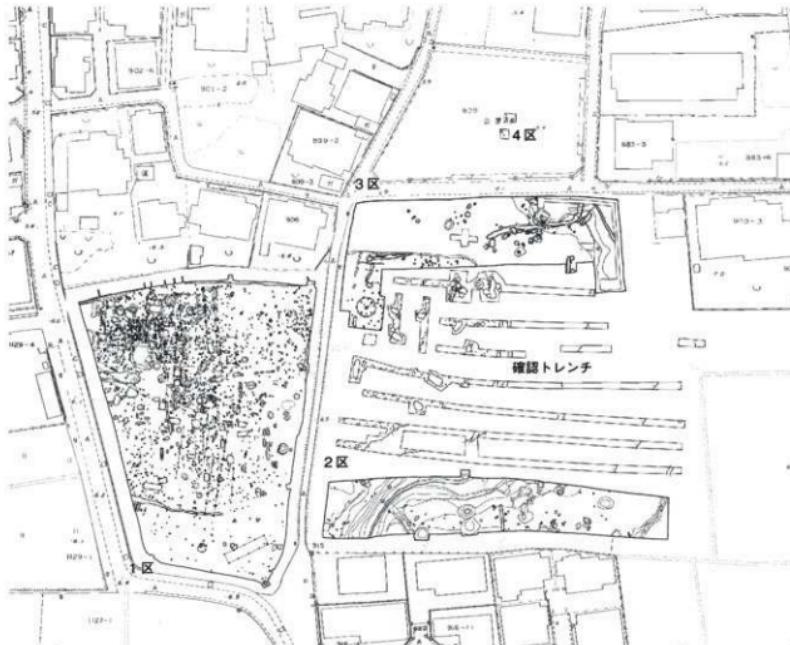
III 調査の記録

1. 調査の経過

第26次調査区は、西側の1区(2350m²)と中央部南側の2区(820m²)、中央部北側の3区(960m²)、3区北側の4区(20m²)の計4ヶ所(4,150m²)からなる。調査前は、1～3区が耕作地、4区が公園として利用されていた。調査は2010年8月2日に開始し、まず1区北半に着手した。その後、10月6日に3区、11月13日に2区、12月3日に1区南半の調査に順次着手した。さらに、2区と3区の間の未調査地についても、遺跡の分布範囲等を確認するためのトレンチを設定し確認調査を実施した。4区については、平成22年度は原中公園として利用中であり、調査対象面積も狭かつたため、翌年度の5月16日に追加調査を行った。遺物総量は、土器・石器・鉄器・木器を合わせ、コンテナケース約100箱に及んだ。遺跡の全景撮影は、セスナによる航空写真撮影および計4回のバルーンによる空中写真撮影を実施し、調査区全体のデジタル合成写真を作成した。また、2月6日には地元からの要望を受けて現地説明会を実施し、地域住民を中心に約160名の見学者が参加した。各調査区の遺構掘削および記録作業の終了後は、2011年2月14日に1区、2月18日に3区、3月1日に2区、3月10日に確認トレンチの埋戻しを行い、3月16日に調査を終了した。

なお、遺構番号の割り振りは以下のとおりで、区別に主要遺構とその他の遺構で桁を変え、例言に記した遺構略号を組み合わせて記述する。また、整理過程で欠番となった遺構番号もある。

主要遺構	1区: 001～108	2区: 201～222	3区: 301～334
ピット	1区: 501～1400	2区: 2001～2006	3区: 3001～3023



第3図 原遺跡26次調査区位置図 (1/1,000)



第四图 1区勘探位置图 (1/200)

2. 1区の調査

1) 調査の概要

1区は調査対象地の西半にあたり、残土置き場の都合上、北と南の反転調査とした。調査区は、南北約65m、東西は北端約50m、南端約30mの台形に近い長方形を呈し、調査面積は2,350m²である。北面は民家、西・南・東面は道路に接し、特に道路は交通者の往来が多く、通学路でもあったため、周囲に調査表示看板や外柵を設置するなどの安全対策を講じた。

まず、平成22年8月2日から調査対象地の除草と外柵設置、8月3日から表土剥ぎを行った。遺構は厚さ10~30cmの耕作土直下で検出され、検出面の標高は約6.2mであった。検出面の標高は北高南低となり、遺構の密度と残存深度もそれに比例する。地山は黄褐色砂質土で、現地表から-40cmで暗褐色砂礫層、-150cmで灰色砂質土層、-180cmで礫層、-220cmで青灰色シルト層に到達するが、検出面ですでに暗褐色砂礫層が部分的に露出する箇所もあり、特に西側に顕著であった。

8月9日から遺構検出と平板測量を並行して行った。対象地は、元々畑地であったため、その攪乱が遺構面に及ぶ部分もあった。遺構の埋土は黒褐色土と灰褐色土に大別されるが、結果的にみれば、おおむね前者が弥生時代、後者が古代~中世の遺構であった。遺構は、土坑や井戸のほか、ピットが相当数確認されたため、1/100平板図にピットの埋土を色分けして記録し、掘立柱建物の復元を行なながら遺構掘削を進めたが、遺構の密度が非常に高く、建物の復元は困難を極めた。また、井戸の掘削では、現地表から約-150cmで湧き出る地下水の処理に苦慮した。11月18日に気球により北調査区の全景写真を撮影し、記録作業を完了したのち、12月3日から南調査区の調査に着手した。掘削作業、気球による空中写真撮影、その他記録作業を行ったのち、2月14日に埋戻し、調査を完了した。

2) 遺構と遺物

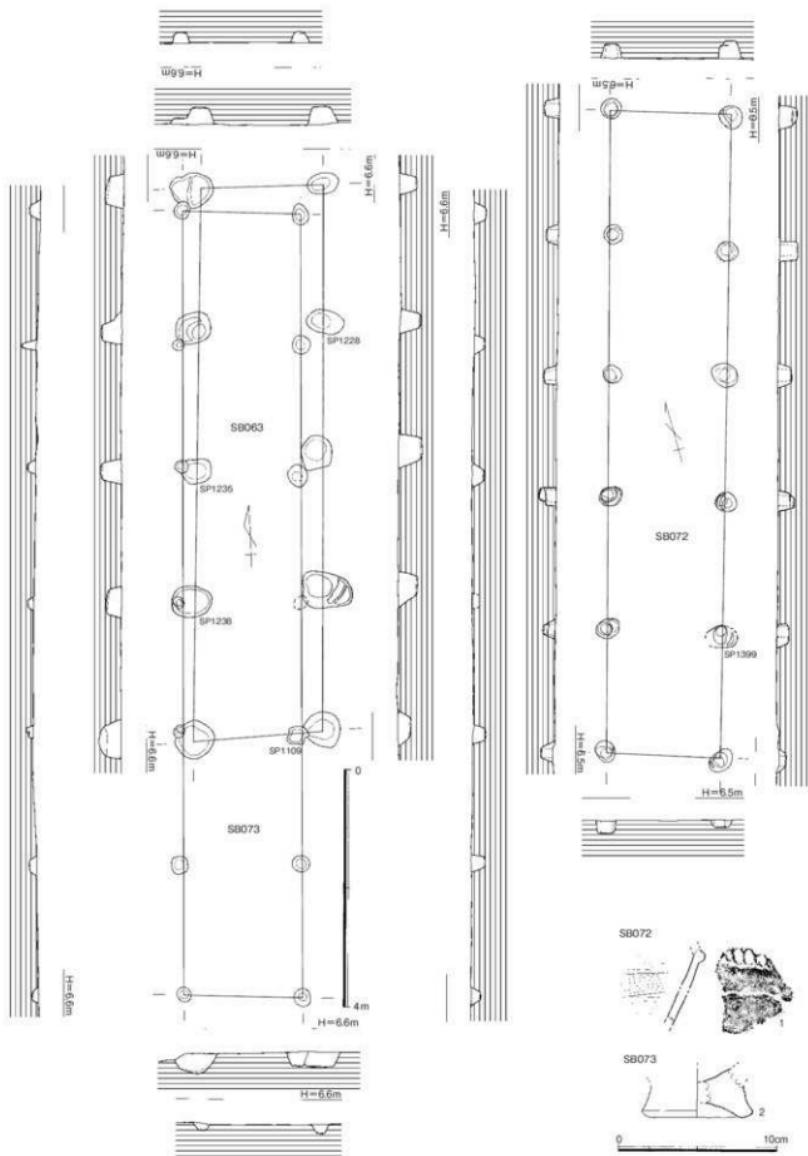
遺構は、弥生時代早~前期の竪穴住居跡や土坑、掘立柱建物、古代~中世の掘立柱建物や井戸、土坑などが検出され、遺物は弥生土器、須恵器、土師質土器、陶磁器、陶器、石器、木器、鉄器、銅鏡等が出土した。以下、弥生時代と古代以降の2時期に分け、遺構略号と遺構番号順に報告する。

(1) 弥生時代

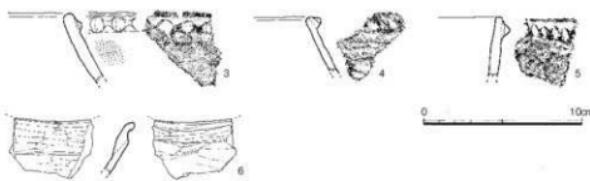
弥生時代の遺構は、掘立柱建物8棟、竪穴住居跡1軒、土坑28基、ピット多数が確認された。いずれも弥生時代早~前期に該当し、弥生土器、打製石器、磨製石器などが出土した。なお、土器の器種については、紙面の都合上、「壺形土器」等の「形土器」を省略し、「壺」「甌」のように記載する。

①掘立柱建物（SB）

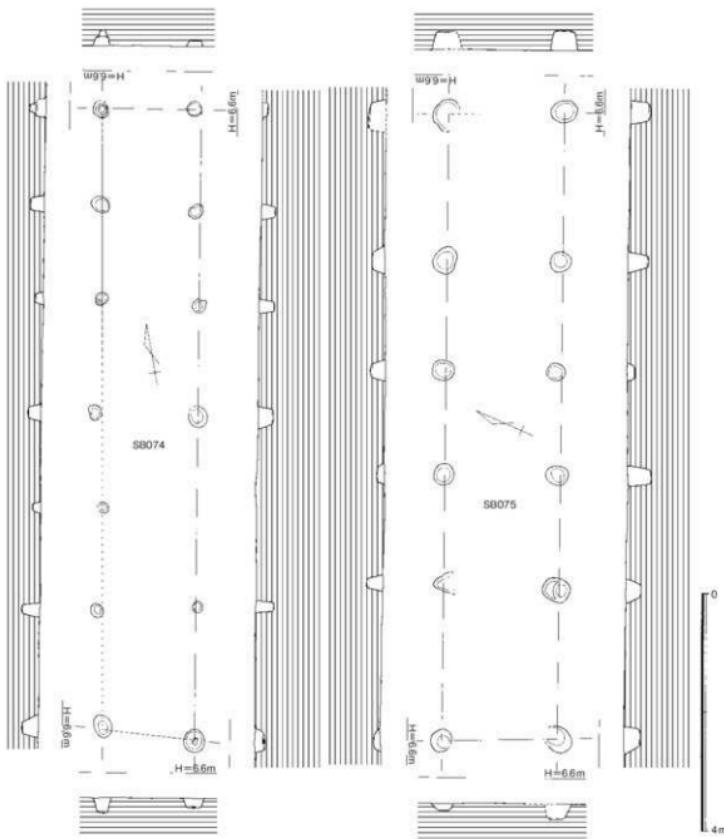
SB063・073（第5図） SB063とSB073は調査区の北端中央に位置し、SB063が先行する。SB063は梁行1間（柱間2.2m）×桁行4間以上（柱間2.2~2.4m）、床面積は20m²以上、主軸方位はほぼ磁北を示す。柱穴は長軸60~80cm、短軸30~50cm、残存の深さは約40cmを測る。平面形はやや楕円形を呈し、柱の抜き取り時に大きく掘り直された可能性が高い。埋土は黒色シルトで、柱痕跡は確認できなかつた。SB073はSB063の柱穴の一部に重なりながら約20cm西側に位置し、主軸方位も同様である。梁行1間（柱間1.9~2.0m）×桁行6間（柱間2.0~2.3m）を検出し、SB063より南側に2間分長く検出した。床面積は約25m²である。柱穴はほぼ円形を呈し、直径20~30cm、残存の深さは約20cmを測る。埋土は黒色シルトで、柱痕跡は確認できなかつた。遺物は、柱穴から弥生土器の破片が出土した。
出土遺物（第5・6図） 2はSB073、3~6はSB063出土。2（SP1109）は甌の底部片。ナデ調整され、外面にススが付着する。復元底径7.0cm。3~5は甌の口縁部。3（SP1235）・4（SP1228）は屈曲甌で、口縁端部の突帯に棒状工具で刻目を施す。5（1238）は口縁端部のやや下に断面三角形の突帯をめ



第5図 SB063・072・073およびSB072・073出土遺物実測図 (1/80、遺物は1/3)



第6図 SB063出土遺物実測図 (1/3)

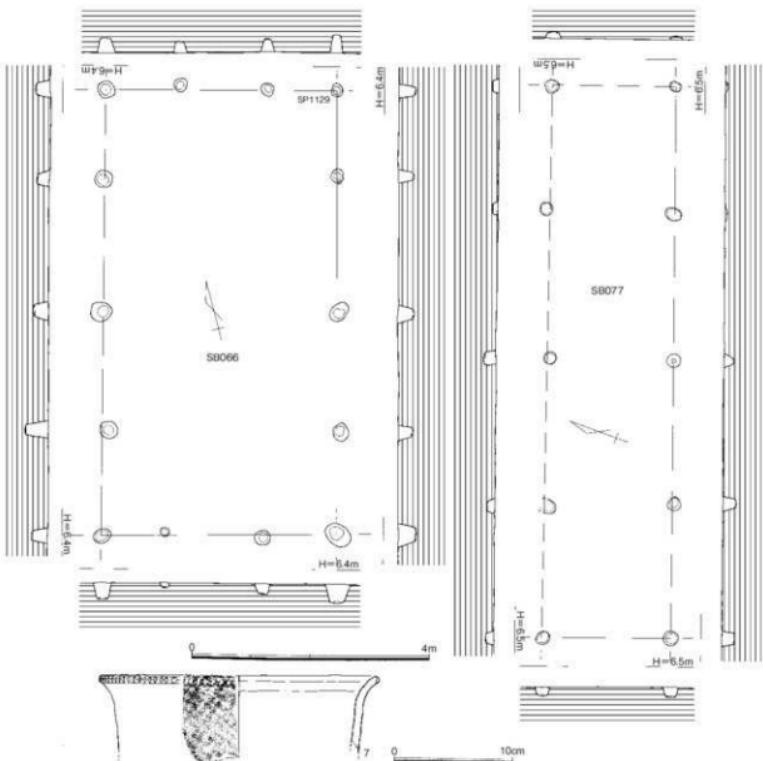


第7図 SB074・075実測図 (1/80)

ぐらし、ヘラ状工具で刻目を施す。6 (1228) は波状口縁を持つ方形浅鉢である。口縁端部を短く折り曲げ、内外面ともに粗いミガキを施す。

SB066 (第8図) 調査区の中央に位置し、梁行3間（柱間距離1.0~1.7m）×桁行4間（柱間距離1.4~2.3m）で、桁行の柱間距離は中央の2間（約2.2m）が広く、両端の2間（約1.5m）は狭い。総床面積は約40m²、主軸方位はN-15°-Eを示す。柱穴は平面円形、直径30cm、残存の深さは10~30cmを測る。埋土はいずれも黒色シルトで、柱痕跡は確認できなかった。遺物は、弥生土器片が出土した。

出土遺物 (第8図) 7 (SP1129) は壺の口縁部。如意形の口縁端部にヘラ状工具で刻目を施す。外面は丁寧な縱方向の工具ナデ、内面は不整方向の工具ナデを施し、外面には黒斑および二次被熱による赤化が見られる。復元口径23.0cm。



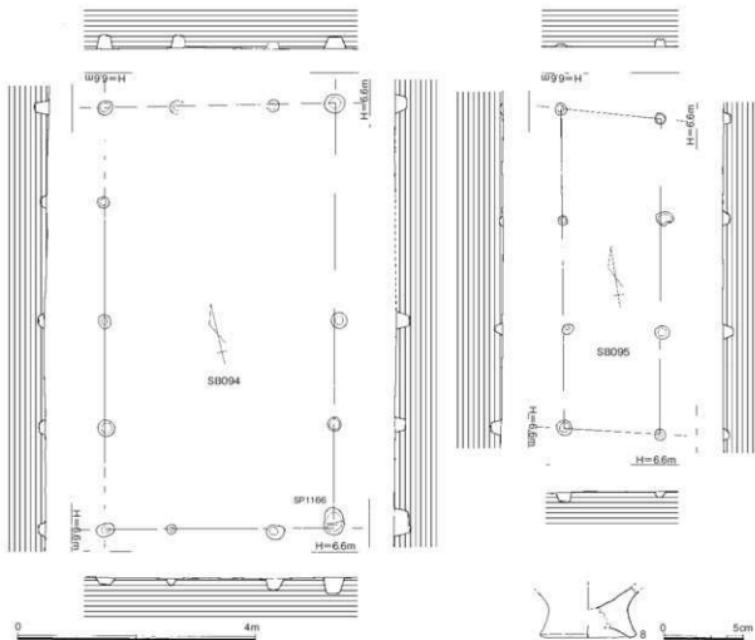
第8図 SB066・077およびSB066出土遺物実測図 (1/80、遺物は1/4)

SB072 (第5図) 調査区の南側中央に位置し、梁行1間（柱間2.0m）×桁行5間（柱間2.1~2.2m）、床面積は21.6m²、主軸方位はN-15°-Eを示す。柱穴は平面円形で、直径30~40cm、残存の深さは約20cmを測り、埋土は黒色シルトである。大部分の柱穴に柱痕跡が確認され、その直径は約20cmを測る。遺物は、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物（第5図） 1(P11)は屈曲壺の胴部片である。屈曲部の突帯に棒状工具により刻目を施し、内面は横位のハケ目を残す。

SB074 (第7図) 調査区の北側中央に位置し、梁行1間（柱間1.7m）×桁行6間（柱間1.6~2.0m）、床面積は17.2m²、主軸方位はN-12°-Eを示す。柱穴は直径20~30cmの円形で、残存の深さは20~30cmを測る。埋土は黒~黒褐色シルトである。遺物は、弥生土器片が少量出土した。

SB075 (第7図) 調査区の北側中央に位置し、梁行1間（柱間1.9m）×桁行5間（柱間1.8~2.5m）で、桁行の柱間距離は中央3間（1.8~1.9m）が狭く、両端2間（2.5~2.6m）が広い。床面積は20m²、主軸方位はN-67°-Eを示す。柱穴は直径30~40cmの円形で、残存の深さは15~40cmを測る。埋土はいずれも黒色シルトである。遺物は、弥生土器片が少量出土した。



第9図 SB094・095およびSB094出土遺物実測図 (1/80、遺物は1/3)

SB077 (第8図) 調査区の南東端に位置し、現状で梁行1間（柱間2.1m）×桁行4間（柱間2.2~2.4m）だが、東側は削平が及んでいるため、桁行は東側へ1間以上延びる可能性がある。床面積は24m²以上、主軸方位はN-69°-Eを示す。柱穴は直径20cmの円形で、残存の深さは5~30cmを測る。埋土は黒色シルトである。遺物は、弥生土器片が少量出土した。

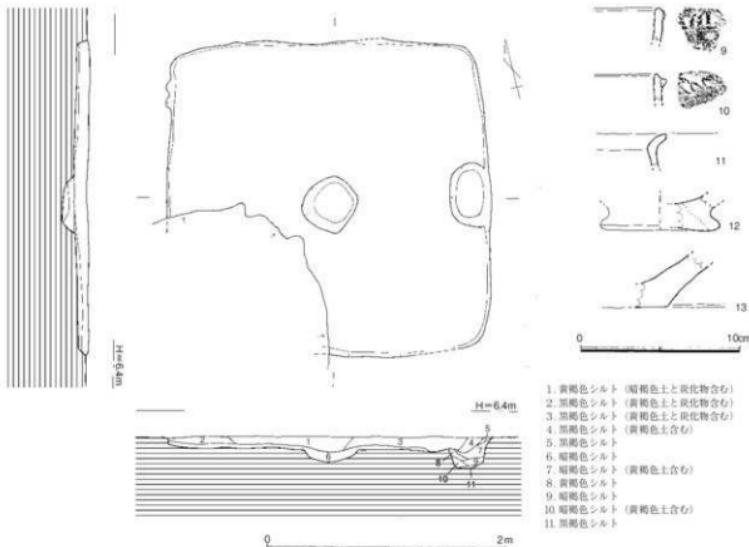
SB094 (第9図) 調査区の北側中央に位置し、梁行3間（柱間1.0~1.7m）×桁行4間（柱間1.7~1.9m）、床面積は27m²、主軸方位はN-13°-Eを示す。柱穴は直径30~40cmの円形で、残存の深さは15~30cmを測る。埋土は黒色シルトである。遺物は、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物（第9図）8(SP1166)は壺の底部片。内面にススが付着する。復元底径6.0cm。

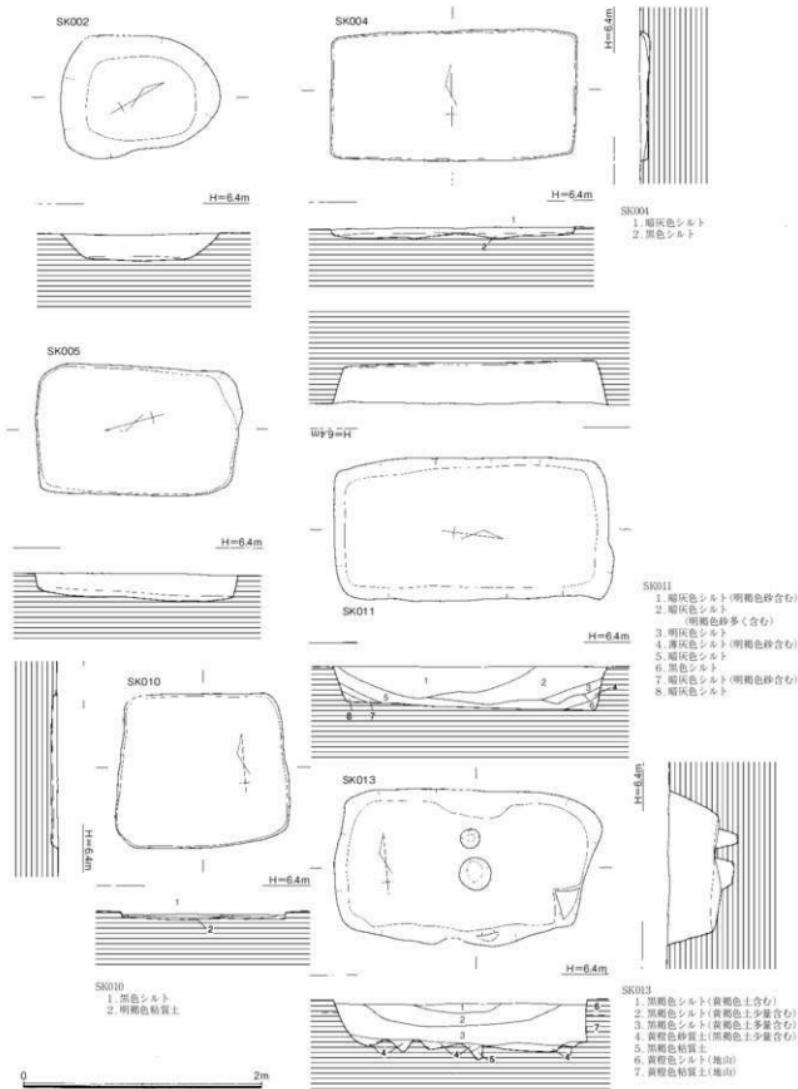
SB095 (第9図) 調査区の中央に位置し、梁行1間（柱間1.7m）×桁行3間（柱間1.7~1.9m）、床面積は9.2m²、主軸方位はN-7°-Eを示す。柱穴は直径20cmの円形で、残存の深さは20cmを測る。埋土は黒色シルトである。遺物は、弥生土器片が少量出土した。

②竪穴住居跡 (SC)

SC012 (第10図) 長軸2.72m、短軸2.69m、残存の深さ10cmで、平面形はほぼ正方形を呈す。南西隅は擾乱を受け欠失する。中央には不整円形、東壁中央には梢円形の小土坑を有す。竪穴内に支柱穴は



第10図 SC012および出土遺物実測図 (1/40、遺物は1/3)



第11図 SK002・004・005・010・011・013実測図 (1/40)

確認できない。埋土は、黒灰色土と黄褐色土がブロック状に混じり、レンズ状に堆積する。遺物は、弥生土器小片と磨製石斧（第80図598）が出土した。

出土遺物（第10図） 9・10は壺の口縁部片。9は口縁端部の低い突帶に、10は断面三角形のやや高い突帶に刻目を施す。11は丹塗磨研壺の口縁部片で、内外面ともに赤色顔料・研磨を施すが摩滅する。12は壺の底部片で、内外面ともにナデ調整。復元底径7.4cm。13は壺の底部片で、外面を研磨する。

③土坑（SK）

SK002（第11図） 調査区の中央西端に位置し、長軸1.3m、短軸1.0m、残存の深さ30cmで、平面形は橢円形を呈す。埋土は、黒褐色シルトの單層である。遺物は、多量の弥生土器片と石鐵（第78図578）が出土した。

出土遺物（第12図） 14～21は刻目突帶文の壺である。17・19は棒状工具、その他はヘラ状工具により刻目を施す。14は外面下部に継位、上部に横位の貝殻条痕を残す。口径20.5cm。15の外面は貝殻条痕をナデ消し、内面は斜位の工具ナデを施す。復元口径22.6cm。16は胴部下位が欠失するが同一個体である。口縁部突帶の下位は粗いハケ目を横位にナデ消しし、胴部は粗い継位の研磨を施す。胴部下位には継位の粗いハケ目が残る。内面は横位の粗いハケ目をナデ消しし、底部内面は幅広い板状工具で横向方に調整したのち指で押さえる。復元口径30.6cm、復元底径8.0cm。19は外面に貝殻条痕を残す。20は乳頭状、21は断面台形の突帶を口縁部に巡らし、ヨコナデ調整を施す。22は壺の底部で、底部に外方向から敲打穿孔する。復元底径6.5cm。孔径2.1cm。23・24は丹塗磨研壺である。23は外面、24は外面から内面口縁部付近にかけて赤色顔料を施す。復元口径は、23が21.2cm、24が22.2cm。

SK004（第11図） 調査区の中央東寄りに位置し、長軸2.0m、短軸1.1m、残存の深さ10cmで、平面形は長方形、底面は平坦である。底面隅に黒色シルト、中央部には黄褐色シルトがレンズ状に堆積する。遺物は弥生土器片が少量出土したが、小片のため図示できなかった。

SK005（第11図） 調査区の中央東寄り、SK004の北側に隣接し、長軸1.7m、短軸1.1m、残存の深さ20cm、平面形は長方形、底面は平坦である。壁面は直立気味に立ち上がる。大きめの黄褐色ブロックが混入する黒色シルトを主体とし、レンズ状に堆積する。遺物は弥生土器小片が出土した。

出土遺物（第12図） 25・26は壺の口縁部で、いずれも口縁下端部の突帶に棒状工具で刻目を施す。26は外面に横位のハケ目を残す。27は壺の底部で、底面器厚は薄く、端部は高台状にのびながら厚く仕上げ、設置面を平坦にする。外面に継位のハケ目を残す。底径7.2cm。28は壺の底部で、復元底径7.6cm。29は壺蓋口縁部で、端部を丸く仕上げる。

SK010（第11図） 調査区の中央北寄りに位置し、長軸1.3m、短軸0.8m、残存の深さ5cmで、平面形はほぼ正方形を呈し、底面は平坦である。埋土は黒色シルトを主体とする。遺物は弥生土器小片が少量出土した。

出土遺物（第12図） 30は壺の口縁部である。口縁下端部の突帶にヘラ状工具により刻目を施す。

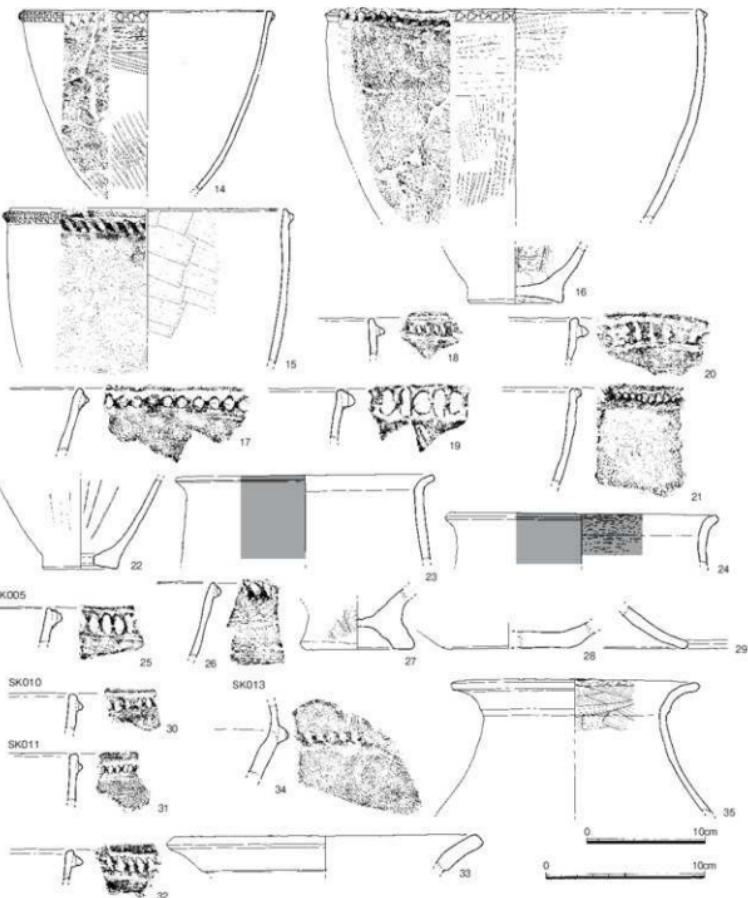
SK011（第11図）

調査区の中央北寄り、SB073の南端に重複して確認された。長軸23m、短軸1.2m、残存の深さ約40cmで、平面形は長方形を呈し、底面は平坦である。壁面はほぼ直立し、埋土は暗灰色シルトを主体としてレンズ状に堆積する。遺物は弥生土器片が出土した。

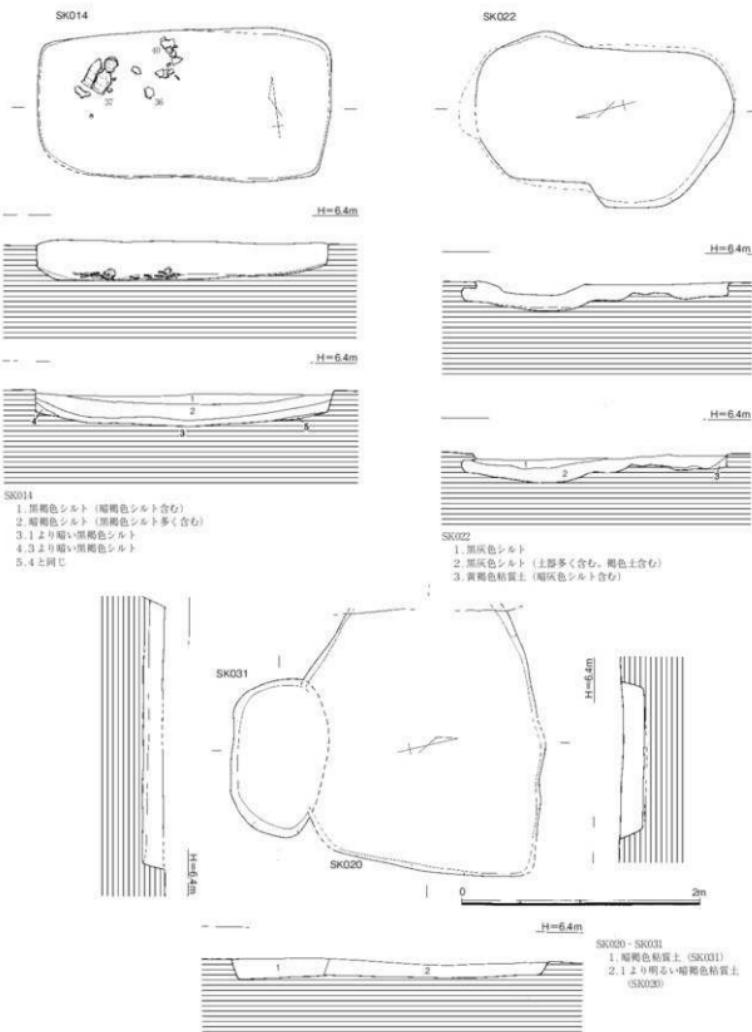
出土遺物（第12図） 31・32は壺の口縁部である。31はやや低い突帯にヘラ状工具、32はやや高い断面三角形の突帯に棒状工具で刻目を施す。33は壺の口縁部片で、口縁部と頸部の境が段をなす。復元口径19.0cm。

SK013（第11図） 調査区のはば中央、SC012の北側に隣接し、長軸2.1m、短軸1.3m、残存の深さ40cmで、平面形は長方形を呈す。底面は平坦で、中央付近に2つのピットを伴う。壁面はばば直立し、埋土は黒色シルトを主体としてレンズ状に堆積し、底面付近は地山土を多く含む。1・2層を上層、3層

SK002



第12図 SK002・005・010・011・013出土遺物実測図（14～16・35は1/4、その他は1/3）



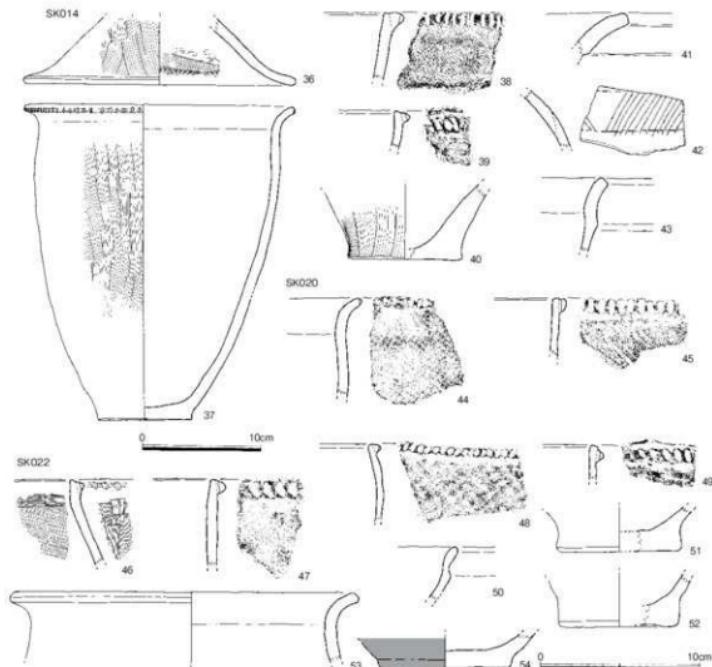
第13図 SK014・020・022・031実測図 (1/40)

以下を下層として遺物を取り上げた。遺物は弥生土器片が出土した。

出土遺物（第12図） 34は上層、35は下層出土。34は屈曲壺の胴部片で、屈曲部に貼り付けた断面三角形の突帯に棒状工具で刻目を施す。35は壺の口縁～頸部片。口縁部と頸部の境が段をなす。内面は横位のハケ目を残す。復元口径20.2cm。

SK014（第13図） 調査区の中央西寄りに位置し、長軸2.5m、短軸1.2m、残存の深さ35cmで、平面形は長方形を呈す。壁面は直立し、底面はほぼ平坦である。埋土は黒色シルトを主体にレンズ状に堆積し、褐色土の混入具合で分層した。遺物は弥生土器片が出土し、底面直上ではほぼ完形の壺と蓋が出土した。

出土遺物（第22図） 38・41・43は上層、その他は底面付近出土。36は壺蓋、37は完形の壺で、両者はセットになる可能性が高い。36は外面に縱位のハケ目、内面に横位のハケ目を残す。内面にはスグが付着する。復元口径22.3cm。37は如意形口縁の板付系壺で、口縁端部にヘラ状工具で細かい刻目を施す。外面は縱位のハケ目を残し、内底面にコゲが付着する。また、胴部外面上方にモミ压痕が残る。口径22.3cm、器高26.5cm、底径8.0cmを測る。38・39は刻目突帯文の壺口縁部で、いずれも細い棒状



第14図 SK014・020・022出土遺物実測図 (36・37は1/4、その他は1/3)

工具で刻目を施す。40は壺底部。外面は縱位のハケ目を残し、内面にコゲが付着する。復元口径7.2cm。41は壺の口縁部片。口縁端部はヨコナデにより強くおさえ、口縁部と頸部の境が段をなす。42は壺の胴部片で、各1条の2本の沈線間に斜線文を施す。彩色はない。43は深鉢の口縁部片。肩部が緩やかに屈曲する。

SK020（第13図） 調査区の北西に位置し、南辺をSK031に、西辺をSK030に切られる。長軸2.2m、短軸1.9m、残存の深さ15cmで、平面形は不整正方形を呈す。底面はほぼ平坦で、埋土は暗褐色粘質土である。遺物は弥生土器片が少量出土した。

出土遺物（第22図） 44・45は壺の口縁部である。44は如意形口縁の端部にヘラ状工具で細かく刻目を施す。外面にスス付着。45は外面に斜位の貝殻条痕を残し、ススが付着する。

SK022（第13図） 調査区の中央西端に位置し、長軸2.1m、短軸1.1m、残存の深さ25cmで、平面形は隅丸長方形を呈す。壁面は抉れ、底面は凹凸が著しい。埋土は黒灰色シルトを主体にレンズ状に堆積する。遺物は弥生土器片が多く出土し、1層を上層、2層を下層として取り上げた。

出土遺物（第14図） 53は上層、48は下層出土。46～49は刻目突帯文の壺の口縁部で、46・47はヘラ状、48は細い棒状、49は棒状工具により施し、いずれも外面にススが付着する。46は屈曲壺で、胴部内面は斜位の貝殻条痕、口縁内部は横位のハケ目調整の後、ヨコナデを施す。外面は上方から縱位のハケ目調整を施す。50は浅鉢の口縁部片で、研磨を施すが摩滅する。51・52は壺の底部片。53・54は丹塗磨研壺で、外面に赤色顔料を施す。53は復元口径20.0cm。54は復元底径8.1cm。

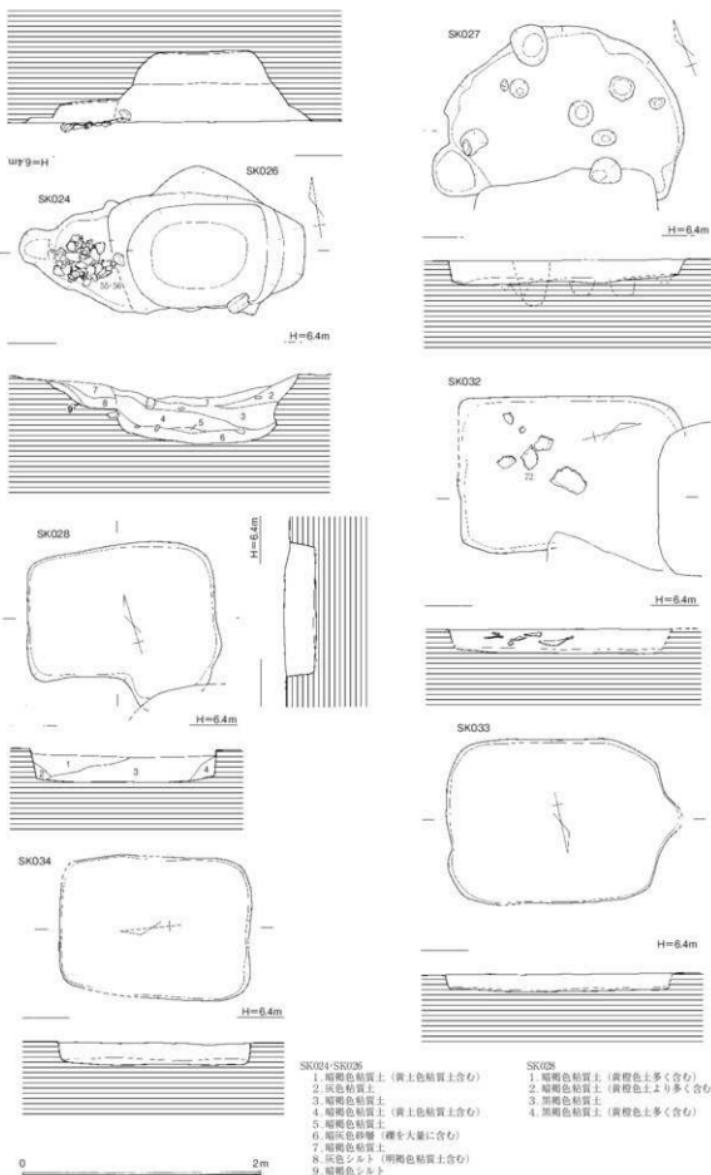
SK024（第15図） 調査区の北西端に位置し、東半をSK026に切られる。長軸0.8m以上、短軸0.5m、残存の深さ20cmで、平面形は不整橢円形を呈す。埋土は黒褐色シルトがレンズ状に堆積する。遺物は、7層上面からほぼ完形の壺2個体が出土した。

出土遺物（第16図） 55・56は刻目突帯文の壺である。55は口縁下部に断面三角形の突帯を貼り付け、ヘラ状工具で施する。外面は下方から縱位のケズリ調整、口縁部付近はヨコナデ調整を施す。内面は横位のケズリ、内底部はナデで仕上げる。口径23.2cm、器高23.8～25.2cm、底径8.4cm。56は口縁からやや下がった位置に断面台形の突帯を貼り付け、棒状工具で施す。外面は斜位～横位の貝殻条痕を残し、口縁部付近はナデ消される。内面は横位のケズリを施す。胴部外面上半には黒斑とススが付着、下半は二次被熱により赤化する。口径22.1cm、器高24.3cm、底径8.0cm。

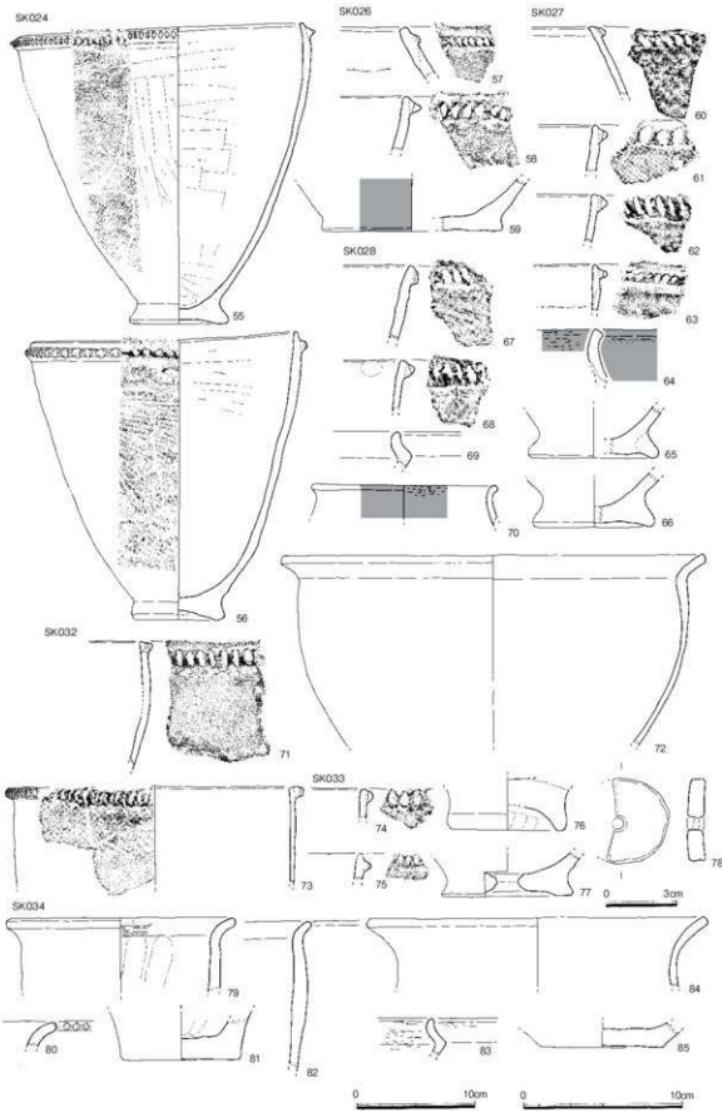
SK026（第15図） SK024の東半を切る。長軸1.5m、短軸1.0m、残存の深さ45cmで、平面形は隅丸長方形を呈し、壁面はほぼ直立する。埋土は地山土（黄色土）を含む暗褐色粘質土を主体とし、レンズ状に堆積する。遺物は弥生土器片が少量出土した。

出土遺物（第16図） 57・58は刻目突帯文の壺の口縁部片。57は屈曲壺で、口縁部よりやや下方に断面台形の低い突帯を貼り付け、ヘラ状工具で施す。内面は横位のケズリを施す。58は口縁下部に断面三角形のやや高い突帯を貼り付け、棒状工具で施す。内面は横位のケズリを施す。59は壺の底部片で、外面に赤色顔料を施す。復元底径11.2cm。

SK027（第15図） 調査区の北端西寄りに位置し、南側をSK028に切られる。長軸2.0m、短軸1.2m以上、残存の深さ20cmで、平面形は不整円形を呈す。壁面は直立し、平坦な底面にピットを伴う。埋土は黒色シルトの単層で、遺物は弥生土器片が少量出土した。



第15図 SK024・026~028・032~034実測図 (1/40)



第16図 SK024・026~028・032~034出土遺物実測図 (55・56・71~73・84は1/4、78は1/2、その他は1/3)

出土遺物（第16図） 60～63は刻目突帯文の壺の口縁部片で、60～62は棒状工具、63はヘラ状工具で施文し、いずれもナデ調整を主体とする。60は屈曲壺で、口縁端部内側を強くナデる。61は断面三角形の突帯の下部が沈線上に凹む。62は断面三角形の高い突帯に細い棒状工具で深く刻目を入れる。63の突帯は乳頭状に高く突出し、下部を強くナデる。64は丹塗磨研壺あるいは浅鉢の口縁部で、端部は角張る。内外面ともに赤色顔料・研磨を施す。外面口縁下部はハケ目調整後、研磨する。65・66は壺の底部で、調整は摩滅のため不明である。

SK028（第15図） SK027の南側に位置し、それを切る。長軸1.5m、短軸1.1m、残存の深さ25cm。平面形は長方形を呈す。埋土は暗褐・黒褐色粘質土が堆積する。遺物は弥生土器片が少量出土した。

出土遺物（第16図） 67・68は刻目突帯文の壺の口縁部。67は断面台形の低い突帯に棒状工具で施文し、外面は斜位の貝殻条痕を残す。68は断面三角形の突帯にヘラ状工具で施文する。外面は横位の貝殻条痕がナデ消される。69は浅鉢の口縁部片で、摩滅が著しい。端部はやや窄まり、丸く仕上げる。70は丹塗磨研壺の口縁部で、口縁下端部に稜がつく。内外面ともに赤色顔料・研磨を施す。復元口径14.8cm。

SK032（第15図） 調査区の北側、SK031の南側に位置し、それに切られる。長軸1.9m、短軸1.3m、残存の深さ20cmで、平面形は長方形を呈す。壁面はほぼ直立、底面は平坦である。埋土は黒褐色土の単層で、遺物は弥生土器が出土した。

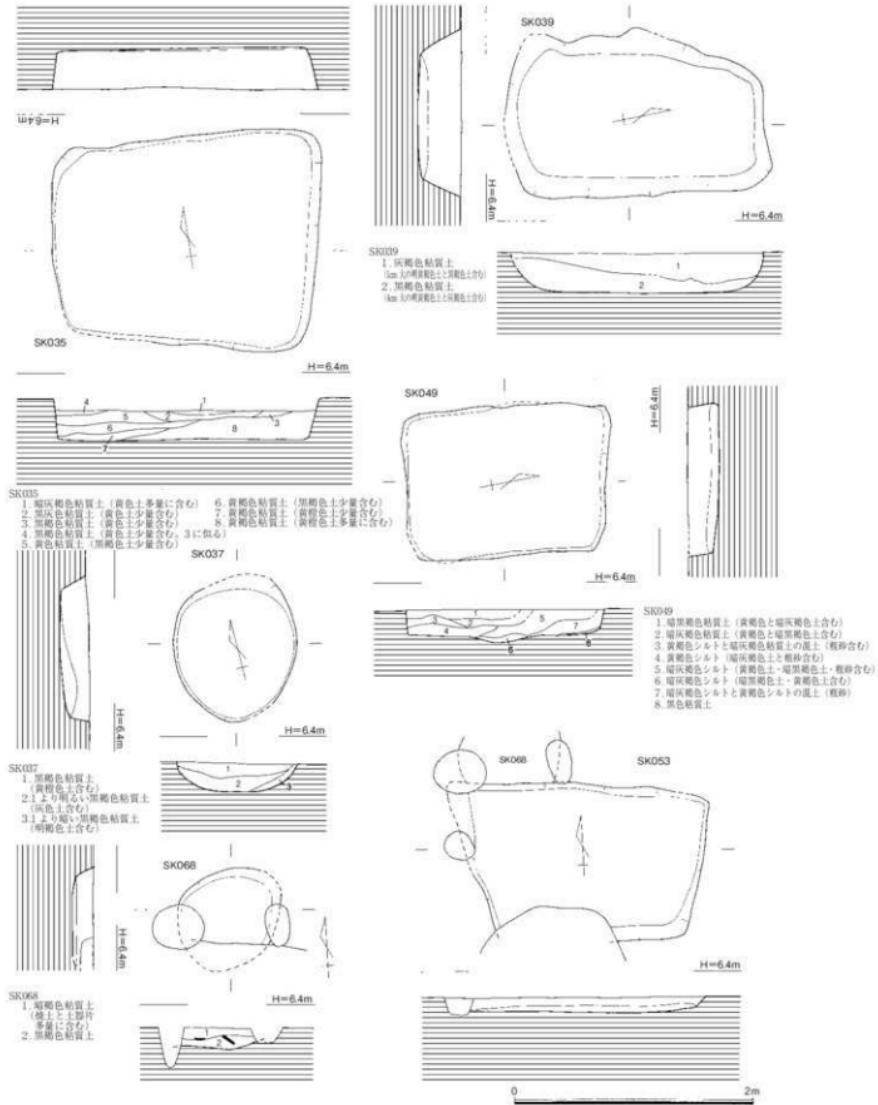
出土遺物（第16図） 71・73は刻目突帯文壺の口縁部である。71は細い棒状工具で施文し、外面にススが付着する。73は断面台形の高い突帯にヘラ状工具で施文する。外面に斜位の貝殻条痕を残す。72は底面から約2～5cm浮いた状態で集中的に出土した。如意形口縁の深鉢で、胴部は丸みを帯びる。胎土に砂粒を多く含み、全体に摩滅が著しい。内面が黒化する。復元口径35cm。78は壺の胴部片を転用した有孔円盤形土製品で、全長3.6cm、厚さ6.6mm、孔径4mmを測る。敲打で全体を丸く成形した後、中央に回転穿孔を施す。外面は灰黄褐色（10YR5/2）、内面はにぶい黄褐色（10YR7/3）。

SK033（第15図） 調査区の北側、SK032の南側に位置し、長軸1.8m、短軸1.3m、残存の深さ15cmで、平面形は長方形を呈す。壁面はほぼ直立、底面は平坦である。埋土は黒褐色土の単層で、遺物は弥生土器片が少量と土製紡錘車が出土した。

出土遺物（第16図） 74・75は刻目突帯文の壺の口縁部片で、いずれもヘラ状工具で施文する。76・77は壺の底部片である。76は高台状を呈し、外底面・外面を粗くケズる。77は外底面をケズり、外面をヨコナデ調整し、焼成後に底部中央を外方向から敲打して穿孔する。復元底径8.2cm、孔径1.3cm。

SK034（第15図） 調査区の北西寄り、SK032の南側に位置し、長軸1.6m、短軸1.2m、残存の深さ20cmで、平面形は長方形を呈す。壁面はほぼ直立、底面は平坦である。埋土は黒褐色土の単層で、遺物は弥生土器片が出土した。

出土遺物（第16図） 80は如意形口縁の壺、79・82は浅鉢の口縁部片である。79は内面を指でナデ上げ、口縁内縁は横位のハケを施す。全体に二次被熱により赤化し、摩滅が著しい。80は口縁端部にヘラ状工具で細かく施文する。82は胎土に砂粒を多く含み、摩滅が著しい。81は壺の底部片。外底面は軽くケズる。内底面はコケが付着する。83は浅鉢の口縁部片で、内外面ともに丁寧に研磨する。84は壺の口縁部で、端部がやや角張る。胎土に砂粒を多く含み、摩滅が著しい。85は壺の底部片。外底面はケズり調整。胎土に粒の粗い砂粒を多く含む。



第17図 SK035・037・039・049・053・068実測図 (1/40)

SK035（第17図） 調査区の中央北西寄り、SK032の南側に位置し、長軸2.2m、短軸1.8m、残存の深さ25cmで、平面形は長方形を呈す。壁面はほぼ直立、底面は平坦である。埋土は上層に黒褐色粘質土、下層に地山上に近い黄褐色粘質土がレンズ状に堆積する。遺物は弥生土器小片が少量出土した。

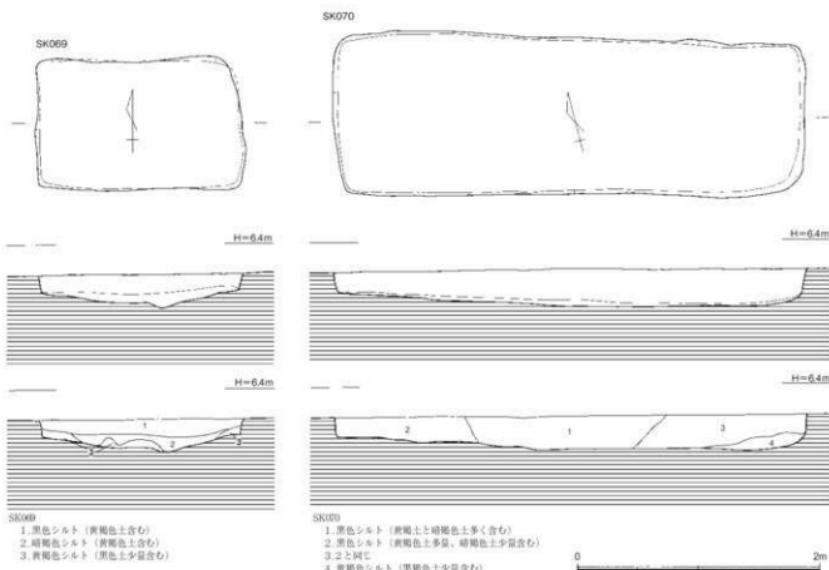
出土遺物（第19図） 86は浅鉢の口縁部片。口縁部はヨコナデ、内面は研磨する。87は甕の底部片。高台状を呈し、端部が外方に開く。復元底径7.9cm。

SK037（第17図） 調査区の北西寄りに位置し、長軸1.2m、短軸1.0m、残存の深さ25cmで、平面形は不整円形を呈す。壁面・底面ともに湾曲する。埋土は黒褐色粘質土がレンズ状に堆積し、遺物は弥生土器片が少量出土した。

出土遺物（第19図） 88は甕の底部片である。外面は上方向に木目の細かい板状工具の小口でナデ上げ、内面は指で押さえる。復元底径7.9cm。

SK039（第17図） 調査区の中央北西寄りに位置し、長軸2.2m、短軸1.3m、残存の深さ30cmで、平面形は長方形を呈す。壁面は湾曲し、底面は平坦面をなす。埋土は上層に灰褐色粘質土、下層に黒色粘質土が堆積する。遺物は弥生土器小片が少量出土した。

出土遺物（第19図） 89・90は甕の口縁部片。89は口縁端部に断面半月形の突帯を貼り付け、細い棒状工具で刻目を施す。90は端部が角張る如意形口縁にヘラ状工具で細かい刻目を施す。91は浅鉢の口縁部片で、内外面ともに研磨するが摩滅が著しい。内面が黒化する。



第18図 SK069・070実測図 (1/40)

SK049（第17図） 調査区の中央西寄りに位置し、長軸1.8m、短軸1.3m、残存の深さ25cmで、平面形は長方形、壁面は直立し、底面はやや凹凸がある。埋土は下層から暗灰色シルト、地山由来の黄褐色シルト、黒～黒灰色粘質土の順にレンズ状に堆積する。遺物は弥生土器小片が少量出土した。

出土遺物（第19図） 92は如意形口縁の壺で、端部にヘラ状工具で刻目を施す。93は浅鉢の口縁部片で、端部を短く外反させる。

SK053（第17図） 調査区の北西寄りに位置し、SK068を切る。長軸1.9m、短軸1.3m、残存の深さ15cmで、平面形は不整長方形を呈す。壁面は外傾し、底面は平坦面をなす。埋土は黒褐色粘質土が堆積する。遺物は出土しなかった。

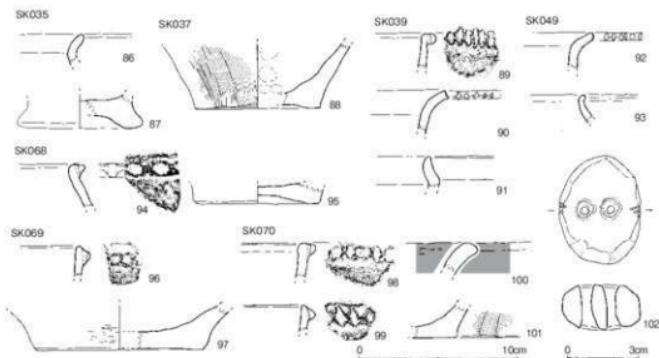
SK068（第17図） SK053に北西隅を切られる。長軸0.9m以上、短軸0.8m以上、残存の深さ20cmで、平面形は不整円形を呈す。埋土は上層に暗褐色、下層に黒褐色粘質土がレンズ状に堆積し、被燃した土器片や焼土を多く含む。遺物は弥生土器小片が出土した。

出土遺物（第図） 94は刻目突帯文の屈曲壺の口縁部である。断面三角形の突帯に棒状工具で施文する。95は壺の底部片で、内底面を丁寧にナデる。

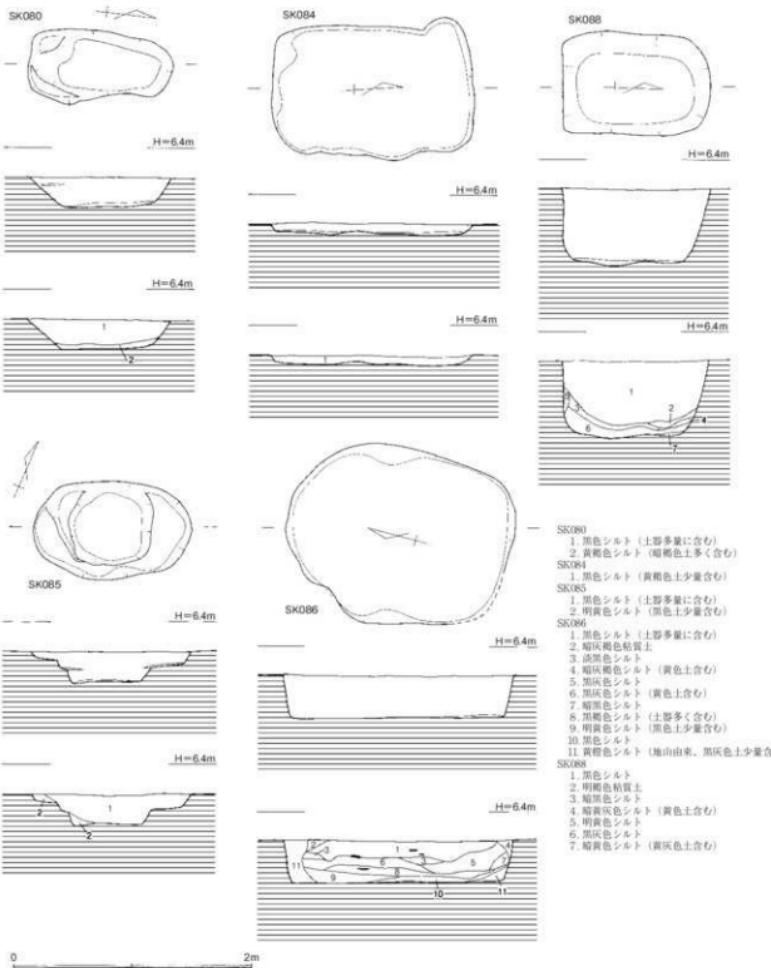
SK069（第18図） 調査区の西端南寄りに位置し、長軸1.7m、短軸1.0m、残存の深さ25cmで、平面形は長方形を呈す。壁面は直立し、底面はやや凹凸がある。埋土は上層に黒色シルト、下層に地山由来の黄褐色シルトがレンズ状に堆積する。遺物は弥生土器小片が少量出土した。

出土遺物（第19図） 96は刻目突帯文の壺の口縁部で、断面三角形の突帯に棒状工具で施文する。97は壺の底部片で、外面は横方向に研磨を施す。復元底径10.5cm。

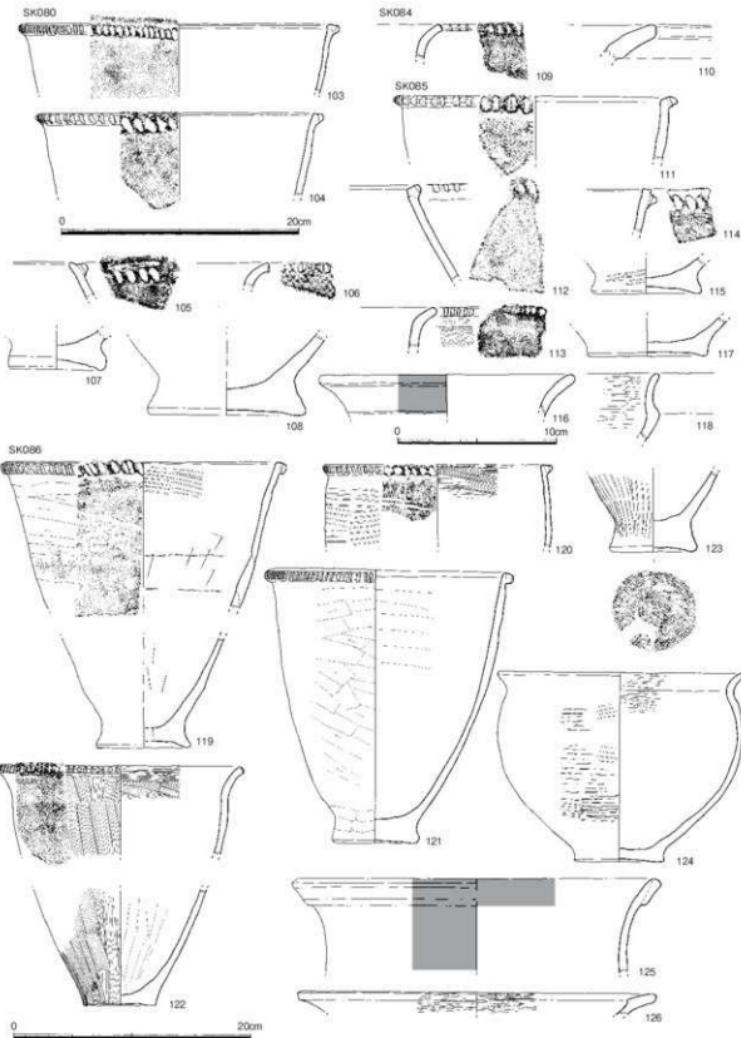
SK070（第18図） SK069の南西に隣接し、長軸3.9m、短軸1.3m、残存の深さ30cmで、平面形は長方形を呈す。壁面は直立し、底面は平坦である。埋土は地山由来の黄褐色土を多く含む黒色シルトを主体としてレンズ状に堆積する。遺物は弥生土器小片と土錘が出土した。



第19図 SK035・037・039・049・068～070出土遺物実測図（102は1/2、その他は1/3）



第20図 SK080・084~086・088実測図 (1/40)



第21図 SK080・084～086出土遺物実測図（103・104・119～126は1/4、その他は1/3）

出土遺物（第19図） 98・99は刻目突帯文の甕の口縁部片で、断面三角形の突帯に98は棒状、99はヘラ状工具で施文する。100は丹塗磨研壺の口縁部片。101は甕の底部片で、外面に縦位のハケ目調整を施す。102は土錘で、中心付近に短軸に平行して2つの孔を両側から回転穿孔する。長さ4.55cm、幅3.4cm、厚さ1.9cm、孔の直径は4mmを測る。両側面に孔にかけた紐の痕跡が残る。

SK080（第20図） 調査区の中央南寄りに位置し、長軸1.2m、短軸0.5m、残存の深さ25cmで、平面形は不整楕円形を呈す。壁面は外傾し、底面は平坦である。埋土は黒色シルトが堆積する。遺物は弥生土器小片が多量に出土した。

出土遺物（第21図） 103～106は刻目突帯文の甕の口縁部。103・104は断面台形の突帯に棒状工具で刻目を施し、外面にススが付着する。復元口径は103が24.8cm、104が22.2cm。105は屈曲甕で、断面三角形の突帯に棒状工具で施文する。106は如意形口縁の端部にヘラ状工具で細かく刻目を施す。107は甕の底部で、外底面に貝殻条痕を残す。外面にはススが付着し、二次被熱により赤化する。底径6.1cm。108は甕の底部片。外底面に指頭圧痕を残し、外面は二次被熱により赤化する。底径9.8cm。

SK084（第20図） 調査区の中央南寄り、SB072の西側に位置し、長軸1.7m、短軸1.3m、残存の深さは5cmと非常に浅く、平面形は隅丸長方形を呈す。底面はほぼ平坦で、黒色シルトが堆積する。遺物は弥生土器小片が少量出土した。

出土遺物（第21図） 109は如意形口縁の端部にヘラ状工具で細かく刻目を施す。110は壺の口縁部片である。口縁部と頸部の境が段をなす。

SK085（第20図） 調査区の中央南東寄り、SB072の東側に位置し、長軸1.3m、短軸0.8m、残存の深さ25cmで、平面形は不整楕円形を呈す。壁面は中段にテラスがめぐり、底面は平坦面をなす。埋土は黒色シルトが堆積する。遺物は弥生土器小片が多量に出土した。

出土遺物（第21図） 111～114は甕の口縁部片。111は口縁部断面台形の高い突帯に棒状工具で施文し、内外面ともにヨコナデ調整を施す。復元口径15.5cm。112は屈曲甕で、断面台形の突帯に棒状工具で刻目を施す。113は如意形口縁の端部にヘラ状工具で施文し、外面に斜へ縦位のハケ目を残す。114は口縁端部が角張り、やや下方に貼り付けた断面三角形の突帯に棒状工具で施文する。外面は斜位の貝殻条痕を残す。115・117は甕の底部。115は外面に貝殻条痕を残す。底径6.8cm。117は底径7.5cm。116は壺の口縁部片。内外面ともに赤色顔料が摩滅する。復元口径15.4cm。118は浅鉢の口縁部片。内面に研磨痕を残す。

SK086（第20図） 調査区の中央南東寄り、SB066の南東に位置し、長軸1.9m、短軸1.4m、残存の深さ35cmで、平面形は不整な隅丸長方形を呈す。壁面はほぼ直立し、底面は平坦である。埋土は黒・黒灰・黒褐色シルトと地山由来の黄褐色土を主体としてレンズ状に堆積する。遺物は、1層を上層、2～6層を中層、8～10層を下層として取り上げ、特に下層から残存状況が良い弥生土器が多く出土した。

出土遺物（第21図） 119～121は刻目突帯文の甕で、いずれも断面台形の突帯に棒状工具で施文する。119は外面をヘラケズリおよびハケ目調整した後、ヨコナデで仕上げる。内面口縁部付近は貝殻条痕をナデ消し、胴～底部は縦位のヘラナデを施す。復元口径22.2cm、器高22.7cm以上、復元底径7.6cm。120は外面に横位の貝殻条痕を残し、突帯下部はヨコナデで消す。内面の口縁部付近は木目の細かい板状工具の小口で横方向にナデる。口径17.2cm。121は外面に斜位、内面に横位のヘラケズリを施す。口

径19.0cm、器高22.7~23.1cm、底径6.6cm。122は如意形口縁の甕で、口縁部にヘラ状工具で施文する。外面に縦位のハケ目、内面口縁付近に横位のハケ目を残し、内底面はヘラナデを施す。口径20.2cm、器高17cm以上、底径6.2cm。124は深鉢で、口縁は如意形を呈す。外面胴部は横位の貝殻条痕、底部はナデ、外底面はケズリ、内面は横位の研磨を施す。復元口径20.6cm、器高10.9cm、復元底径7.1cm。125は丹塗磨研壺の口縁へ頸部片。外面から口縁部内面にかけて赤色顔料を施す。復元口径29.8cm。126は高坏坏部の口縁部。内外面ともに丁寧に研磨を施す。復元内径25.4cm、外径30.0cm。

SK088（第20図） SK086の南東に位置し、長軸1.3m、短軸0.8m、残存の深さ65cmと深く、平面形は隅丸長方形を呈す。壁面はほぼ直立し、底面は平坦である。埋土は黒色シルトを主体とし、レンズ状に堆積したのち、一気に埋没したものと考えられる。遺物は出土しなかった。

3) 古代以降

古代以降の遺構は、柵列8条、掘立柱建物5棟以上、溝4条、井戸17基、土坑8基、土塙墓1基、不明遺構3基（池状遺構1、銅錢埋納小土坑2）のほか、ピット多数が検出された。時期は、10世紀から12世紀にかけての古代後期から中世前期を中心とするが、一部近世以降の遺構が含まれる。遺物は、土師質土器、陶磁器、陶器、滑石製石鍋、銅錢、鐵器などが出土した。なお、以下に記載する陶磁器の分類は『大宰府条坊跡XV』（太宰府市教育委員会、2000年）に準ずる。

①柵列（SA）

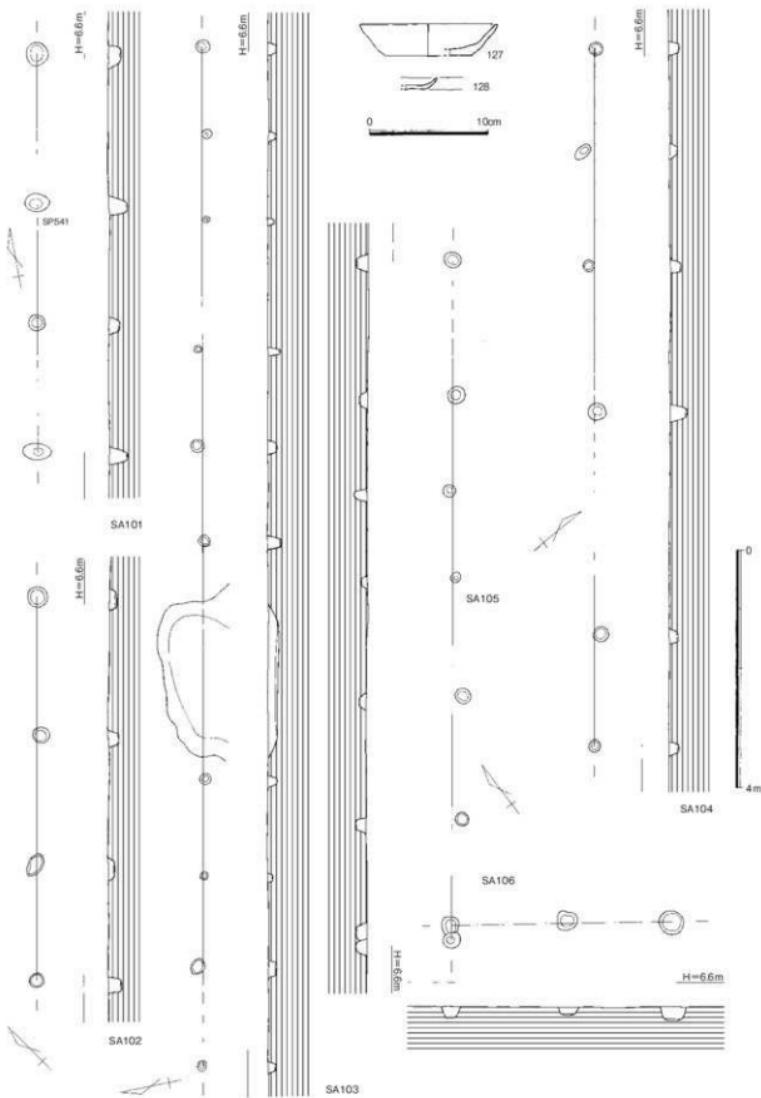
SA101（第22図） 調査区の北西隅に位置し、3間分、長さ6.6mを検出した。調査区外（北側）にさらに延びる可能性もある。柱間距離は20~25mである。主軸方位はN=11°-Eを示す。柱穴は直径30~40cmの円形を呈し、残存の深さは30cmを測る。遺物は、SP541から土師質土器片が少量出土した。
出土遺物（第22図） 127は土師質土器の坏。回転ナデ成形。外底面に板状圧痕を残す。橙色（5YR7/8）。復元口径11.6cm、器高2.7cm、復元底径7.6cm。128は皿。外底面に糸切り痕を残す。砂粒多く含む。明黄橙色（10YR7/6）。

SA102（第22図） 調査区の北西隅、SA101の東側に位置し、3間分、長さ6.4mを検出した。柱間距離は2.1~2.3mである。主軸方位はN=45°-Eを示し、後述するSB097のすぐ西側1mを平行して走ることから、この掘立柱建物に伴う可能性がある。柱穴は直径30cmの円形を呈し、残存の深さは20cmを測る。遺物は出土しなかった。

SA103（第22図） 調査区の北西側を東西に走り、10間分、長さ21.5mを検出した。柱間距離は1.8~2.5mである。主軸方位はN=78°-Wを示し、後述するSB064と主軸方向が一致する。柱穴は直径10~20cmの円形を呈し、残存の深さは20cmを測る。遺物は出土しなかった。

SA104（第22図） 調査区の西側に位置し、5間分、長さ11.9mを検出した。調査区外（北西側）にさらに延びる可能性もある。柱間距離は、1.75~2.45mである。主軸方位はN=51°-Wを示す。柱穴は直径20cmの円形を呈し、残存の深さは20~30cmを測る。遺物は出土しなかった。

SA105（第22図） 調査区の中央北寄りに位置し、6間分、長さ11.5mを検出した。柱間距離は、1.6~2.3mである。主軸方位はN=37°-Eを示し、SA102から約20m東側を平行に走る。また、後述するSB067・093・097とは主軸方位が一致する。柱穴は直径20~30cmの円形を呈し、残存の深さは20cmを測る。遺物は出土しなかった。

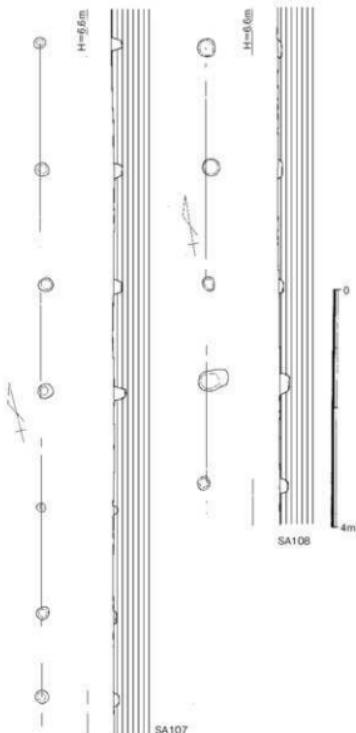


第22図 SA101～106およびSA101出土遺物実測図 (1/80、遺物は1/4)

SA106 (第22図) SA105の南端から直角に東側に折れる。2間分、長さ3.75mを検出した。柱間距離は、1.8~1.95mである。主軸方位はN-52°-Wと、SA104とはほぼ平行する。柱穴は直径30~40cmの円形を呈し、残存の深さは20cmを測る。遺物は出土しなかった。

SA107 (第23図) 調査区の中央南西寄りに位置し、6間分、長さ10.9mを検出した。柱間距離は、1.4~1.9mである。主軸方位はN-14°-Eを示す。柱穴は直径10~20cmの円形を呈し、残存の深さは10~20cmを測る。遺物は出土しなかった。

SA108 (第23図) 調査区の南東寄りに位置し、4間分、長さ7.4mを検出した。柱間距離は、1.65~2.0mである。主軸方位はN-8°-Eを示す。柱穴は直径20~30cmの円形を呈し、残存の深さは10~20cmを測る。遺物は出土しなかった。



第23図 SA107・108実測図 (1/80)

②掘立柱建物 (SB)

SB064 (第24図)

調査区の北側中央に位置し、梁行3間（柱間1.8~2.3m）×桁行4間（柱間1.6~2.2m）、床面積は46.4m²、主軸方位はN-8°-Eを示す。柱穴は直径20~30cmの円形を呈し、残存の深さは30~40cmを測る。遺物は、土師質土器、陶磁器が出土した。

出土遺物（第24図） 129 (SP922) は土師質土器・壺。回転ナデ成形後、外底部ヘラ切りか。復元口径10.5cm。130 (SP918) は白磁碗の底部。高台は細く高く直立。復元底径6.4cm。灰白色 (2.5GY8/1)。

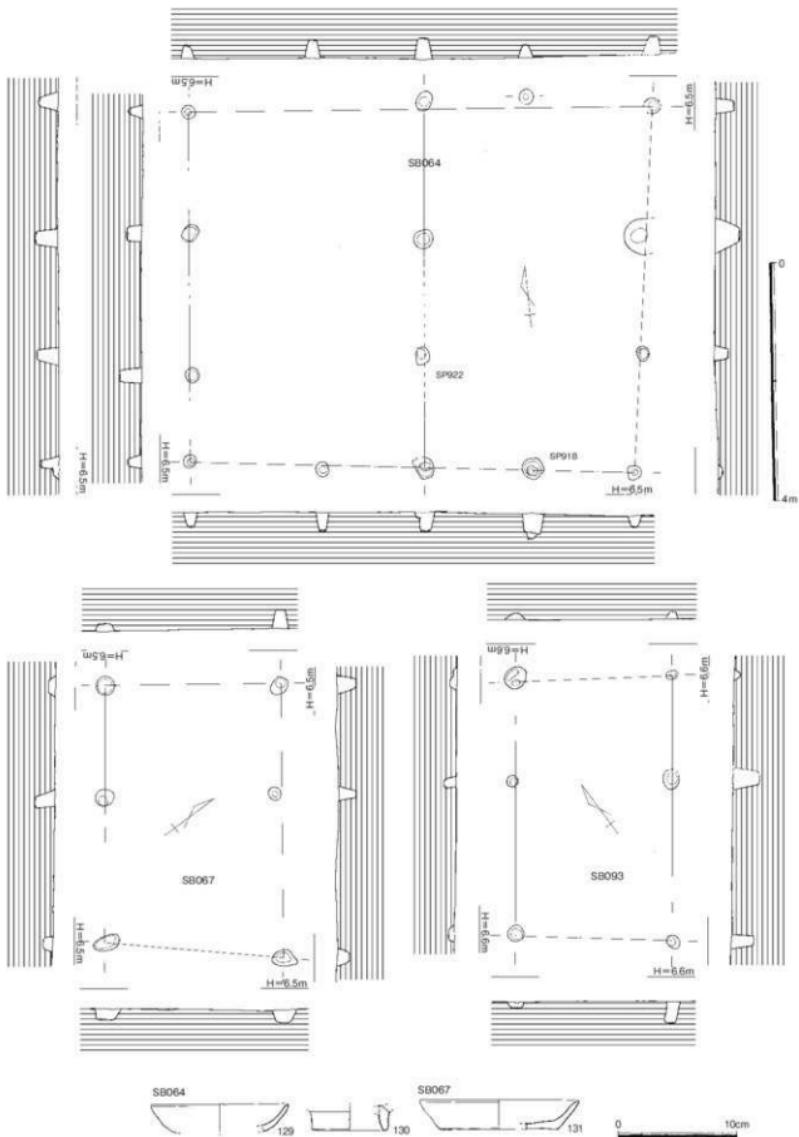
SB067 (第24図)

調査区の北西側に位置し、梁行1間（柱間2.9m）×桁行2間で、桁行の柱間距離は北側1.9mに対し南側は2.9mと広い。床面積は13m²、主軸方位はN-53°-Wを示す。柱穴は直径20~30cmの円形を呈し、残存の深さは20~30cmを測る。遺物は、SP741から土師質土器が出土した。

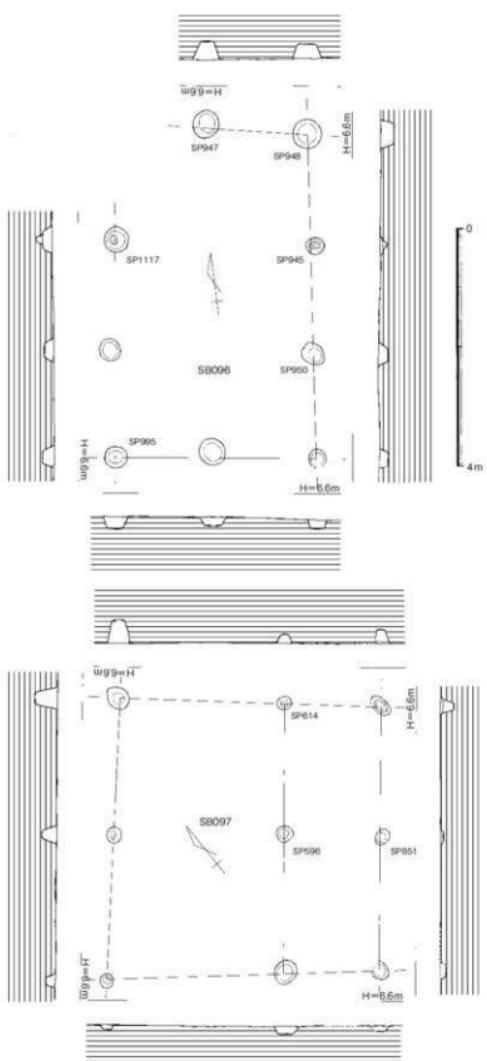
出土遺物（第24図） 131は土師質土器・壺。外底面に回転糸切り痕と板状圧痕を残す。復元口径13.4cm、復元底径9.8cm。橙色 (7.5YR6/6)。

SB093 (第24図)

調査区の北西、SB067の南側2.3mに隣接し、西辺の柱筋がほぼ一致する。梁行1間（柱間



第24図 SB064・067・093およびSB064・067出土遺物実測図 (1/80、遺物は1/4)

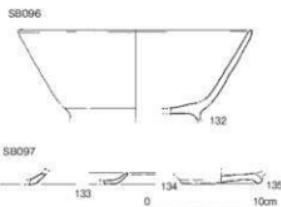


第25図 SB096・097実測図 (1/80)

2.6m) × 桁行2間で、桁行の柱間距離は北側1.7mに対し南側は2.7mと広い。床面積は11m²、主軸方位はN-35°-Eを示し、SB067の主軸方向と直交する。柱穴は直径20~30cmの円形を呈し、残存の深さは20~40cmを測る。遺物は出土しなかった。

SB096 (第25図) 調査区の北東側に位置し、梁行2間(柱間1.65~1.75m) × 桁行3間(柱間1.7~1.85m)、床面積は18.3m²を測る。主軸方位はN-4°-Eを示し、SA101やSB094とは平行、SA103と直交関係にある。柱穴は直径30~50cmの円形を呈し、残存の深さは20~40cmを測る。遺物は、柱穴SP945・947・948・950・995・1117からそれぞれ出土した土師質土器片から同一個体の椀が復元できた。

出土遺物(第26図) 132は土師質土器・椀。体部は直線的。高台部は欠損。大粒の砂粒を少量含む。橙色(5YR6/8)。復元口径19.4cm、器高7.7cm以上、復元底径11.0cm。



第26図 SB096・097出土遺物実測図 (1/4)

SB097 (第25図) 調査区の北西、SB067の北側に位置する。母屋は梁行1間（柱間2.9~3.0m）×桁行2間（柱間1.85~2.75m）で、東辺に幅1.6mの庇が取り付く。桁行は北側（約1.9m）が狭く、南側（約2.5m）が広い。床面積は、母屋部で13.2m²、底部を含めると20.2m²を測る。主軸方位はN-40°-Eを示し、SA102・105の主軸とはほぼ平行、SA104・105およびSB067の主軸とはほぼ直交する。柱穴は直径30~40cmの円形を呈し、残存の深さは20~40cmを測る。遺物は、柱穴の埋土から土師質土器、瓦器片が少量出土した。

出土遺物（第26図） 133は土師質土器・壺の底部片。外底面に回転糸切り痕。外面は褐灰色（10YR6/1）、内面は灰白色（10YR8/2）。134は皿。外底面に回転糸切り痕。淡黄色（25Y8/4）。135は瓦器椀の底部。高台は丸く收める。灰色（N5/6）。底径7.0cm。

③溝（SD）

SD001 (第27図) 調査区の北辺にはほぼ平行して検出した東西溝である。調査区内では北側の肩を検出できなかつたため、トレーナーを設定して確認したところ、幅は約1.0mであった。残存の深さは25cmを測る。主軸方位は調査区の西側ではN-85°-E、東側ではN-81°-Wを示し、現在の地籍割りと同方位を示す。遺物は陶器片が出土した。

出土遺物（第27図） 136は器種不明の陶器片。土管状の円筒形を呈し、端部から8cm付近に段があり外方へ広くなる。回転ナデ成形。外面に斜格子の叩き目を有す。内外面ともに施釉されるが、上端部は剥離する。釉は暗赤褐色（5YR4/2）、胎土は橙色（5YR7/6）を呈す。端部の復元口径40.8cm。厚さは15~33cmを測る。

SD017 (第27図) 調査区の北西端に位置する南北方向の溝で、幅約1.4m、長さ3.5m分を検出した。南側で立ち上がり北側へ延びるが、SD001に切られる。残存の深さは20~30cmを測る。遺物は土師質土器が出土したが、小片のため図示できなかつた。

SD018 (第27図) SD017の南に位置する南北方向の溝で、幅約1.5m、長さ3m分を検出した。北側で立ち上がり、調査区外の南側へ延びる。残存の深さは20~30cmを測る。主軸方位はSD017とともにN-10°-Eを示し、形状や埋土もSD017と類似することから、SD017と018は陸橋状の平坦地を隔てて繋がる一連の溝である可能性がある。また、主軸方位はSA101とSB094とはほぼ平行し、SA103と直交する。遺物は土師質土器、鎌蓮弁の青磁碗片が出土したが、小片のため図示できなかつた。

SD071 (第27図) 調査区の南側に位置する東西方向の溝で、幅約1.1m、長さ約19.5m分を検出した。東端は削平により消滅、西側は調査区外へ延び、残存の深さは20cmを測る。主軸方位はN-81°-Wを示し、SA103とはほぼ平行する。遺物は、土師質土器や須恵器片が出土したが、いずれも小片である。

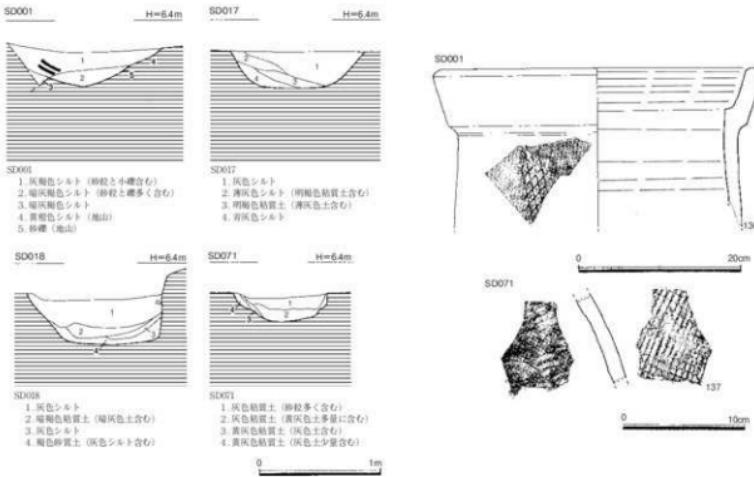
出土遺物（第27図） 137は須恵器・壺の胴部片である。外面に長方形の格子目叩き、内面に同心円文當て具痕を残す。外面は灰色（N6/）、内面は浅黄褐色（10YR8/3）。器厚1.1cm。

④井戸（SE）

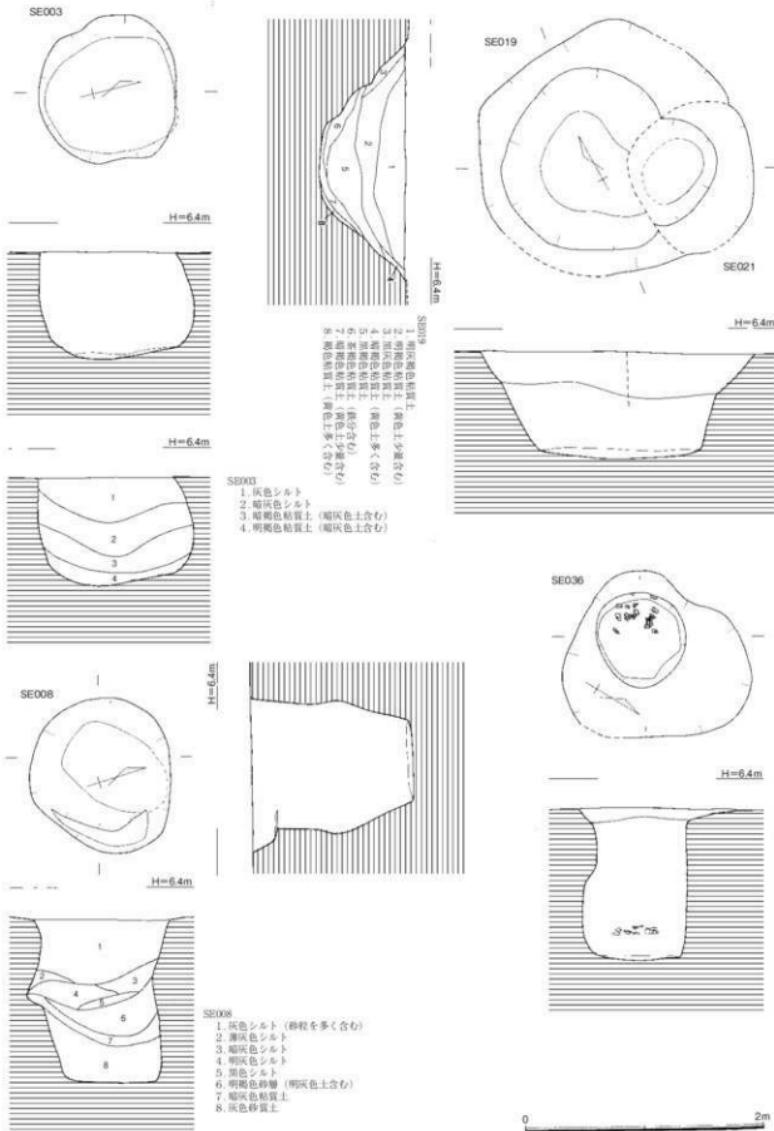
SE003 (第28図) 調査区の東端中央に位置し、長軸1.25m、短軸1.15m、残存の深さ90cmで、不整円形を呈す。壁面はオーバーハング気味である。埋土は、下層（3·4層）に暗褐色粘質土、上層（1·2層）に灰色シルトがレンズ状に堆積し、4層付近で湧水が確認された。遺物は出土しなかつた。

SE008 (第28図) 調査区の中央北東寄りに位置し、長軸1.3m、短軸1.15m、残存の深さ140cmで、ほぼ円形を呈す。壁面はほぼ直立するが、東側に1段のテラスがあり、南側はオーバーハングする。埋土は、最下層（8層）に灰色砂質土、下層（7層）に暗灰色粘質土、中層（2~6層）に暗灰~黒色シルトがレンズ状に堆積したのち、上層（1層）の灰色シルトで一気に埋まる。遺物は、最下層を中心とし土師質土器や瓦器、陶磁器が比較的良好な状態で出土した。

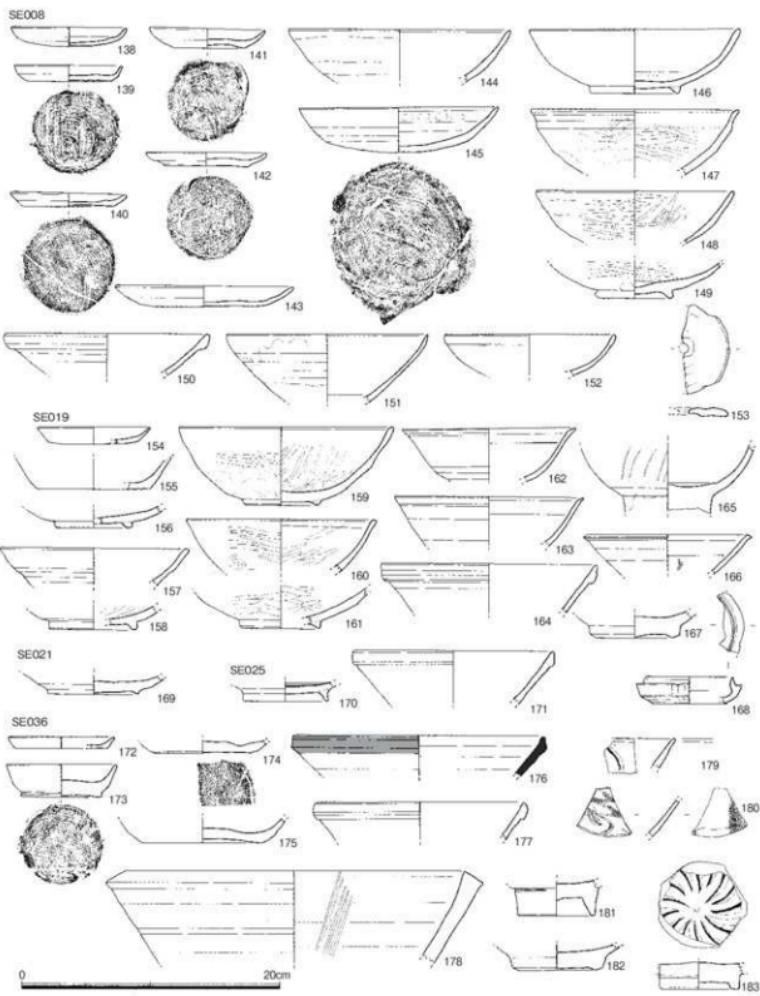
出土遺物（第29図） 138~142は土師質土器・皿、143~145は壺で、すべて外底面に回転糸切り痕と板状圧痕を残す。138は底部がやや丸みを帯びる。にぶい橙色（7.5YR7/4）。口径9.0cm、器高1.55cm、底径6.2cm。139は底面が平坦で体部が直立する。にぶい橙色（5YR8/4）。口径8.4cm、器高1.3cm、底径6.4cm。140は底面が平坦で体部を短く外につまみ出す。灰白（10YR8/2）。口径9.0cm、器高1.15cm、底径7.0cm。141は底面が内湾し体部が外傾しながら内湾する。にぶい橙色（10YR7/4）。口径9.0cm、器高1.6cm、底径6.0cm。142は底面が平坦で体部を直線的に外傾しつつ中位で緩やかに屈曲する。浅黄橙色（10YR8/3）。復元口径13.8cm、器高1.6cm、復元底径9.7cm。145は底部が丸く、体部は外方に直線的に開く。にぶい黄橙色（10YR7/3）。口径15.4cm、器高3.55cm、底径11.0cm。146は土師質土器・椀。貼付高台は短く丸く取み、体部は丸みを帯びる。浅い黄橙色（7.5YR8/4）。復元口径16.2cm、器高5.0cm、高台径6.6cm。147~149は瓦器椀で内外面を研磨する。147は口縁部下を強くつまみ、体部との境が屈曲する。内面は黒色、外面は灰白色（7.5YR8/1）。復元口径16.8cm。148は灰黄色（2.5Y7/2）。復元口径15.4cm。149は外底面に回転糸切り痕、体部下方はヘラケズリ。灰色（5Y6/1）。高台径5.4cm。150は白磁碗IV-1類の口縁部片。釉は灰白色（5GY8/1）。胎土は灰白色（7.5Y8/1）。復元口径16.0cm。151は白磁碗II-4類。体部外下面下半は露胎。細かい貫入り。釉は灰白色（5Y7/2）、胎土は灰白色（2.5Y8/1）。復元口径15.6cm。152は白磁碗II-1類。細かい貫入り。灰白色（2.5Y8/2）。復元口径13.2cm。153は土師器坏部の転用品で、外底部のヘラ切り痕を残す。全体を打ち欠いて円形に成形



第27図 SD001・071土層断面および出土遺物実測図 (1/40、136は1/6、137は1/4)



第28図 SE003・008・019・021・036実測図 (1/40)



第29図 SE008・019・021・025・036出土遺物実測図 (1/4)

し、中央を回転穿孔する。半分は欠損。長さ7.0cm。孔径7mm。

SE019・021（第28図） 調査区の北端中央に位置し、SE019の南東隅をSE021が切る。当初、切り合はないものと認証したため、SE019として取り上げた遺物のなかにSE021の遺物が含まれる可能性もある。SE019は長軸2.3m以上、短軸2.1m、残存の深さ90cmで、不整円形を呈す。SE021は長軸0.9m、短軸0.7m以上、残存の深さは85cmを測り、不整円形を呈す。いずれも壁面は外傾し、中位ほどで傾斜角が変わってテラス状を呈す。また、中位ほどで地山が黄褐色シルトから疊層に変化するため、石積井戸のように見える。SE019の埋土は、下層（6・7層）に暗褐色粘質土、中層（3～5層）に黒～灰褐色粘質土、上層（1・2層）に明褐色粘質土がレンズ状に堆積する。SE021はSE019の埋没過程で掘り直されたものと考えられる。遺物は、土師質土器、瓦器、陶磁器が出土した。

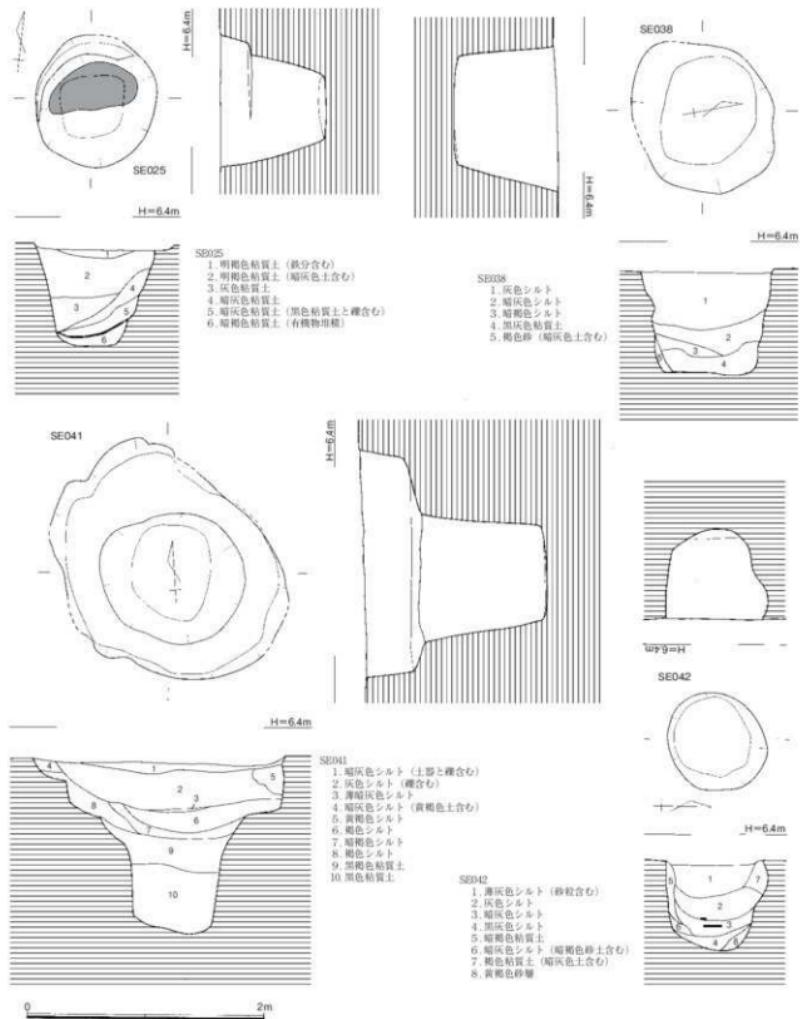
出土遺物（第29図） 154～168はSE019（154～156・166：上層、157・158：下層、その他：中層）、169はSE021から出土した。154は土師質土器・皿、154・155は壺、157は椀。155は外底面に板状压痕を残す。にぶい橙色（7.5YR7/4）。157は体部に回転ナデの痕跡を強く残す。灰黄色（2.5Y6/2）。復元口径14.8cm。156、158～161は瓦器椀。内外面ともに研磨。158は外底面にヘラ切り痕を残す。159は内面褐色（10YR4/1）、灰黄色（2.5Y7/2）。復元口径16.8cm、器高6.1cm、底径5.7cm。160は灰黄色（2.5Y6/1）。復元口径14.8cm。162～167は白磁椀。162はV-2a類。釉は光沢がある灰白色（2.5GY8/1）、胎土は灰白色（7.5Y8/1）。復元口径13.4cm。163もV-2a類。釉は光沢がある灰白色（7.5Y8/1）、胎土は灰白色（2.5Y8/1）。164はIV類。釉は光沢がある灰黄色（2.5Y7/2）、胎土は灰白色（10YR8/2）。復元口径16.8cm。165はXII類。外面に縦線文、見込みに沈線。高台は露胎。釉は貫入があり灰白色（7.5Y7/1）、胎土は灰白色（5Y8/1）。166はV-4b類。傾きもう少し立つか。内面に鶴目文。釉は光沢がある灰白色（7.5Y7/2）、胎土は灰白色（2.5Y8/1）。168は青白磁の輪花合子。返りと外底面は釉剥ぎ。釉は光沢と透明感があり明緑灰色（10GY8/1）、胎土は灰白色（2.5Y8/2）。復元口径6.6cm、器高2.1cm、復元底径5.7cm。169は瓦器・椀。全体に摩滅。灰白色（5Y8/1）。底径7.0cm。

SE025（第30図） 調査区の北西端に位置し、長軸1.1m、短軸1.0m、残存の深さ85cmで、平面形は円形を呈し、壁面はやや直立する。埋土は、下層（6層）の暗褐色粘質土と中層（4～5層）の暗褐色粘質土がレンズ状に堆積したのち、上層（1～3層）の明褐色粘質土が一気に堆積したと考えられる。下層と中層の間には、海綿状の灰褐色有機物が堆積していた（V章第2項参照）。遺物は、黒色土器、陶磁器が少量出土した。

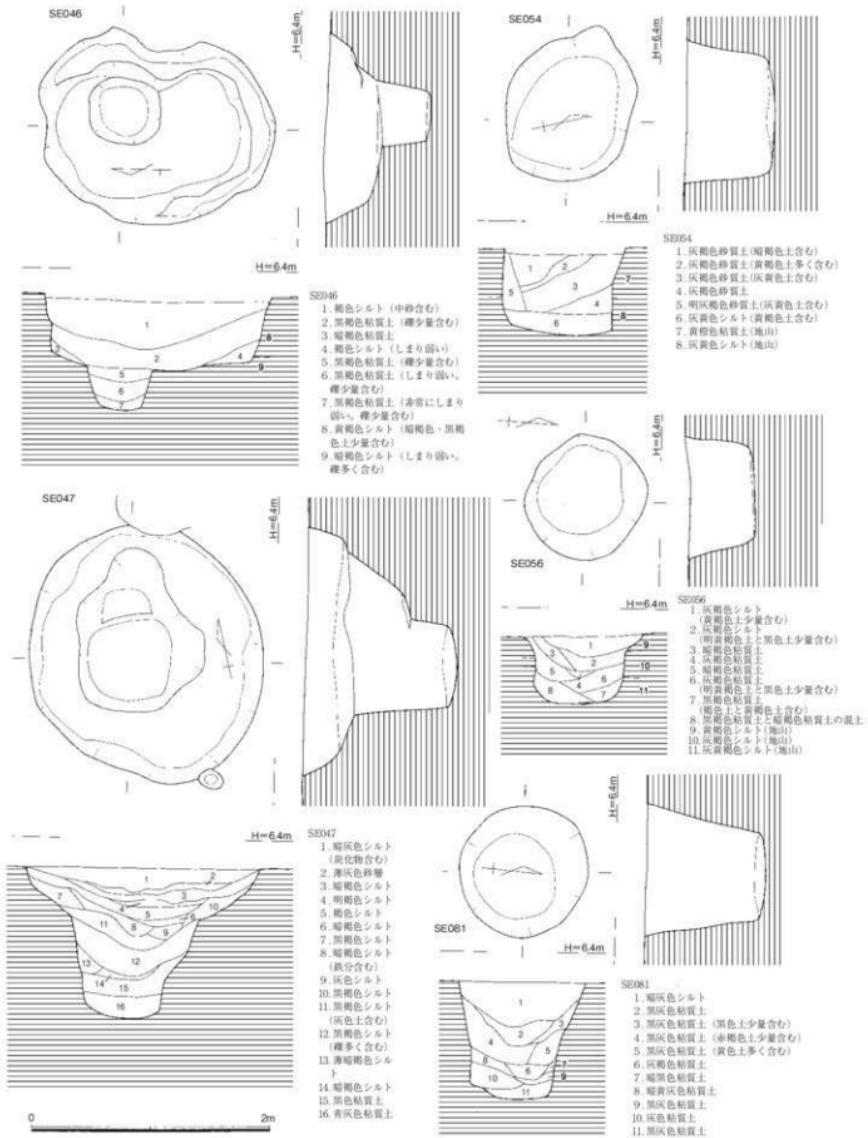
出土遺物（第29図） 170は黒色土器A類・椀の底部。高台端部は細く収める。内面黒色、外面は灰白色（10YR8/2）。復元高台径6.6cm。171は白磁碗IV類。外面に大きな貫入あり。釉は光沢がある灰白色（5Y7/2）、胎土は灰白色（5Y8/1）。復元口径15.6cm。

SE036（第28図） 調査区の中央北西寄りに位置し、長軸1.6m、短軸1.4m、残存の深さ130cmである。平面形は、検出段階では不整形であったが、一段掘り下げると円形のプランが現れた。壁面は直立するが、南側はやや抉れる。埋土は、底面に有機質を多く含む青灰色粘質土がレンズ状に堆積する。遺物は、土師質土器、須恵器、陶器、陶磁器が出土した。

出土遺物（第29図） 172は土師質土器・皿で、底面・体部ともに直線的。橙色（7.5YR6/6）。復元口径8.2cm、器高0.9cm、復元底径7.0cm。173は小壺。外底面回転糸切り痕。厚底。橙色（5YR5/6）。復元口径8.6cm、器高2.6cm、底径6.3cm。174・175は壺で、外底面回転糸切り痕。174はにぶい黄橙色（10YR7/4）。復元底径7.8cm。175は外底面が内湾。橙色（7.5YR6/6）。底径9.2cm。176は須恵器・鉢



第30図 SE025・038・041・042実測図 (1/40)



第31図 SE046・047・054・056・081実測図 (1/40)

の口縁部片。口縁部外面が重ね焼きにより黒化。黄灰色（2.5Y6/1）。復元口径19.4cm。178は陶器・擂鉢。内面に擂目5本。にぶい橙色（5YR6/4）。復元口径26.3cm。177は白磁碗IV類。釉は光沢がある灰白色（5Y7/1）。復元口径16.6cm。179は龍泉窯系青磁碗。内面に片彫り花文。釉はオリーブ灰（10Y6/2）、胎土は灰色（5Y7/1）。180は同安窯系青磁碗I-1 b類。外面に縦線の櫛目文、内面にジグザグ状の櫛点描文と片彫り花文。体部下半は露胎。釉はオリーブ灰（2.5GY6/1）、胎土は灰白色（N7/）。181は白磁碗の底部。高台は高く細い。釉はにぶい黄橙色（10YR7/2）、胎土は浅黄橙色（10YR8/3）。高台径6.0cm。182は白磁碗の底部。高台は幅広く削り込みが浅い。外面体部下半から高台にかけて露胎。IV類か。高台径7.2cm。183は龍泉窯系青磁碗I-2 b類。高台は外底面を短く削り出す。見込みに片彫り花文。疊付けの釉を剥ぎ取る。釉は灰オリーブ（5Y6/2）、胎土は灰白色（5Y8/1）。高台径6.1cm。

SE038（第30図） 調査区の北西に位置し、長軸1.3m、短軸1.2m、残存の深さ85cmで、平面形は不整円形を呈す。埋土は底面に黒灰色粘質土、その上に褐色系のシルトがレンズ状に堆積したのち、灰色シルトが一気に堆積したと考えられる。遺物は、土師質土器、陶磁器が出土した。

出土遺物（第32図） 184・185は土師質土器・壺で、体部中位に強く回転ナデ痕を残す。184は外底面にヘラ切り痕を残す。復元口径16.2cm。灰白色（2.5Y8/2）。185は灰黄褐色（10YR6/2）。復元口径14.3cm。186は皿。外底面に回転糸切り、板状圧痕。橙色（7.5YR6/6）。復元口径9.4cm、器高1.0cm、復元底径7.0cm。187は白磁皿IV-1 b類。内面に圓沈線文。釉は光沢がある青みがかった灰白色（5Y7/1）。復元口径13.2cm。188は白磁碗IV類。釉は光沢がある灰白色（10YR8/1）、胎土は灰白色（5Y8/1）。復元口径14.0cm。

SE041（第30図） 調査区の中央北西寄りに位置し、長軸2.1m、短軸1.5m、残存の深さ150cmである。平面形は上面掘方では不整梢円形、井戸枠部では不整円形を呈す。壁面はほぼ直立し、上面の掘方と井戸枠の境にテラスを形成する。埋土は井戸枠内に黒～黒褐色粘質土が、掘方に灰～暗灰色シルトがレンズ状に堆積する。遺物は、土師質土器、瓦器、陶磁器等が出土した。

出土遺物（第32図） 189～192は土師質土器・皿。外底面は191がヘラ切り、その他が回転糸切りで、190・192は板状圧痕を残す。復元口径は189が7.4cm、190が8.4cm、191が9.0cm、192が8.8cmを測る。193は壺。外底面は回転糸切り。灰白色（10YR8/2）。復元口径14.4cm、器高2.3cm、復元底径9.2cm。194・195は瓦器碗。194は灰白色（10YR8/2）。復元口径15.8cm。195は体部下位で屈曲する。灰色（5Y5/1）。復元底径6.0cm。196は龍泉窯系青磁碗II-2 b類。外面に片彫り鑄蓮弁文。底部は露胎。釉は光沢がある灰オリーブ色（5Y5/3）。胎土は灰白色（5Y7/1）。復元口径17.0cm、器高7.3cm、底径5.1cm。197は同安窯系青磁碗I-1 b類。外面に縦線の櫛目文、内面に片彫り花文とジグザグ状の櫛点描文、見込みに圓沈線文。貫入あり。釉は透明感があり灰オリーブ色（7.5Y5/2）、胎土は灰白色（N8/）。底径4.6cm。198は白磁碗の底部。高台は細く高く直立する。外面体部下半から底部は露胎。内面に圓沈線文。外面体部に飛び鉋痕。見込みに目跡。釉は光沢がある灰白色（7.5Y7/1）、胎土は灰白色（N8/）。200は龍泉窯系青磁碗I-2 a類。高台削り出すが疊付きに釉残る。内面と見込みに片彫り花文。内外面ともに大きな貫入あり。釉は透明感があり明緑灰色（7.5GY7/1）。胎土は灰白色（N7/）。底径6.0cm。

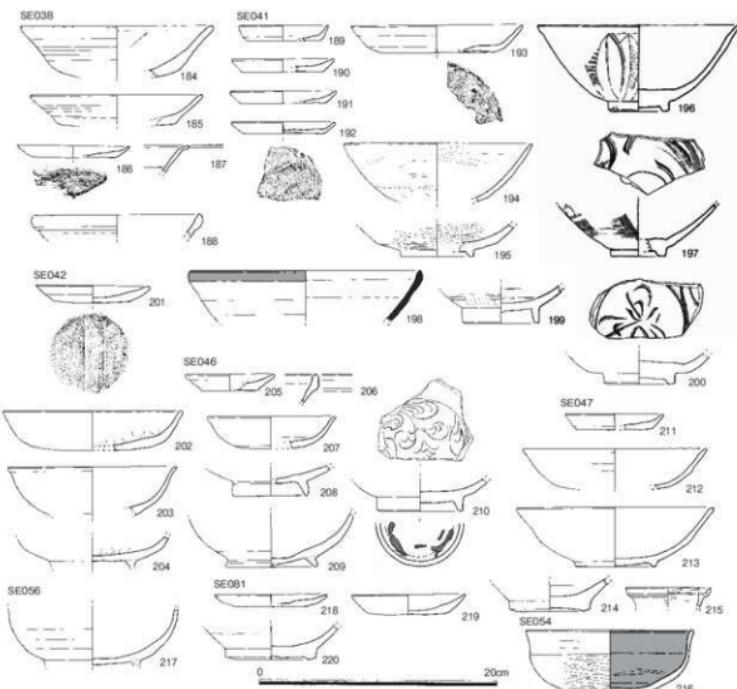
SE042（第30図） 調査区の北端中央に位置し、長軸0.8m、短軸0.8m、残存の深さ80cmで、平面形はほぼ円形を呈す。埋土は、下層（4・8層）に黒灰色シルト、中層（3層）に暗灰色シルト、上層（1・7

層)に灰色シルトがレンズ状に堆積する。遺物は、土師質土器や須恵器片、白磁片が出土した。

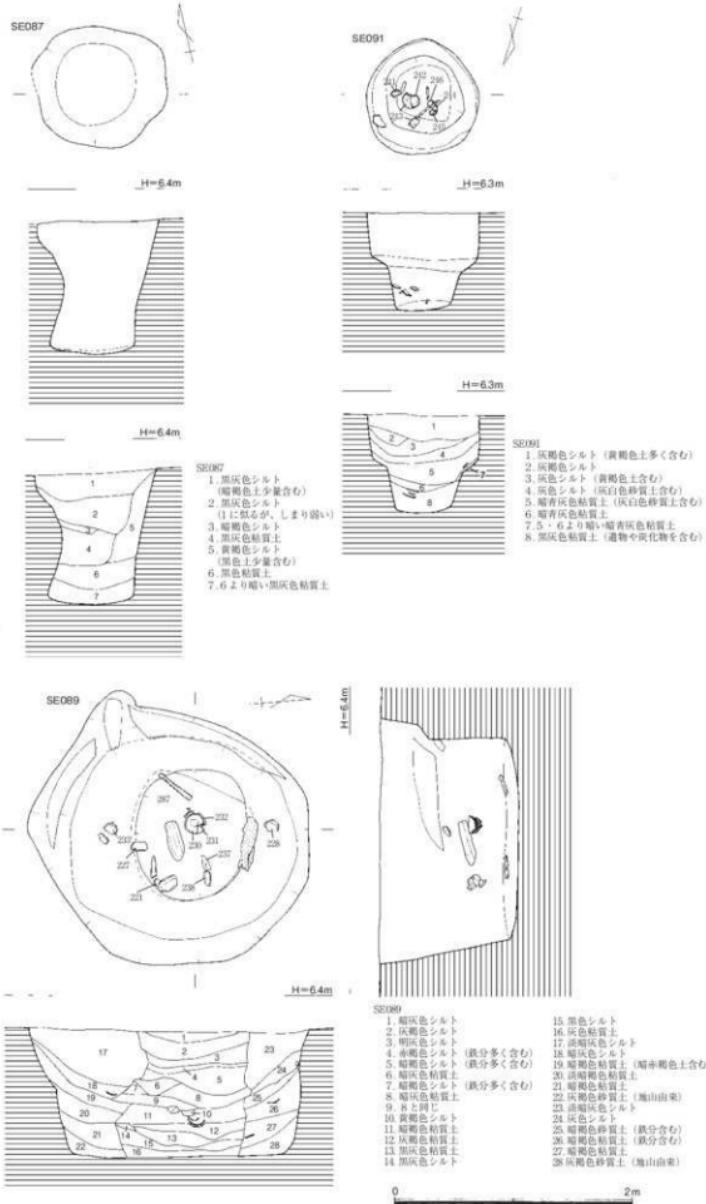
出土遺物(第32図) 201・203は下層、その他は上・中層出土。二次被熱によるものか、いずれも赤化する。201は完形の土師質土器・皿。外底面に板状圧痕。にぶい橙色(7.5YR7/4)。口径9.7cm、器高1.5cm、底径6.6cm。202は壊。底部と体部の境が不明瞭で器厚が厚い。復元口径15.0cm、器高3.3cm、復元底径6.4cm。203・204は椀。203は口縁端部が外反し、器厚が薄い。復元口径14.2cm。204は高台が剥離する。復元底径7.0cm。

SE046(第31図) 調査区の北端中央に位置し、長軸1.9m、短軸1.5m、残存の深さ100cmを測る。平面形は上面掘方で不整楕円形、井戸枠部では不整円形を呈す。壁面はほぼ直立し、上面掘方と井戸枠の境に一段のテラスを形成する。埋土は、井戸枠部(5~7層)に黒褐色粘質土、上面掘方の下層(2~4層)に黒~暗褐色粘質土、上層(1層)に褐色シルトがレンズ状に堆積する。遺物は、土師質土器、陶器が多く出土した。

出土遺物(第32図) 205は下層、その他は上層出土。205は土師質土器・皿。外底面はヘラ切り。復元口径7.3cm、器高1.4cm、復元底径4.8cm。206は白磁碗IV類。釉は細かい貫入があり灰黄色(2.5Y7/2)。



第32図 SE038・041・042・046・047・056・081出土遺物実測図(1/4)



第33図 SE087・089・091実測図 (1/40)

胎土は灰白色（10YR8/2）。207は坏。体部が丸みを帯びる。にぶい黄橙色（10YR7/3）。復元口径10.8cm。208・209は椀。高台は細く高く、やや内湾する。にぶい橙色（2.5YR7/4）。高台径6.2cm。209は高台が細く高く、外に開く。内面がやや黒化する。浅黄橙色（10YR8/3）。高台径7.6cm。210は青磁椀の底部。見込みに圓線と花文を線刻する。外底部及び豊付きは釉を剥ぐが、薄く残る。高台内縁に沿うように目跡が残る。釉は透明感があり黄褐色（2.5Y5/3）、胎土はにぶい黄橙色（10YR7/2）。

SE047（第31図） 調査区の中央北寄りに位置し、長軸2.1m、短軸2.0m、残存の深さ130cmで、平面形は上面掘方はほぼ円形、井戸枠部は不整梢円形を呈す。壁面は上面掘方では緩やかに傾斜し、井戸枠部では直立する。埋土は、下層（15・16層）に黒～黒灰色粘質土、中層（11～14層）に黒～暗褐色シルト、上層（1～10層）に暗灰～暗褐色シルトがレンズ状に堆積する。遺物は、土師質土器、須恵器、陶器、陶磁器、滑石製石鍋が出土した。

出土遺物（第32図） 216は下層、212・214は中層出土。212は土師質土器・皿。外底面にヘラ切り痕。復元口径8.0cm。212・213は瓦器椀。内面から外面にかけて黒化する。焼成不良。灰色（5Y4/1）。214は白磁椀の底部。高台の削りこみは浅い。外面から高台にかけて露胎。釉は透明感があり灰白色（7.5Y7/1）。胎土は灰白色（N8/）。高台径6.3cm。215は陶器壺の口縁部。口縁部が皿状に開き、頭部との境に段を設ける。段上面には目跡が残る。釉は暗褐色（10YR2/3）。

SE054（第31図） 調査区の東端中央に位置し、長軸1.2m、短軸1.0m、残存の深さ75cmで、平面形は不整円形を呈す。埋土は、下層（6層）に地山土を含む灰黄色シルト、上層（1～5層）に灰褐色シルトが斜位に堆積する。遺物は、4層の底面から土師質土器が1点のみ出土した。祭祀に伴って廃棄された可能性がある。

出土遺物（第32図） 216は黒色土器A類・椀。口縁部はやや外反し、体部は丸みを持つ。高台は剥落する。回転ナデ成形後、外底部をヘラ切り。体部はヘラケズリの後、全体を研磨する。外面は褐灰色（10YR4/1）。復元口径14.2cm。

SE056（第31図） 調査区の中央北寄りに位置し、長軸1.05m、短軸0.95m、残存の深さ55cmで、平面形は円形を呈す。埋土は、下層（7・8層）に黒褐色粘質土、中層（3～6層）に暗褐色粘質土、上層（1・2層）がレンズ状に堆積する。遺物は、土師質土器が少量出土し、完形に近い椀1点が底面付近から出土した。祭祀に伴って廃棄された可能性がある。

出土遺物（第32図） 217は土師質土器・椀。口縁部と高台は欠失する。体部は丸みを帯びる。外底面に板状圧痕を残す。浅黄橙色（10YR8/3）。

SE081（第31図） 調査区の中央南寄りに位置し、長軸1.1m、短軸1.1m、残存の深さ100cmで、平面形は不整円形を呈す。壁面はほぼ直立する。底面付近（標高5.2m）で湧水する。埋土は、底面に黒色粘質土が堆積し、その上層は黒灰～暗褐色シルトを主体としてレンズ状に堆積する。遺物は土師質土器が出土した。

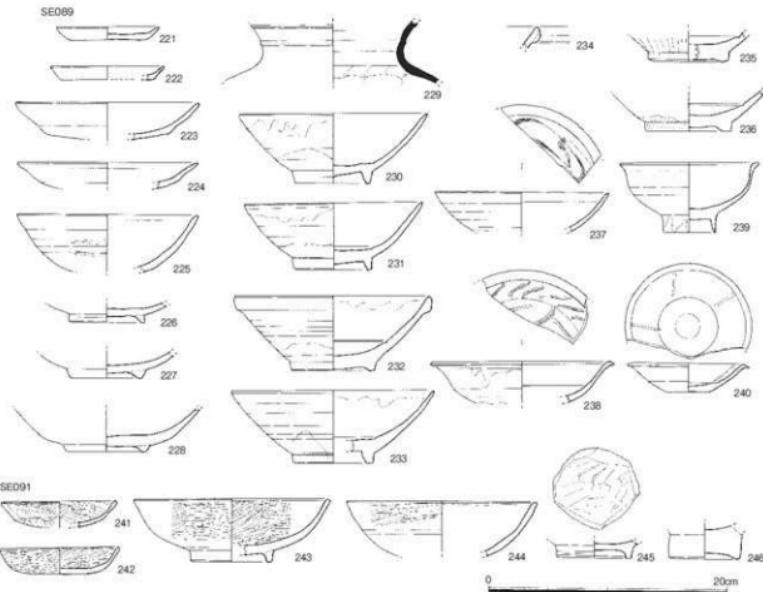
出土遺物（第32図） 218は土師質土器・皿。外底面は平坦で、口縁部を短くつまみ出す。底部はヘラ切り。浅黄橙色（10YR8/3）。復元口径9.4cm。器高1.0cm、復元底径6.0cm。

SE087（第33図） 調査区の南東端に位置し、長軸1.1m、短軸1.0m、残存の深さ110mで、平面形は不整円形を呈す。壁面は直立し、底面は平坦面をなす。底面付近（標高5.2m）で湧水する。埋土は、下

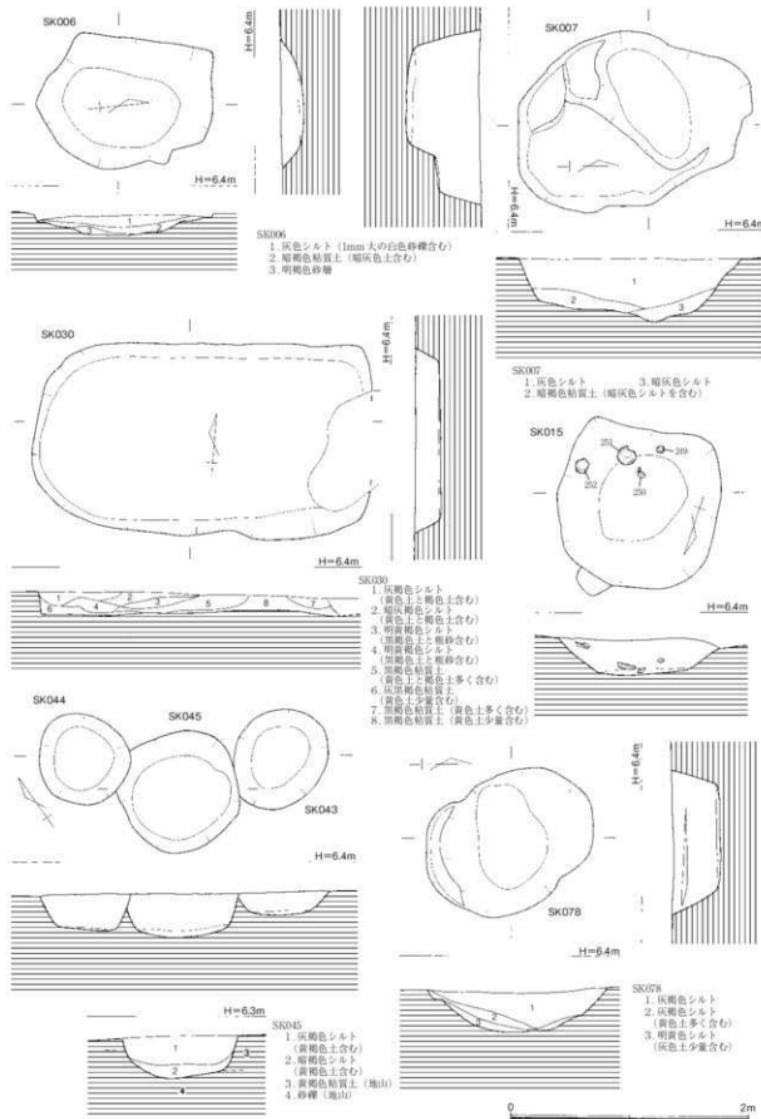
層(6・7層)に黒色粘質土が堆積したのち、東側に地山由来の黄褐色シルトが流れ込み、黒灰色粘質土、黒灰色シルトの順でレンズ状に堆積する。遺物は出土しなかった。

SE089 (第33図) 調査区の東端中央に位置し、長軸23m、短軸21m、残存の深さ105cmで、掘方の平面形は不整円形、井戸枠部は楕円形を呈す。掘方内は、最下層(22・28層)に鉄分を多く含む灰褐色砂質土、下層(19~21・25~27層)に暗褐色砂質土、中層(18・24層)に暗灰色シルト、上層に淡い暗灰色シルトが堆積する。井戸枠内には最下層(16層)に灰色粘質土、下層(13~15層)に黒灰色シルト～粘質土、中層(5~12層)に暗褐色および暗灰色粘質土、上層(1~3層)に灰褐色シルト、中層と上層の間に鉄分を多く含む赤褐色シルトが堆積する。11層付近では、完形の白磁碗3枚が、上から230・231・232の順に重なって出土した。また、底面付近からは木製陽物が出土した。井戸祭祀に伴うものか。その他に、土師質土器、瓦器、須恵器、陶磁器が出土した。

出土遺物(第33・34図) 219、221~222は土師質土器・皿、221は底部ヘラ切りか。にぶい橙色(7.5YR7/4)。復元口径8.6cm、器高1.1cm、底径6.4cm。223・224は壺、223は外底面に板状圧痕を残す。浅黃橙色(10YR8/3)。225は瓦器挽の口縁部片。黒色。復元底径15.2cm。226は土師質土器挽の底部。高台は短く外に開く。暗灰黄色(2.5Y5/2)。高台径6.5cm。229は須恵器壺の頸部。頸部内面に自然釉、肩部外面に灰かぶり。灰色(5Y4/1)。220・230~238は白磁碗。230・231・233は眞-2類。見込みは蛇の目釉剥ぎ。体部中位から高台は露胎。230は釉に光沢がなく、細かい貫入が入る。灰白色(2.5Y7/1)、胎土はにぶい黄橙色(10YR7/3)。口径15.8cm、器高5.9cm、高台径6.4cm。231は体部内



第34図 SE089・091出土遺物実測図 (1/4)



第35図 SK006・007・015・030・043～045実測図 (1/40)

面中位に沈線。化粧をかけた後に施釉。釉は光沢がある灰白色（7.5Y7/1）。胎土は灰白色（7.5Y8/1）。口径15.0cm、器高5.8cm、高台径6.5cm。233は釉に光沢がなく、細かい貫入が入る。灰白色（2.5Y7/1）。胎土は灰黄色（2.5Y7/2）。復元口径16.8cm、器高6.2cm、復元高台径6.8cm。232はIV-1a類。見込みに圓沈線。釉は光沢がある。灰白色（7.5Y7/1）。胎土は灰白色（7.5Y8/1）。口径16.5cm、器高6.3cm、高台径7.0cm。234はIV類。釉は光沢がなく、にぶい黄橙色（10YR7/2）。胎土は浅黄橙色（10YR8/3）。235・236は白磁碗の底部。見込みに圓沈線。高台の削り込みは浅く、豊付きは幅広い。釉は光沢がある灰白色（235:7.5Y7/1、236:5Y7/2）。237はV-b類。輪花があり、内面は櫛目花文を描く。釉は光沢がある灰白色（25GY8/1）。復元口径14.6cm。238はVI-2b類。口縁部は屈曲。内面に櫛目花文。釉は気泡が多く灰白色（10Y8/1）。復元口径15.4cm。239は白磁小碗XIV-b類。口縁が屈曲し、体部は丸みを持つ。高台は細く高い。釉はやや光沢がある灰白色（7.5Y8/1）。復元口径11.6cm、器高5.9cm。240は白磁皿IV-2b類。口縁は屈曲。内面に白堆線あり。釉はやや気泡が入る。灰白色（5Y8/1）。口径10.4cm。

SE091 (第33図) 調査区の南東端に位置し、長軸0.95m、短軸0.95m、残存の深さ80cmで、平面形はほぼ円形を呈す。埋土は、下層（8層）は炭化木を含む泥炭化した黒灰色粘質土、中層（5～7層）はグライ化した暗青灰色粘質土、上層は灰～灰褐色シルトを呈し、レンズ状に堆積する。遺物は、瓦器、陶器が出土した。

出土遺物（第34図） 241・242は瓦器・皿。内外面全面を研磨。外底面に板状圧痕。胎土は灰白色で、表面は炭素吸着によりいぶし銀黒色を呈す。241は口径10.2cm、器高2.3cm、底径4.5cm。243～245は瓦器碗。243は高台が低く短く直立。内外面全面を研磨。炭素吸着により黒色を呈す。胎土はにぶい黄橙色（10YR7/2）。口径16.5cm、器高5.4cm、高台径6.8cm。246は弥生土器甕の底部。

⑤土坑（SK）

SK006 (第35図) 調査区の中央東寄りに位置し、長軸1.5m、短軸1.1m、残存の深さ20cmで、平面形は隅丸長方形を呈す。埋土は灰色シルト・暗褐色粘質土がレンズ状に堆積する。遺物は出土しなかった。

SK007 (第35図) 調査区の中央東寄りに位置し、長軸2.0m、短軸1.5m、残存の深さ55cmで、平面形は不整梢円形を呈す。埋土は灰色シルト・暗褐色粘質土がレンズ状に堆積する。遺物は、白磁片が出土した。

出土遺物（第36図） 247・248は白磁碗の底部。247は高台内面が外傾し、豊付きは幅が狭い。釉は発色が悪く灰黄色（2.5Y7/2）。248はIV類か。見込みに圓沈線。高台は浅い。釉は透明感があり貫入あり。灰白色（5Y7/2）。

SK015 (第35図) 調査区の北西付近に位置し、長軸1.4m、短軸1.3m、残存の深さ30cmで、平面形は隅丸正方形を呈す。遺物は、ほぼ完形の土師質土器4点が底面付近から集中して出土した。

出土遺物（第36図） 249は土師質土器・皿。内底面端を強くナデる。外底面に回転糸切り痕。橙色（7.5YR6/6）。口径8.3cm、器高1.6cm、底径6.5cm。250～251は壺。250は復元口径10.8cm、器高3.1cm、復元底径7.0cm。251は体部がやや内湾。外底面に回転糸切り痕。口径15.7cm、器高3.9cm、底径11.0cm。252は体部が直立。外底面に回転糸切り痕。口径13.9cm、器高3.0cm、底径8.3cm。

SK030 (第35図) 調査区の北端西寄りに位置し、北側のSK028、東側のSK020を切り、東辺中央は搅

乱を受ける。長軸2.8m、短軸1.6m、残存の深さ20cmで、平面形は隅丸長方形を呈す。埋土は、灰褐色および黒褐色シルトを主体としてレンズ状に堆積する。遺物は陶器が少量出土した。

出土遺物（第36図） 253は同安窯系青磁皿I-1 b類。内面に篦描文とジグサグ状の櫛点描文。外面底面は露胎。化粧土をかけたのち施釉。釉は発色が悪く灰オリーブ色（5Y6/2）。復元口径10.5cm。254は白磁碗IV類。釉は光沢があり透明感がある。灰白色（7.5Y7/1）。

SK043・044・045（第35図） 調査区の中央北西寄りに位置し、西からSK044・045・043に並び、SK044はSK045を、SK045はSK043を切る。SK043は長軸0.9m、短軸0.8m、残存の深さ30cm、SK044は長軸0.8m、短軸0.75m、残存の深さ25cm、SK045は長軸1.0m、短軸1.0m、残存の深さ35cmで、いずれも平面形はほぼ円形を呈す。埋土は、灰褐・暗褐色シルトを主体にレンズ状に堆積する。遺物は、土師質土器が出土した。

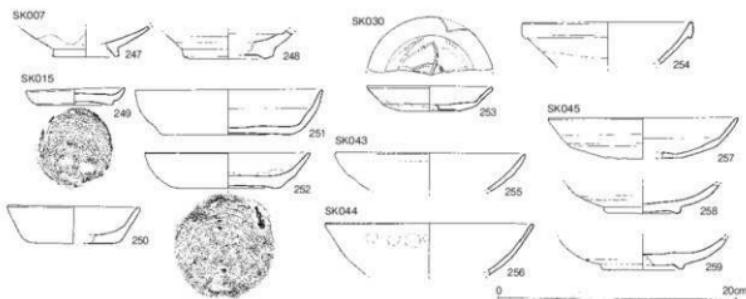
出土遺物（第36図） 255はSK043、256はSK044、257～259はSK045出土。255～259は瓦器椀。いずれも研磨痕が摩滅、焼成も悪い。

SK078（第35図） 調査区の中央南寄りに位置し、長軸1.5m、短軸1.15m、残存の深さ20cmで、平面形は不整梢円形を呈す。埋土は、灰褐色シルトがレンズ状に堆積する。遺物は出土しなかった。

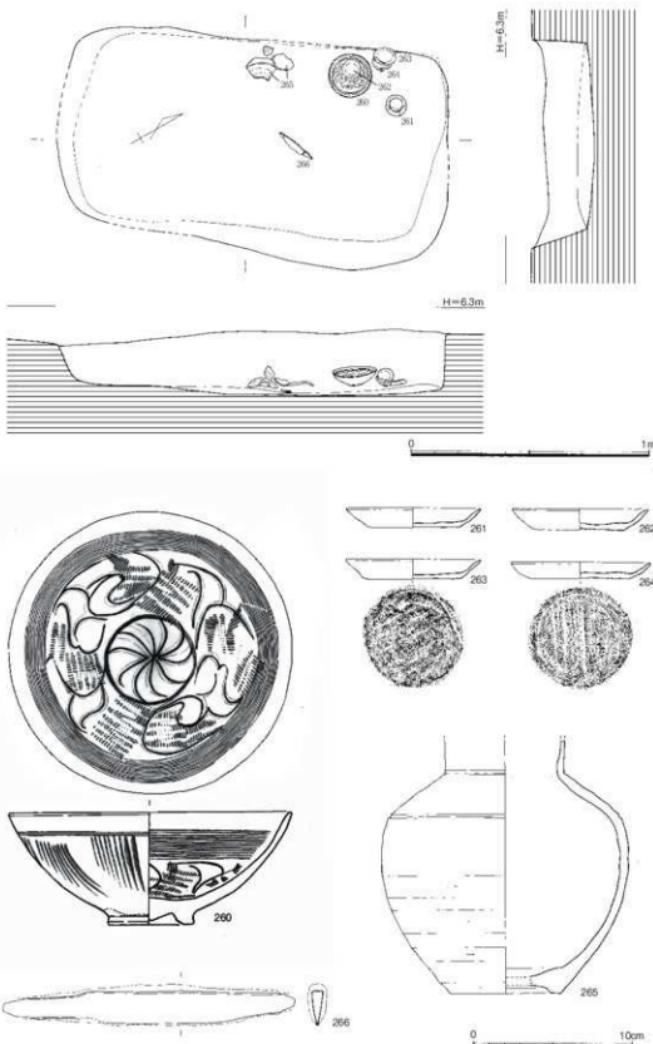
⑥土壙墓（SR）

SR062（第37図） 調査区の北西付近に位置し、長軸1.65m、短軸0.9m、残存の深さ25cmで、平面形は長方形を呈す。壁面はほぼ直立し、埋土は壁面付近に黄褐色砂質土、中央に灰色砂質土が堆積する。内部から副葬品と考えられるセットが出土したことから墓と考えられるが、木質や釘など木棺墓であることを示す明確な物証が得られなかつたため、ここでは土壙墓として報告する。頭位はN-35°-Eを示す。副葬品は、頭位右側に土師質土器・皿が3点、すぐ南側に青磁碗1点とその内部から土師質土器・皿が1点、さらにそのまま南側から陶器1点、胸位付近から刀子1点が出土した。

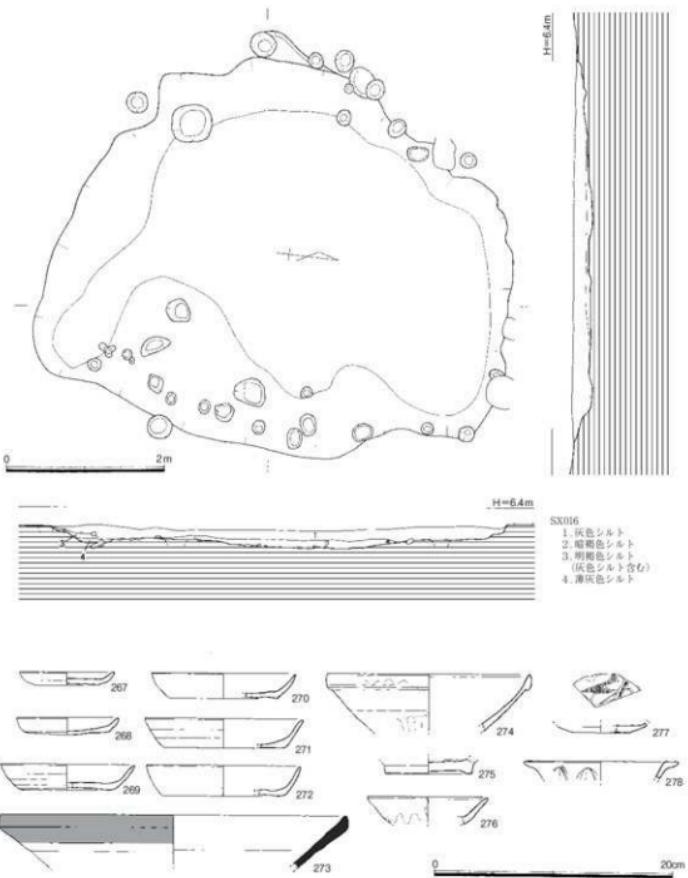
出土遺物（第37図） 260は初期龍泉・同安窯系青磁0類の椀。完形。体部は丸みがあり、高台は比較的小さく、浅くケズリ出して中央が突出する。脛付きは幅広い。内面見込みに花文、内面中位に片彫文とジグサグ状の櫛点描文、内面上位に櫛状工具で同心円文を描く。外面は片彫り縦線文。高台は露胎。釉は透明感があり発色がよい。大きめの貫入が部分的に入る。オリーブ灰色。口径17.7cm、器高



第36図 SK007・015・030・043～045出土遺物実測図（1/4）



第37図 SR062および出土遺物実測図（1/20、遺物は1/3）



第38図 SX016および出土遺物実測図 (1/60、遺物は1/4)

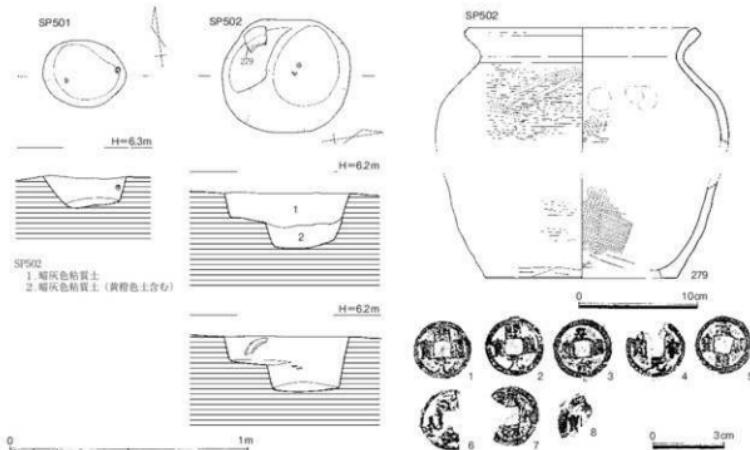
7.1cm、高台径5.3cm。261～264は土師質土器・皿。完形。橙色（5YR7/6）。262～264は外底面に回転糸切り痕と板状圧痕を残す。261は口径8.3cm、器高1.2cm、底径5.6cm。262は口径8.4cm、器高1.3cm、底径5.6cm。263は口径8.4cm、器高1.3cm、底径6.0cm。口径8.8cm、器高1.05cm、底径6.4cm。265は陶器、水注か。肩部に沈線がめぐり、高台は低く直立する。体部外面下部は回転ヘラケズリ。その他は回転ナデ。釉は内外面ともに薄く、オリーブ黄色（7.5Y6/3）。胎土は精緻で明オリーブ灰（2.5GY 7/1）。266は刀子。両端とも欠損。両闘。残存長18.8cm。身幅2.0cm。厚さ0.8cm。

⑦その他の遺構（SX、SP）

SX016（第38図） 調査区の北西付近に位置し、長軸5.5m、短軸4.8m、残存の深さ20cmで、平面形は不整梢円形を呈す。埋土は、灰～暗褐色シルトを主体にレンズ状に堆積する。遺物は、土師質土器、須恵器、陶磁器が出土し、特に底面付近からはほぼ完形の土師質土器・皿が出土した。

出土遺物（第38図） 267・268は土師質土器・皿。267は外底面に回転糸切り痕。復元口径8.0cm。269～272は壺。269・272は外底面に回転糸切り痕、271は板状圧痕が残る。復元口径は269が11.2cm、270が12.1cm、271が13.4cm、272が13.0cmを測る。273は須恵器・鉢。口縁部外面に重ね焼きにより帶状に自然釉がかかること。274は白磁碗IV類。釉は光沢があり気泡が入る。275は白磁碗底部。高台の削り込みは浅い。釉は光沢がある。276は白磁皿IX類。口禿げ。釉は粘性が強く発色が悪い。灰白色（5Y7/1）。277は同安窯系青磁皿I-2b類。全面施釉後、底部外面の釉搔き取り。内面に篦描文とジグザグ状の櫛点描文。釉は透明感があり灰オリーブ色（7.5Y6/2）。278は龍泉窯系青磁壺III-4b類。口縁は短く屈折し、外面に箇運弁文を有す。釉は厚く光沢があり、灰オリーブ（7.5Y5/2）。

SP501（第39図） 調査区の北端中央、SB064の北側に隣接し、長軸35cm、短軸30cm、残存の深さ15cmで、平面形は円形を呈す。底面から約10cmほど浮いた状態で、銅銭が出土した。遺構の時期は、銅銭のなかで最も新しい政和通宝が初鋳された1111年以降、12世紀前半代と考えられる。



第39図 SP501・502および出土遺物実測図 (1/20、279は1/4、銅銭は1/2)

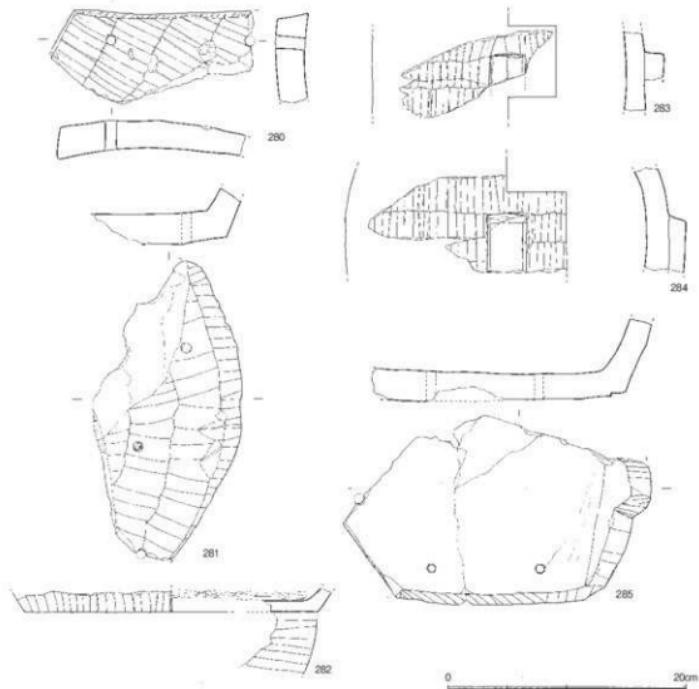
出土遺物（第39図） 銅銭は、少なくとも5種9枚（開元通宝3枚、判読不明2枚含む）出土した。1・2は開元通宝（初鑄621年）、3は皇宋通宝（1039年）、4は照寧通宝（1068年）、5は元祐通宝（1086年）、6は政和通宝（1111年）、7・8は判読不明である。

SP502（第39図） 調査区の北東端に位置し、長軸55cm、短軸50cm、残存の深さ25cmで、平面形は形を呈す。埋土は暗灰色粘土がレンズ状に堆積する。遺物は、底面から約10cm浮いた状態で土師質の壺と銅銭が出土した。銅銭は少なくとも2枚出土したが、残存状況が悪く、出土時には「聖」の一字のみ判読できたが、取り上げ時に細かく破損した。銅銭は、壺とともに埋納された可能性が高い。

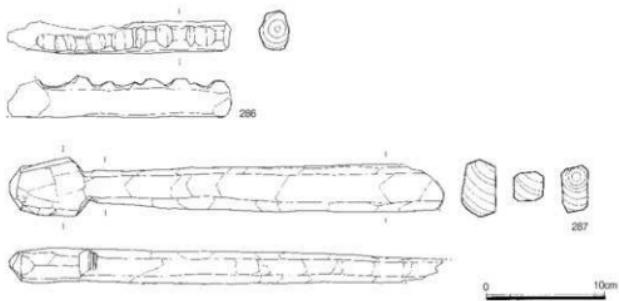
出土遺物（第39図） 279は土師質の壺。口縁部は外反し、肥厚する。肩部はやや丸みを帯び、直線的に底部へ下る。底部は平底。外面は全面を研磨、内面は板ナデ。橙色（7.5YR6/6）。復元口径19.0cm、器高18.2cm以上、復元底径16.2cm。

⑨その他の遺物

石製品（第40図） 280～285は滑石製石鍋およびその転用品である。280は石鍋の口縁部片。端部下方



第40図 1区出土滑石製品実測図（1/4）



第41図 1区出土木製品実測図（1/4）

に径0.8cmの孔を穿つ。外面は斜位のケズリ、内面は研磨。外面にスス付着。SE021出土。281は底部片の転用品。底面に径0.8cmの孔が3箇所確認できる。そのうち2箇所には、金属が埋まる。外面は継位のケズリ、内面は研磨する。SK044出土。282は底部片。外面にスス付着。復元底径25.4cm。SE041出土。283・284は胴部片。長方形の把手をもつ。外面は継位のケズリ、内面は研磨する。SE047出土。285は底部片の転用品。底面の3箇所に径0.8~0.9cmの孔が確認できる。両面にスス付着。ケズリにより破面を調整する。SE047出土。

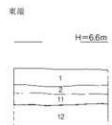
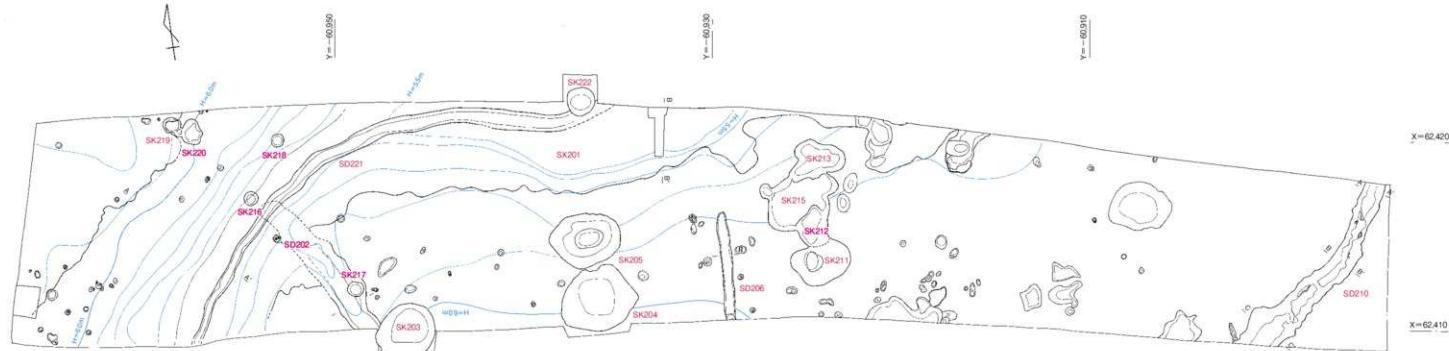
木製品（第41図） 286は火きり臼。残存長18.5cm。高さ3.5cm、幅2.6cm。使用により焦げる。芯持材。樹種は不明。SE036出土。287は陽物。断面長方形の細長い材の四隅を面取りするため、断面は八角形を呈す。長さ36.4cm以上、幅は3.8cm、厚さ2.2cm。亀頭部は長さ6.9cm、幅3.8cm、2.8cmで、やや厚みを増す。くびれ部は幅2.5cm。芯持材。樹種は不明。SE089底面出土。

3) 小結

弥生時代の遺構は、早~前期の掘立柱建物と土坑を主体とする。その性格は倉庫および貯蔵穴と考えられ、集落の中でも貯蔵を担う地区であったと考えられる。倉庫群は主軸方位から3種類に分けられ、時期差を示すものと考えられるが、先後関係は不明である。貯蔵穴群も、主軸方位から南北・東西の2種類に分けられる。出土土器は、刻目突帯文の甕が大多数を占める。

古代以降の遺構は、10世紀後半から12世紀後半を中心とする時期の柵列や掘立柱建物、井戸を主体とする。特に、掘立柱建物・柵・溝の主軸方位や出土遺物の時期から、複数時期の屋敷跡が復元できそうである。また、土壙墓SR062から出土した副葬品は、セット内容としてはごく一般的であるが、貴重な青磁1類の完形品を有する点で特徴的である。

1区の遺構は、後述する2・3区とは内容が全く異なるが、その要因は地理的条件が関係すると推測される。詳細な検討はVI章にゆずりたい。
(比嘉)



第42図 2区段構配位置図および土層断面図 (1/200, 1/80)

3. 2区の調査

1) 概要

2区は事業対象地の南縁にあたり、長さ73m、幅9~13mの調査区である。調査前の現況は水田で、標高6.25~6.45mであった。第42図に調査区南壁の土層を掲載している。明黄褐色~淡黄色シルトを検出面とし、西から東へわずかに傾斜するものの、概ね平坦な地形である。西端は標高6.25m、東端は5.9mを測る。南西端から北壁中央に向けて湾曲する浅い谷(SX201)があり、その付近に遺構の大半が分布している。調査区東半には地山上に黒褐色土(11層)がうすく堆積しており、東端のSD210はこの黒褐色土を切り込んでいる。

検出した遺構は弥生時代の溝1条、土坑11基、谷に堆積した遺物包含層、中世の溝1条、土坑2基である。出土遺物は刻目突帯文土器が大多数を占め、その他に木製品や石製品も出土している。なお、出土した木製品の一部の樹種同定結果はIV章-5を参照されたい(図中のNo.は試料番号と対応)。

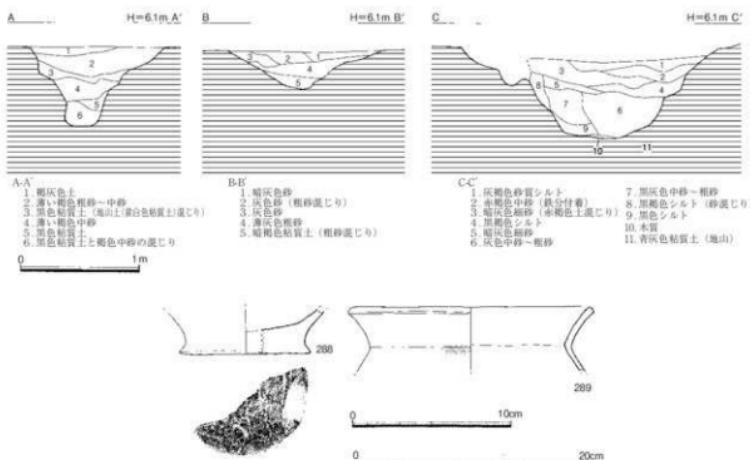
2) 遺構と遺物

(1) 弥生時代

①溝 (SD)

SD210(第43図) 調査区東端で検出した、幅1~2mの溝である。中央付近は深さ30cm程度であるのに対し、北端と南端は深く、それぞれ深さ70cm、80cmを測る。溝の断面形は一様ではなく、底面は凹凸が著しい。埋土の上層は灰褐色粗砂や鉄分が沈着した赤褐色粗砂、下層は黒色粘質土と砂の混じり土が堆積している。南端の深い部分からは湧水が著しい。遺物が非常に少なく時期を決定し難いが、弥生時代後期の所産と思われる。

出土遺物(第43図) 288は甕の底部。外底面に木葉痕を残す。復元底径8.2cm。289は甕の口縁部片。断面くの字形を呈し、やや外方に開く。胴部は摩滅するが一部にハケ目を残す。復元口径19.8cm。



第43図 SD210土層断面および出土遺物実測図 (1/40、288は1/3、289は1/4)

②土坑（SK）

SK203（第44図） 調査区西側、SX201の東岸付近で検出した長軸3.3m、短軸2.8m以上、深さ65cmの重んだ円形土坑である。調査区外に広がっていたため、可能な範囲で拡張して掘削した。埋土は大きく上層（黒褐色シルト）と下層（黒色粘土）に分層可能で、遺物取り上げの際もこれに則った。標高5.5m付近で壁面の地山は灰白色砂となり、湧水が見られる。土器は散漫に出土し、破片が多い。下層には木材や木製品が多く見られ、種実も多く出土した。また、底面では打ち込んだ杭を3本検出した。杭の先端は10~20cm程地中に打ち込まれている。籠などを結び付けて水にさらすためのものであろうか。また、埋土の土壤サンプルを採取し、自然科学分析を行った。分析結果の詳細はIV章に掲載している。コンテナケース1箱程度の土器・石器の他に、杵・部材等の木製品が出土している。突帯文土

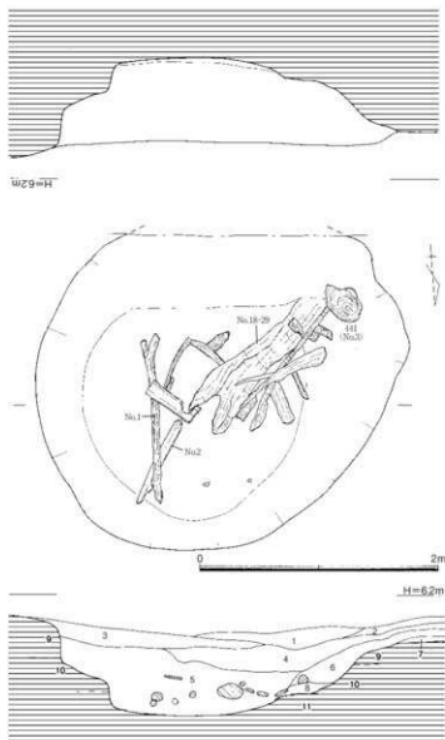
器とともに如意形口縁の甕も含まれ、突帯文土器・板付式土器共伴期の遺構と思われる。当初は水場の溜まり状遺構と考えていたが、部材や木製品が多いことから、貯木遺構であろうか。

出土遺物（第45図） 290・293~296・301は下層、291・292・297・299は拡張時に上面から出土。

290~293は甕の口縁部片。290は断面三角形の低い突帯に棒状工具で施文する。内面はケズリ、外面はナデ調整。外面に厚くススが付着し、内外面ともに黒色。

291は如意形口縁の端部下方にヘラ状工具で細かく刻目を施す。内面は横位、外面は縦位のハケ目。292は胴部がやや丸みを帯びる。口縁部に断面三角形の突帯を厚めに貼り付け、ヘラ状工具で施文。外面は縦位の貝殻条痕、内面はヨコナデ調整。復元口径17.0cm。293は口縁部下寄りに断面三角形の低い突帯を貼り付け、細い棒状工具で施文。口縁端部上面は平坦。外面は横位の貝殻条痕、内面はヨコナデ調整。復元口径19.4cm。

295・296は甕の底部。いずれも外底面をケズリ調整。294・297は丹塗磨研壺の口縁部。294は端部を短く細く外



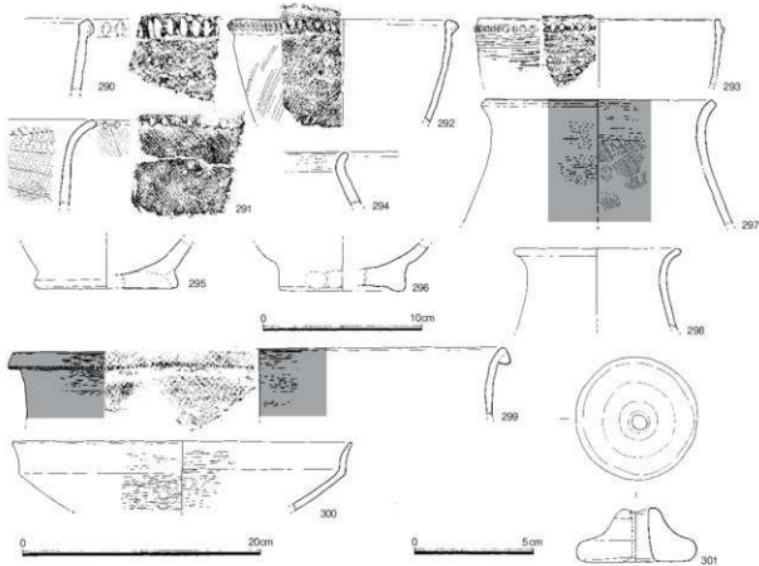
- | | |
|------------------|-----------------|
| 1. 黒褐色土 | 7. 黒褐色砂質土 |
| 2. 黒褐色細砂～中砂 | 8. 黒灰色質土（砂凝り） |
| 3. 黑褐色シルト | 9. 深い黄色シルト（地山） |
| 4. 黑色砂質シルト | 10. 黑色細砂～中砂（地山） |
| 5. 黑色粘土 | 11. 灰白色砂～粗砂（地山） |
| 6. 黑色粘土と黑色細砂の混じり | |

第44図 SK203実測図 (1/40)

反させる。赤色顔料は摩滅。研磨痕が一部に残る。297は口縁部がゆるやかに外反し、端部は平坦である。内外面ともに赤色顔料を施し、内面は中位にハケ目、上位はハケ目を研磨で消し、外面も研磨する。復元口径18.8cm。298は壺の口縁部。口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸く仕上げる。表面は摩滅。復元口径13.4cm。299は大型壺の口縁部。口縁部はやや外反気味に直立。端部に断面三角形の厚い突帯を貼り付け、頂部に細かい刻目を施す。内外面ともに赤色顔料と横位の研磨を施す。口縁部のみ内外面とも黒色化（黒斑か）。胎土は浅黄褐色（10YR8/3）、顔料は明赤褐色（2.5YR5/6）を呈す。復元口径41.0cm。300は黒色磨研の高壺。体部上半で外半気味に屈曲。口縁端部は細く、平坦に仕上げる。内外面ともに横位の研磨を密に施す。胎土はにぶい黄褐色（10YR5/4）、外面は黒褐色（10YR3/1）。復元口径28.2cm。301は土製の紡錘車。円錐形を呈す。中心に径8mm程の孔を穿つ。直径5.1cm、高さ2.3cm。重量37.7g。

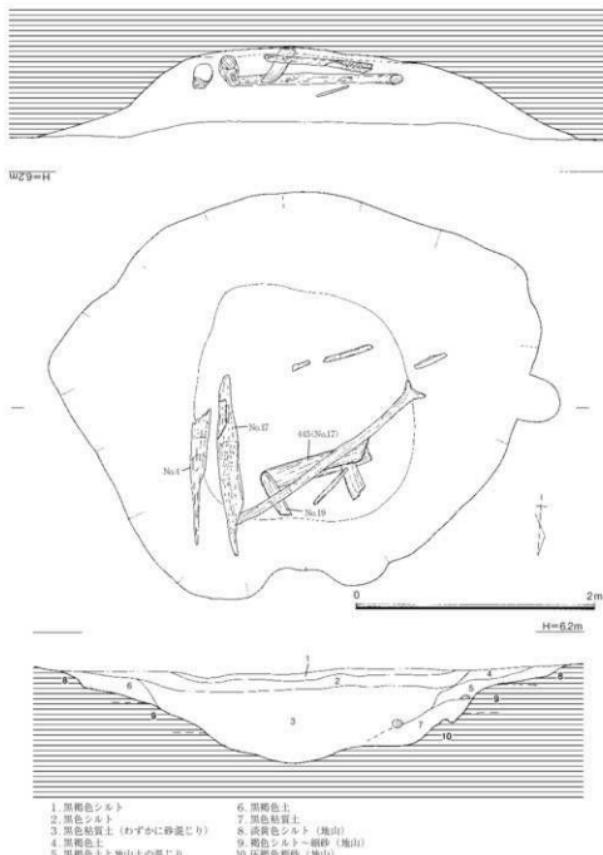
SK204（第46図） 調査区中央で検出した長軸3.9m、短軸3.1mの不整形土坑である。SK203と同様の規模・機能の遺構と考えている。SK205と南北に並び、一部重なっていた。平面観察からはSK204が切るように見えたが、重複部分がごくわずかであったため先後関係は心許ない。遺構の深さは60cmで、断面形は緩やかな窪み状を呈する。埋土は上層（黒褐色シルト）と下層（黒色粘土）に分層した。標高5.4~5.5mで壁面の地山は灰褐色粗砂となり、湧水が見られる。遺物は散漫に出土し、破片が大半を占める。重弧文を有する壺も見られる。下層には木質が多く、柱材と思われるものや、板材などが出土した。SK203とはほぼ同時期であろうか。

出土遺物（第47図） 303・305~308・310~312・314・316は下層出土。その他は上層出土。302~304、



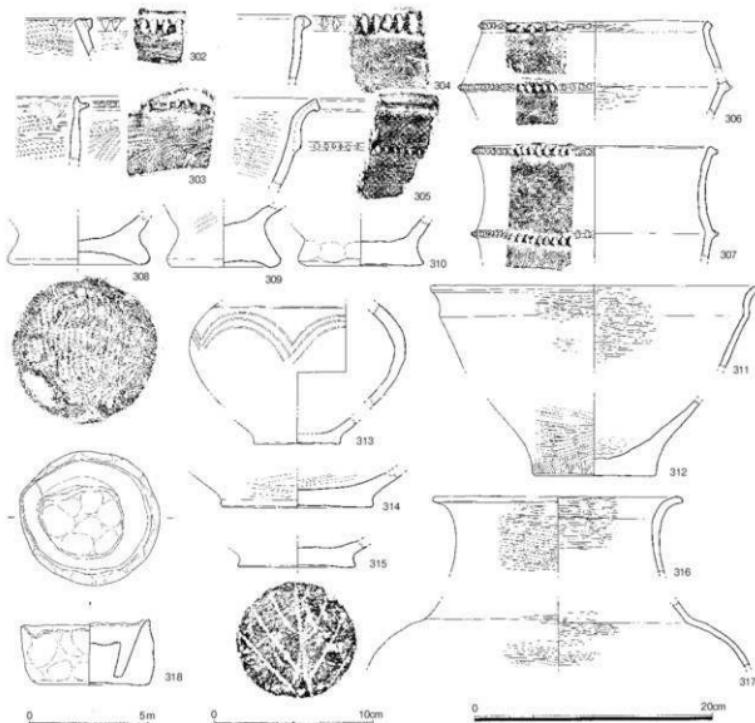
第45図 SK203出土遺物実測図 (290・291・294~296は1/3、301は1/2、その他は1/4)

306・307は刻目突帯文壺の口縁部片。304は細い棒状工具、それ以外はヘラ状工具で施文。302は屈曲壺。内外面ともに横位の貝殻条痕。303は口縁端部が細く丸い。突帯は端部より下がった位置にあり、細く高く突出する。内外面ともに横位、斜位の貝殻条痕。外面にスス付着。304は断面三角形の突帯に刻目を深く入れる。内外面ともに横位の板ナデ。外面にスス付着。306・307は屈曲壺。306の口縁端部は平坦に、307は断面三角形の突帯を貼り付けて平坦に仕上げ、内外面ともに板ナデ調整をするが、306は一部研磨される。復元口径はいずれも18.8cm。305は深鉢の口縁部。口縁部はゆるやかに外反し、端部は下方へつまみ出す。屈曲部にヘラ状工具で細かい刻目を施す。内面は横位の研磨。外面は板ナデ。外面は浅黄褐色（10YR6/3）だが、内面は黒化。308～310は壺の底部。308は端部を厚く突出させるが、底面の器厚は薄い。外底面に貝殻条痕。内底部は板ナデ。309は厚底で、外底面の貝殻条痕をナ



第46図 SK204実測図 (1/40)

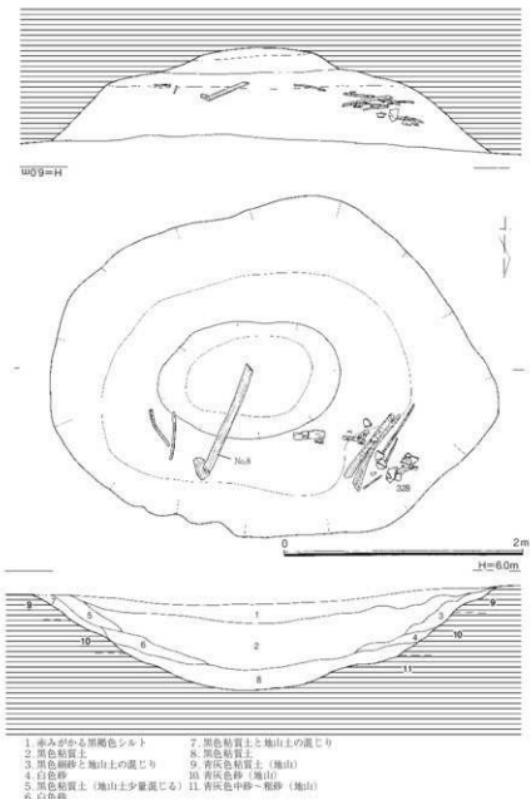
テ消す。内底面に厚くコゲ付着。311は深鉢の口縁部。黒色。口縁部は屈曲部からゆるやかに外反。外面ともに横位の研磨で、外面胴部は研磨のち板ナデ。復元口径27.0cm。312は黒色磨研壺あるいは深鉢の底部。外底面は平坦。外面は底部付近を窪、胴部を横方向に研磨。内面は摩滅。底径10.5cm。313は壺。摩滅著しい。肩部に一条の沈線、胴部に3条の重弧文を線刻する。内外面ともに研磨。胴部最大径14.8cm、底径5.5cm。314・315は壺の底部。外底面は平坦。内外面ともに横位の研磨。底径9.6cm。315は外底面に木葉痕。内底面は丁寧な板ナデ。底径7.4cm。316は黒色磨研壺の口縁部で、ゆるやかに外反し端部を丸く收める。内外面ともに横位の研磨。外面は黒色、内面は浅黄色(2.5Y7/3)。復元口径21.0cm。317は壺の肩部片。内外面とともに横位の研磨。にぶい黄橙色(10YR6/4)。318は不明土製品。円柱形の粘土を手捏ねしたのち、内側を工具で抉って削り取るが、中央部は円形の台状に残し、上面を指で押さえる。浅黄橙色(10YR8/3)。口径5.2cm、器高2.8cm、底径5.1cm。



第47図 SK204出土遺物実測図 (306・307・311・312・316・317は1/4、318は1/2、その他は1/3)

SK205（第48図） SK204の北側に隣接する長軸3.8m、短軸2.7mの橢円形気味の土坑である。前述のようにSK204とわずかに重複し、SK204に切られるように見えた。遺構の深さは75cmで、断面形は緩やかな弧状を呈する。埋土は上層（黒褐色シルト）と下層（黒色粘土）に分層した。標高5.3m付近で壁面の地山は青灰色粗砂となり、湧水が見られる。出土遺物は少ないが、北西隅では壺（328）の破片がまとまった状態で出土した。SK203・204と同様の貯木遺構と考えているが、下層からの木質の出土は少なかった。出土遺物はコンテナケース1箱分で、SK203・204に比べてやや古相を示すか。突帯文單純期の遺構と思われる。

出土遺物（第49図） 320・323は上層、その他は下層出土。319～321は刻目突帯文の壺の口縁部。いずれも棒状工具で施文する。319は屈曲壺で、外面は貝殻条痕を施す。320は内外面ともにヨコナデ。外面にスス付着。321は外面の貝殻条痕を縱位の板ナデで消す。内面は横位の板ナデ。復元口径18.2cm。

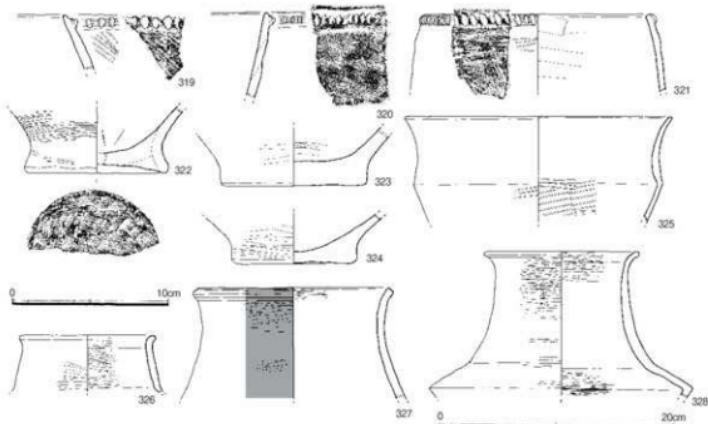


第48図 SK205実測図（1/40）

322は甕の底部。外面は横位の貝殻条痕。内底面は板ナデ。復元底径8.6cm。323・324は甕の底部。外面は横位の研磨。323は底径9.4cm、324は8.0cm。325は深鉢。口縁部が大きく外反する。内外面ともに横位の貝殻条痕を板ナデで消す。復元口径22.3cm。326・327は丹塗研磨甕の口縁部。内外面に赤色顔料・研磨を施す。326は復元口径11.0cm、327は16.2cm。328は黒色磨研甕。口縁部は短く外反し、肩部から胴部へ開きながら胴部で鋭く屈曲して算盤形を呈す。内外面ともに密に研磨を施す。外面は黒色、内面は灰黄色(25Y7/2)。復元口径12.7cm、胴部最大径22.4cm。

SK211(第50図) 調査区中央で検出した土坑である。SK212と重複するが、先後関係は不確実である。検出時は径3m程度の不整円形であったが、20cmほど掘り下げるとき径1m前後へとすさままっていく。深さは約110cmで、地表付近の壁面(地山)はシルト質であるが、底面付近では砂質に変わる。標高5.1m付近の壁面は湧水により大きく抉れている。5層では木製品がまとまっており、割り材や鋤未製品などが重なるように出土した。また、割り材の上では蔓状の不明品が束ねられたような状態で出土した。その他に種実も多く含まれていた。出土した木製品は割り材や未製品、板材などであることから、材料となる木材を貯めるためのものであろうか。ただし、壁面には湧水による抉れが認められることから、湧き出る水を汲み出す施設であった可能性も想定される。なお、5層より出土した割り材について放射性炭素年代測定を行った結果、弥生時代早期との結果を得た。詳細についてはIV章に掲載している。土器の出土量は多くないものの、刻目突帯文土器の他に、底面付近から素口縁の深鉢(333)が出土している。突帯文単純期の遺構と推定される。

出土遺物(第51図) 330は下層、333は最下層、その他は上層出土。329~332は刻目突帯文の甕で、329・331・332は屈曲甕である。329は大きく外反する口縁の端部に断面半円形の突帯を貼り付け、細い棒状工具で施文する。外面は丁寧な横位の板ナデ。硬質。330は断面三角形の突帯を上下からおさえて波状にする。外面は横位の板ナデ、内面は貝殻条痕を施す。331は肥厚する口縁端部に棒状工具で施文する。332は口縁部と屈曲部に断面三角形の突帯を貼り付け、ヘラ状工具で施文する。内外面ともに



第49図 SK205出土遺物実測図 (321・325~328は1/4、その他は1/3)

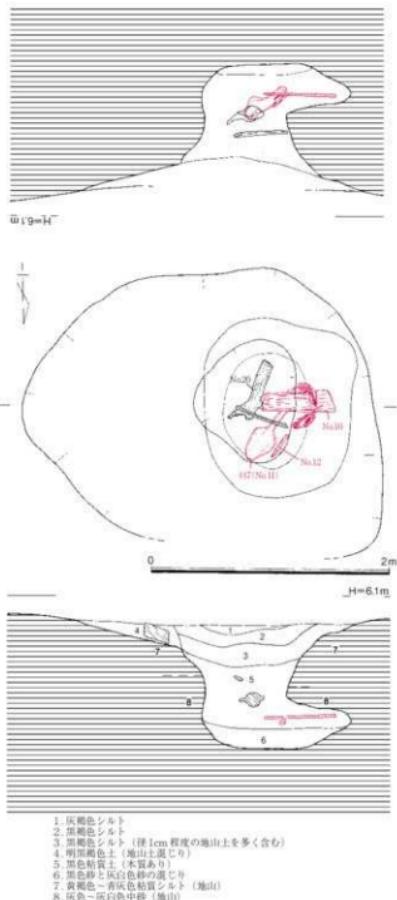
丁寧な横位の板ナデ。硬質。復元口径31.4cm。333は素口縁の深鉢。胴部はやや膨らみ、口縁端部は丸く収める。外面は單位が短い横位の研磨、内面は長い横位の研磨を密に施す。外面は赤色顔料を施すが、口縁端部外面から内面は黒化する。復元口径27.4cm。

SK212・213・215（第52図）

調査区中央で検出した、黒色土の大きな広がりである。南北5.6m、東西3mの範囲に広がり、複数の遺構が重複しているものと考えた。当初はSK211も含めて検出・掘り下げを進めていたが、途中でSK211は独立させた。一段ずつ検出・掘り下げを繰り返したもの、平面形と切り合いで把握することができなかつたため、一括して報告する。埋土はいずれも黒褐色～暗褐色粘質土で、中央のSK215とした部分は浅く、深さ10cm程度である。SK212は深さ25cm、SK213は深さ40cmを測る。遺物は極めて少なく、時期を決定し得る遺物もないが、埋土の質から弥生時代の遺構とした。

出土遺物（第53図） 334はSK215から出土した甕の底部。外面が二次被熱により赤化、内面は黒化する。

SK217（第52図） SD202の掘り下げ中に検出した、長軸85cm、短軸80cm、深さ70cmの円形土坑である。SD202との先後関係は不明である。検出面付近は黒褐色砂が堆積するが、その下は黒色粘土となり、土器、自然遺物を含む。SK211と同様に湧水が著しく、標高5.3m付近では壁面の抉れが見られる。4層からはヒヨウ



第50図 SK211実測図 (1/40)

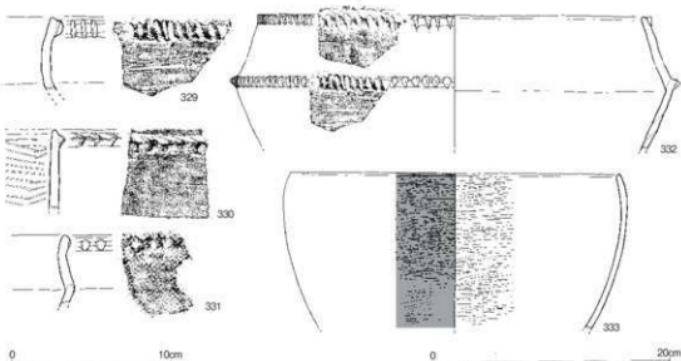
タンや多量の種実が出土しており、同定結果はIV章に掲載している。木器未製品や部材などは出土していないものの、規模や形態はSK211と類似しており、同じ用途の遺構であろうか。

出土遺物（第53図）335～337は刻目突帯文の甕。335は断面三角形の低い突帯にヘラ状工具で線状の刻目を施す。外面は横位の貝殻条痕、内面は横位の板ナデ。外面にスズ付着。336は口縁の端面が平坦で、端部よりやや下がった位置に貼り付けた断面三角形の突帯にヘラ状工具で施文する。外面は縦位の板ナデのち、口縁付近はヨコナデを施す。外面にはやや厚くスズが付着する。338は甕の口縁部、全体に摩滅が著しい。復元口径11.0cm。339は甕の底部。外面は横位の貝殻条痕をナデ消す。340はほぼ完形の管状の土錘。直径8mmほどの棒に粘土を巻きつけて成形したのち、棒を抜き取ったものと考えられる。全長5.7cm、幅2.6～3.0cm、重量40.8g。

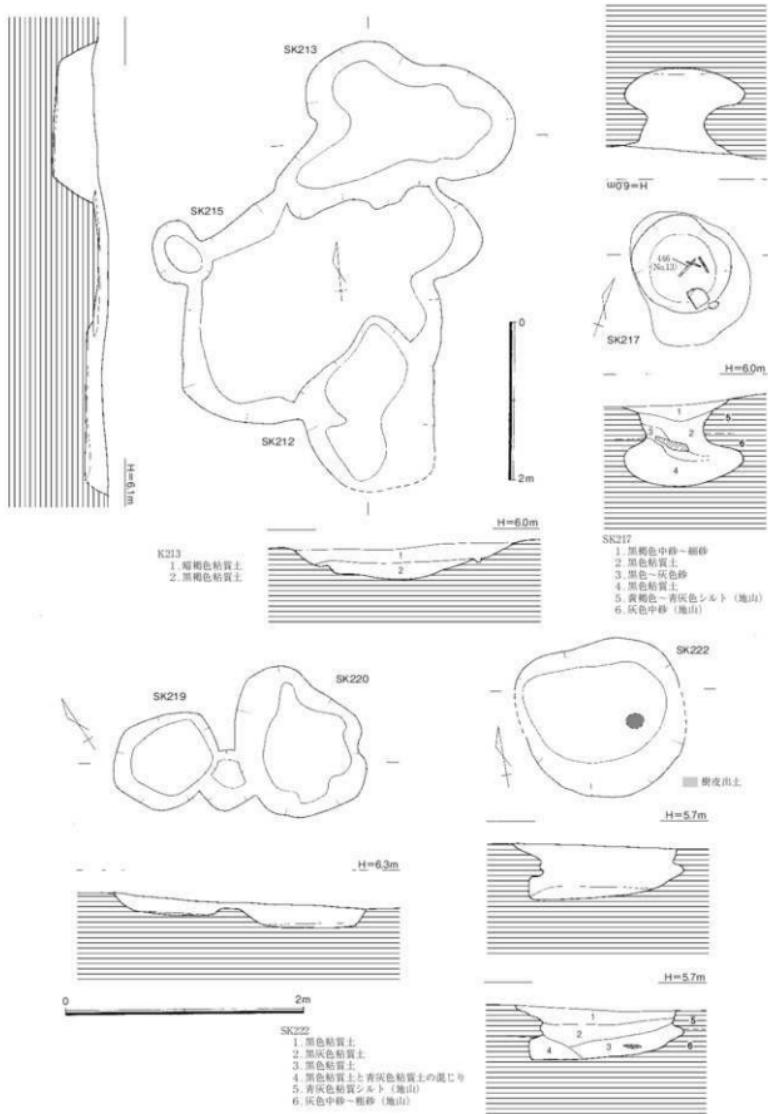
SK219・220（第52図）SK219は、調査区北西端でSX201の遺物包含層掘り下げの際に検出した土坑である。包含層との先後関係は把握できなかった。長軸1.2m、短軸1mの不整円形で、深さ20cmを測る。検出時はSK220と重複していたが、掘り下げるとき分離した。SK220との先後関係も不明である。埋土は黒褐色シルトで、検出面付近では砾と土器が混じっていた。

SK220はSK219の東で検出した土坑である。当初はSK219と一緒にしたものとしていたが、掘り下げると分離したため、新たな番号をつけた。長軸1.6m、短軸1.2m、深さ20cmの楕円形土坑で、埋土は黒褐色シルトである。半裁して土層観察したが、分層は困難であった。コンテナケース1箱分の遺物が出土している。

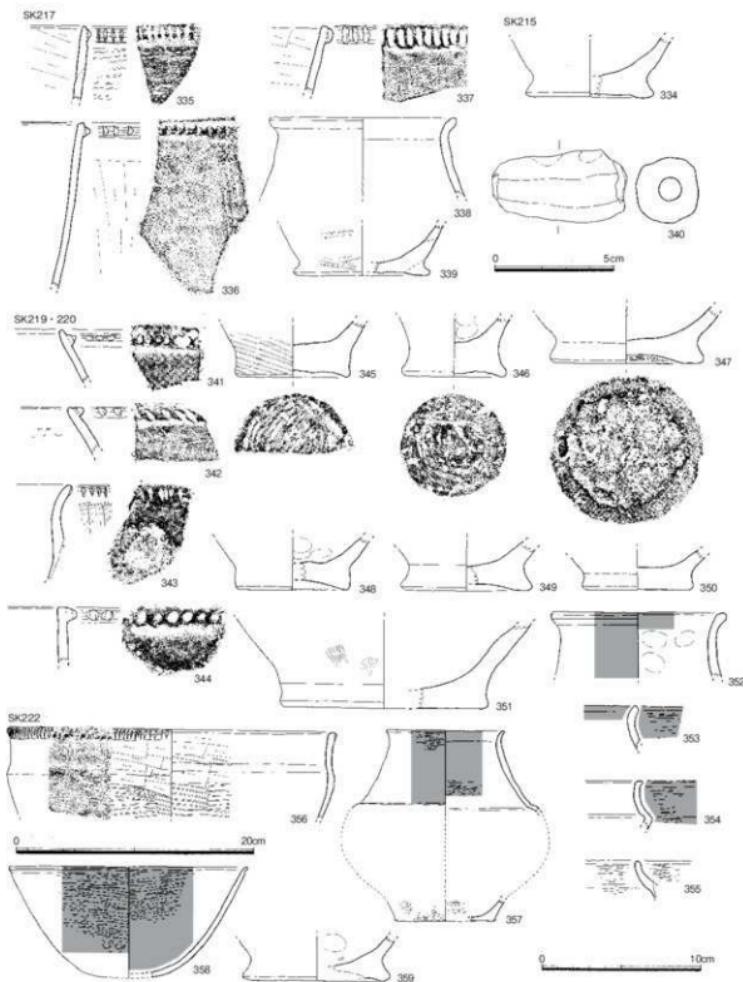
出土遺物（第53図）345・346・353はSK219あるいはSK220、その他はSK220からの出土。341・342・344は刻目突帯文の甕、343は如意形口縁の甕の口縁部である。341は屈曲甕で、口縁下部の断面三角形の突帯にヘラ状工具で施文する。342は屈曲甕で、口縁直下の断面半円形の突帯に細い棒状工具で斜めに施文する。内面は貝殻条痕をナデ消す。343はゆるやかな如意形口縁の端部にヘラ状工具で線状に刻目を施文する。外面は縦位の板ナデ。344は断面台形の高い突帯に指で浅く施文する。345～350は甕あるいは鉢の底部。345～347は外底面に貝殻条痕を残す。いずれも外面が二次被熱により赤化あるいは



第51図 SK211出土遺物実測図（332・333は1/4、その他は1/3）



第52図 SK212・213・215・217・219・220・222実測図 (SK212・213・215は1/60、その他は1/40)



第53図 SK215・217・219・220・222出土遺物実測図 (356・357は1/4、340は1/2、その他は1/3)

黒化する。351は黒色磨研壺の底部。内面は橙色（5YR7/6）を呈す。352・353は壺の口縁部。352は口縁部がゆるやかに外反しながら肥厚する。口縁部内面から外面に赤色顔料・研磨を施すが摩滅する。354・355は浅鉢の口縁部。354は口縁端部が外方に細く突出する。外面は横位の研磨、赤色顔料を施す。内面は黒化する。355は黒色磨研。口縁端部は外反しながら丸く取める。

SK222（第52図） 調査区中央北壁沿いで検出した土坑で、SX201の埋土中に掘り込まれたものである。長軸1.4m、短軸1.3mの楕円形土坑で、深さ45cmを測る。埋土は黒色粘質土が主体で、激しい湧水はないものの、樹皮などの自然遺物が比較的の残っていた。

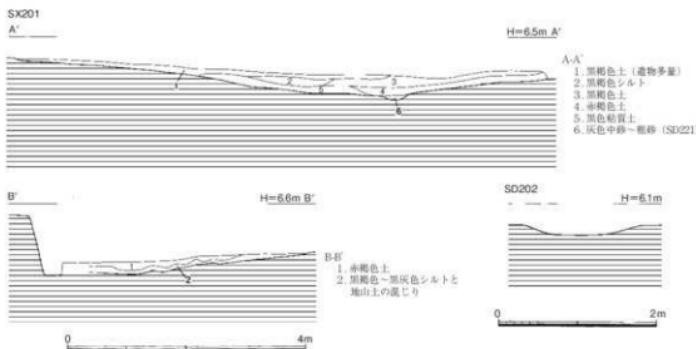
出土遺物（第53図、写真1）356は刻目突窓文の甕。屈曲部からゆるやかに外反する口縁の端部に薄く粘土を貼り付け、ヘラ状工具で線状に施す。内外面ともに横位の貝殻条痕を残し、屈曲部以上は横位の板ナデあるいはヨコナデで消す。内外面ともに厚くススが付着する。復元口径26.2cm。357は丹塗磨研壺。胴部が細片のため復元不可能だが、同一個体であろう。外反する口縁部の端部は細く丸く取れる。頸部内面上半から外面全体に赤色顔料・研磨を施す。復元口径9.8cm、復元底径8.5cm。358は直口の浅鉢。口縁部外面に1条の沈線が巡る。内外面ともに横位の研磨・赤色顔料を施す。一部に黒斑あり。復元口径14.6cm。359は甕の底部。内底面に種子圧痕あり。写真1は樹皮である。削られて渦巻状に丸まつた樹木の皮が、一箇所から集中的に出土した。樹種は不明だが、サクラか。形状を保存するため、バインダー処理を施している。



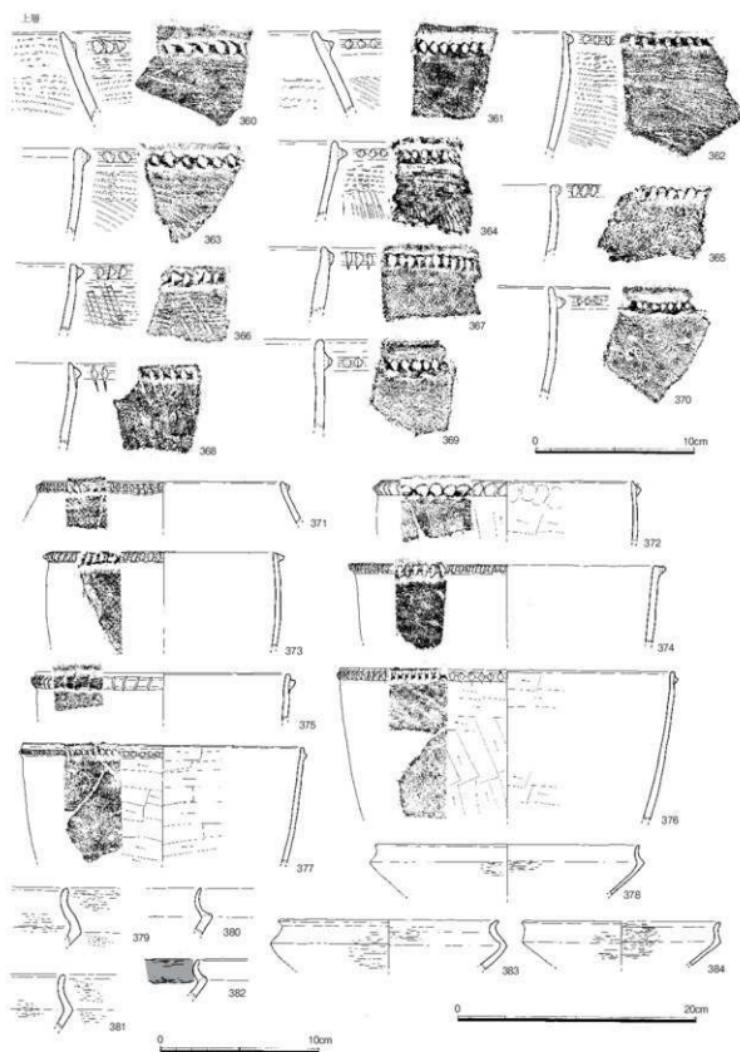
写真1 SK222出土樹皮

③不明遺構（SX）

SX201、SD221（第42・54図） 調査区南西から北東に向かって延びる深い谷に堆積した遺物包含層である。幅は8m～11m、深さは50cm程度で、この深い谷は北東方向へ延び、3区のSX330へと繋がる。西岸の標高は6.1m、底面の標高は南端で5.6m、北東端は5.5mで、南西から北東に向かってわずか



第54図 SX201土層およびSD202断面実測図（SX201は1/80、SD202は1/60）

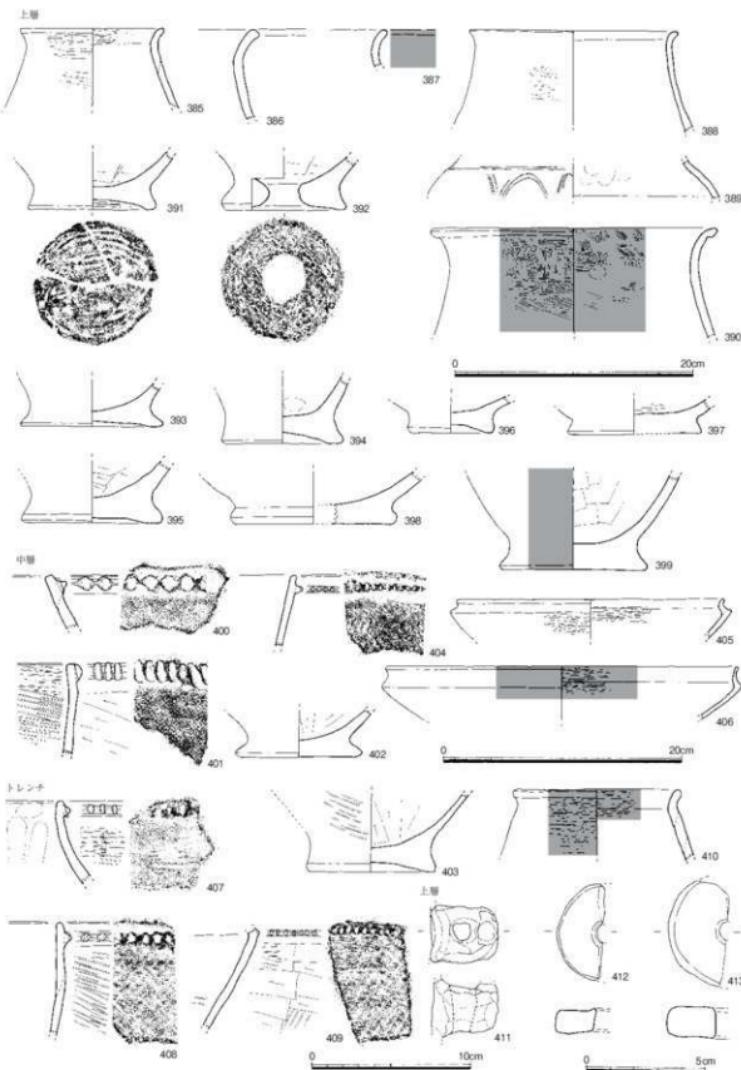


第55図 SX201出土遺物実測図1 (371~378・383・384は1/4、その他は1/3)

に傾斜している。土層ベルトA-A'の観察より、埋土を大きく3層に分層した。上層は黒褐色土～シルト質土（1～3層）、中層は赤褐色土（4層）、下層は黒色粘質土（5層）とし、遺物は層毎に分けて取り上げた。遺物の大半は上層からの出土で、中層・下層にはほとんど見られない。また、遺物の出土はY=-60.950以西に集中しており、東半からの出土遺物は少ない。大半の遺物は西岸から流れ込んだ状況である。埋土に砂はほとんど含まれず、浅い谷が湿地のような状態で埋没していったものであろうか。コンテナケース20箱前後の土器・石器が出土した。突帯文単純期と思われる。

また、中層・下層を除去すると、底面に幅40～100cmの溝が検出された。この溝はSD221としたもので、深さは10cm程度である。調査区南西端から中央北壁まで、SX201の底面全体で検出できた。埋土は灰色砂で、遺物は全く含まれていない。SX201埋没前はここに水がわずかに流れていたのか。この溝は北壁際でSK221に切られたり、調査区外に延びるかどうかは確認できていない。しかし、3区においてもSX330の底面で砂が堆積する細い溝（SD333）を確認しており、SD221と同様のものの可能性が高いと思われる。

出土遺物（第55・56図）360～399、411～413は上層、400～406は中層、407～410はトレンチ出土。360～377は刻目突帯文の壺の口縁部。360・361・371は屈曲壺、その他は直口縁。361・366～370・375～377はヘラ状工具。372は指、その他は棒状工具で口縁部突帯に施文する。367・368はヘラ状工具が突帯から胴部にかけて長くある。375は断面三角形の高い突帯にヘラ状工具で細く深い線刻が約1cm間隔で入るため、突帯がブロックの連なりのように見える。360～364・366は貝殻条痕が残る。胴部は継縫、口縁部付近は横位に変化する。その他は、板ナデやヨコナデ調整を施す。いずれも外面にススが付着する。復元口径は371が20.0cm、372が20.8cm、373が18.2cm、374が24.6cm、375が20.4cm、376が27.2cm、377が23.0cmを測る。378～384は浅鉢の口縁部。いずれも口縁部がゆるやかに外反し、端部は丸く收める。内外面ともに横位の研磨を施し、黒色あるいは黒褐色を呈す。復元口径は、378が21.8cm、383が16.8cm、384が16.4を測る。385～390は壺。385・388は口縁が短く外反、386・390は大きく外反する。387は外面に、390は内外面に赤色顔料を施す。388は黒色磨研か。389は肩部に2条の沈線、胴部に3条の重弧文を線刻する。390の外面は継縫のハケ目を横位の研磨で消す。復元口径は385が7.2cm、388が17.2cm、390が23.6cm。391～395は壺。396～399は壺の底部。392は底面に径1.8cm程度の孔を外側からの敲打で穿つ。391・392・395は外底面に貝殻条痕を残す。400は屈曲壺の口縁部。断面三角形の突帯に指で施文する。401は半円形の突帯に棒状工具で施文する。外面は横位の板ナデ、内面は横位の貝殻条痕を施す。402・403は壺の底部。403の外面は貝殻条痕をナデ消す。404は直口縁の壺。口縁端部より下がった位置に断面三角形の高い突帯を貼り付け、ヘラ状工具で細かい刻目を施す。405・406は浅鉢。405は口縁部を短く強く外反させ、端部を丸く收める。406は口縁部が薄く直線的だが、端部は肥厚させ丸く收める。いずれも内外面が研磨され、黒色あるいは黒褐色を呈す。406は内外面に赤色顔料がわずかに残る。復元口径は405が22.0cm、406が29.2cm。407は屈曲壺で、口縁部は大きく外反し、口縁端部下の断面三角形の突帯には棒状工具で刻目を施す。外面には横位の貝殻条痕を残す。408は直口縁の壺で、口縁端部より下がった位置に貼り付けた断面三角形の突帯に棒状工具で刻目を施文する。外面は横位の貝殻条痕を残す。409は屈曲壺の胴部。屈曲部の頂部にヘラ状工具で細かい刻目を施す。内外面ともに貝殻条痕を板ナデで消す。410は丹塗磨研壺の口縁部。口縁下を指で強く押さえて屈曲させる。口縁部内面から外面全体に横位の研磨と赤色顔料を施す。411は不明土製品。把手か。中央に孔を穿つ。長さ4.2cm、幅3.5cm、厚さ3.0cmで褐色（10YR 4/4）を呈す。412・413は円盤形の土製筋錘車。両者とも半分ほど欠失する。412は直径4.2cm、7.5gを測る。413は胎土に砂粒を含まず、精緻。復元直径は約5cm、14.8gを測る。



第56図 SX201出土遺物実測図2 (388~390・405・406は1/4、412・413は1/2、その他は1/3)

SD202（第42・62図） SD202は調査区西半で検出した浅い溝状の窪みである。SK203の西側からSX201へ向かって延びている。幅1.5m、深さ15cm前後である。埋土の大半は黒色細砂～中砂で、遺物を多く含む。一部下層に黒色粘土が見られる。北西に向かって低くなり、SX201遺物包含層の上面にまで広がっている。SD202からはコンテナケース2箱分の遺物が出土した。先述のように黒色砂及び黒色粘土を除去すると底面でSK217を検出したが、先後関係は把握できていない。

出土遺物（第57図） 414・415・418・434は下層、420・421・423・428・432・435・439は検出時、その他は上層出土。414～424は刻目突帯文の甕で、414～418は屈曲甕、その他は直口縁である。417・419・422・424は棒状工具、その他はヘラ状工具で施す。414・416・420は外面に貝殻条痕を残す。415は内外面ともに板ナデを施す。内面に種子圧痕を残す。417は屈曲部に断面半円形の高い突帯を貼り付ける。418は屈曲部の上下をつまみ出して頂部を盛り上げ、刻目を施す。419・423・424は板状工具でナデあるいはケズリを施す。425～429は甕の底部。425は外底面と内底部に貝殻条痕を残す。426は外底面に貝殻条痕を残す。427はくびれ部の径が小さく、底端部が大きく開く。外面は貝殻条痕を板状工具で消す。430～434は甕。430は黒色磨研壺の口縁～頸部。内外面ともに横位の研磨。復元口径15.0cm。432・433は丹塗磨研壺で、432は内外面、433は外面に赤色顔料を施す。435～437は浅鉢。435は口縁がほぼ直立し、端部は丸く收める。復元口径20.4cm。436は方形波状口縁の鉢。屈曲部は外方に突出し、口縁部は外反する。端部は細く丸く收める。内面に指頭圧痕を残す。437は口縁部が短く強く外反する。438も方形波状口縁の鉢か。439・440は土製紡錘車。439は円錐形を呈し、5条の沈線が巡る。中央に1つ、周間に3つ以上の穿孔がある。穿孔は両側から行われ、中央孔の裏側両脇には穿孔を途中で止めた痕跡がある。直径7.2cm、高さ4.2cm、重量85.5g。440は円盤形を呈し、中央に6mm程の穿孔がある。直径5.8cm、重量36.6g。

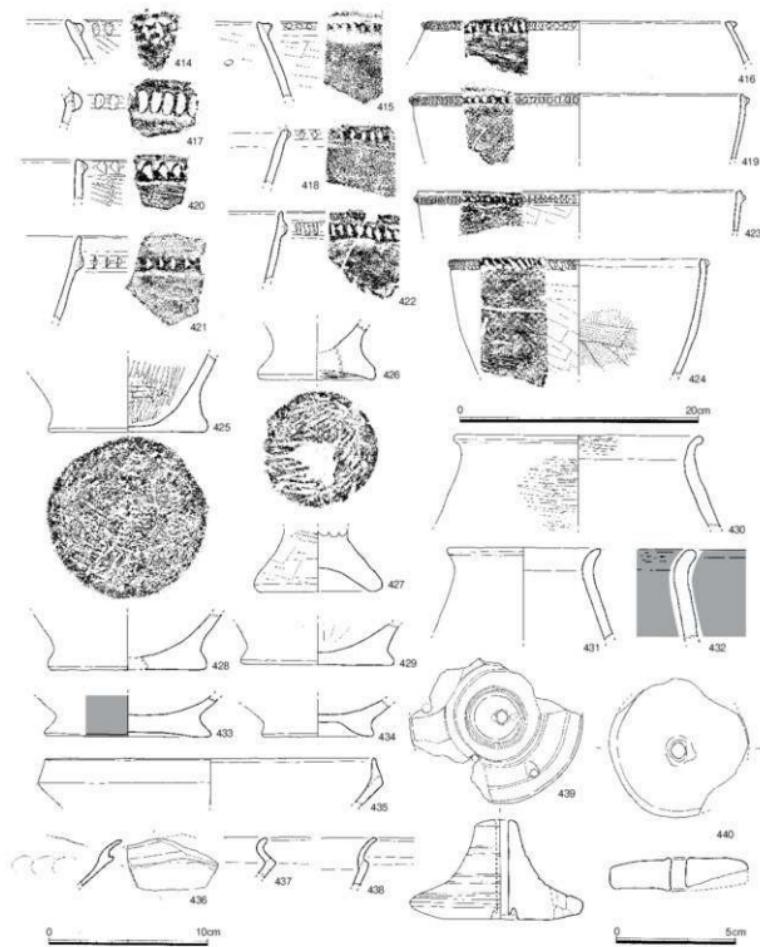
④木製品（第58図）

441（試料No.3）は丸木舟あるいは大型槽の破片。芯持材を年輪軸に対して斜め方向に削り出す。表面を炭化させ、防水機能を高めている。樹種はマツ属複維管束亜属。残存長39.9cm、幅25.0cm、厚さ3cm以上。SK203出土。442（試料No.1）は堅柱。持ち手部分は欠失する。全体を縱方向にはつる。端部は使用により磨耗する。芯持丸木。樹種はツバキ属。残存長63.4cm、直径6.3～7.4cm。SK203出土。443（試料No.7）は鍤柄。端部を欠失する。取付け部は段を有し、使用により磨耗する。芯持削出。樹種はコナラ属アカガシ亜属。残存長59.7cm、直径2.8～4.2cm。SK204出土。444（試料No.6）は小型臼（白充填材）の完形。内面は使用により磨耗して内湾する。芯持削出。樹種はエノキ属。口径10.7～11.4cm、器高9.4cm、底径6.8～7.4cm。SK204出土。445（試料No.5）は壁材か。両端部に固定用の突出部を削り出す。板目取り。樹種はツヅラジイ。全長96.7cm、幅16.6cm、厚さ1.2～2.5cm。SK204出土。446（試料No.13）は棒状木製品で、刺突具か。加工により先端を削り出す。基部側は欠失する。割材。樹種はイスノキで硬質。残存長21.8cm、幅1.6～1.8cm、厚さ1.8～2.1cm。SK217出土。447（試料No.11）は鍤未製品。柄の一部に樹皮を残す。板目取り。クスノキ。残存長72.6cm。柄の全長40.2cm、幅7.5cm。身の幅22.1cm。柄は完存するが、鍤としては短いため、組合せ式の可能性もある。SK211出土。

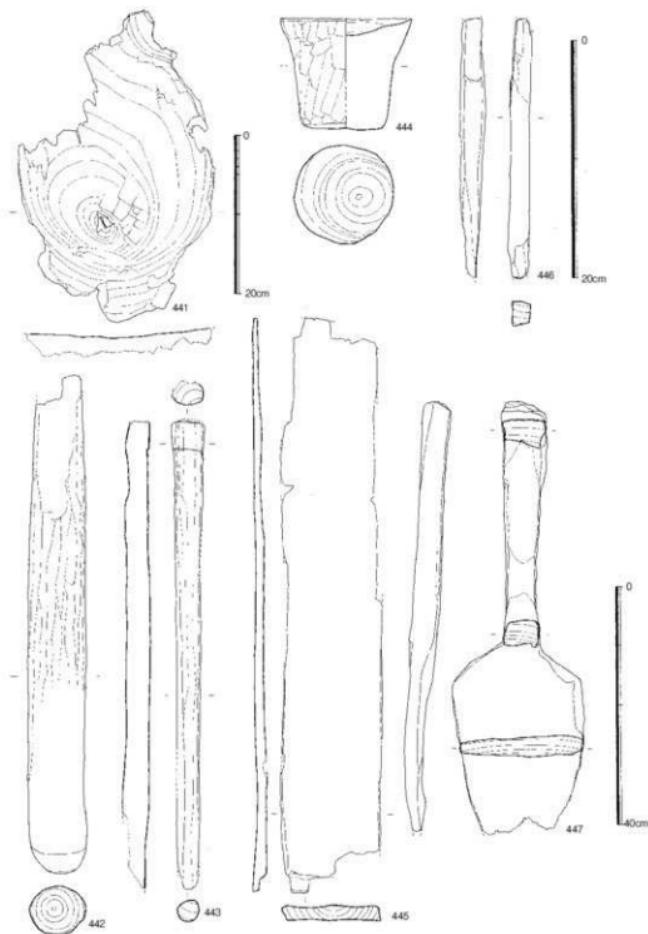
（2）古代以降

①溝（SD）

SD206（第42・59図） 調査区中央を南北方向に延びる溝である。幅60cm前後、現存長5.5m、深さ20cmを測る。埋土は灰褐色土～シルトで、底面には凸凹がみられる。遺物は土器片少量のみである。遺構



第57図 SD202出土遺物実測図 (416・419・423・424は1/4、439・440は1/2、その他は1/3)



第58図 2区出土木製品実測図 (444・446は1/4、445・447は1/8、その他は1/6)

の時期は確定できないが、埋土の質から中世の所産と考えている。

②土坑（SK）

SK216（第60図） SX201埋没後に掘り込まれた土坑で、埋土は灰色シルトで識別が容易であった。平面プランは円形で、径90cm、深さ80cmを測る。底面付近には有機物が少量含まれていた。出土遺物は少量であるが、白磁、瓦器、滑石製品等が出土している。

出土遺物（第61図） 448は瓦器挽の口縁部。回転ナデ成形後、内外面ともに横位の研磨を施す。復元口径15.9cm。449は瓦器挽の底部。高台はやや外に向く。

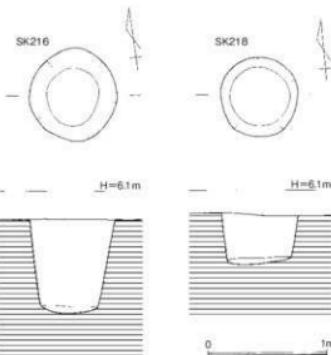
SK218（第60図） SK216と同じく、SX201埋没後に掘り込まれた円形の土坑である。径80cm、深さ40cmを測る。出土遺物は少量で弥生土器と思われるものしか見られないが、埋土はSK216と同じ灰色シルトであることから、中世の遺構と考えている。

3) 小結

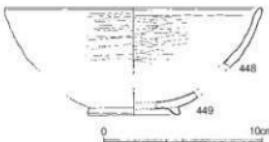
2区の調査では弥生時代早期～前期の遺構が主で、多量の刻目突帯文土器が出土した。特筆すべき遺構として当該期の貯木遺構が挙げられる。調査区を横切る浅い谷（SX201）のそばには同規模のSK203・204・205が設けられ、刻目突帯文土器とともに木製品や部材が出土した。部材だけでなく破損した木製品も含まれており、水漬けにして貯めたものと廃棄したものとが混在している状況である。一方、SK211も未製品や部材を含むものの、径は1m程度で規模が異なる。SK203等と同様の貯木遺構と考えたが、壁面が湧水により大きく抉れることから、水を汲み出して利用していた可能性も考えられる。2区は居住域としては利用されず、集落縁辺部の低地利用の状況を窺うことができた。



第59図 SD206土層断面実測図（1/40）



第60図 SK216・218実測図（1/40）



第61図 SK216出土遺物実測図（1/3）

4. 3区の調査

1) 概要

3区は事業対象地の北縁にあたり、長さ約55m、幅15~27mの調査区である。調査前の現況は水田で、標高6.0~6.35mであった。調査区北縁の土層を第62図に掲載している。遺構面は標高5.65~6.25mで、南西部部分は一段高く、表土直下で黄褐色土となる。南西端を除く西半は削平され、礫層が露出している。この部分にも本来は遺構が存在したものと思われるが、深い遺構だけが辛うじて残っている状況である。遺構は南西部と北東部に多く、弥生時代と中世の遺構が重複している。調査区東端は浅い谷(SX330)で、これは2区SX201の延長部分である。

検出した遺構は弥生時代の竪穴住居跡1基、土坑4基、浅い谷に堆積した遺物包含層、中世の溝3条、土坑11基である。

2) 遺構と遺物

(1) 弥生時代

①竪穴住居跡 (SC)

SC301(第63図) 調査区南西端で検出した円形の竪穴住居跡である。調査区外に広がっていたため拡張して完掘した。直径4mのほぼ正円形で、主柱穴は4本、中央に土坑を有する。住居跡の遺存状況は非常に悪く、深さ5~10cmしか残っていない。埋土は黒褐色土で、分層是不可能であった。床面は固く締まり、部分的に粘土を貼り付けていると思われる部分もあるが、明確な貼床は認められなかつた。南西部の床面付近では炭化物の小片が複数見られる。中央土坑は径70cm、深さ15cmの不整円形である。埋土は黒褐色シルトで、黄褐色土の粒の混じり具合で分層したものの不明瞭である。火を受けた痕跡は無く、炭も含まない。主柱穴は径25~40cm、深さ30~50cmである。

出土遺物は非常に少なく、コントナケース1箱に満たない。出土状況も散漫で、投棄されたような状況は見られなかった。土器はいずれも小片であるが、刻目突帯文土器とともに如意形口縁の甕、黒曜石製の石鐵(564)が出土している。弥生時代前期前半頃の遺構と思われる。

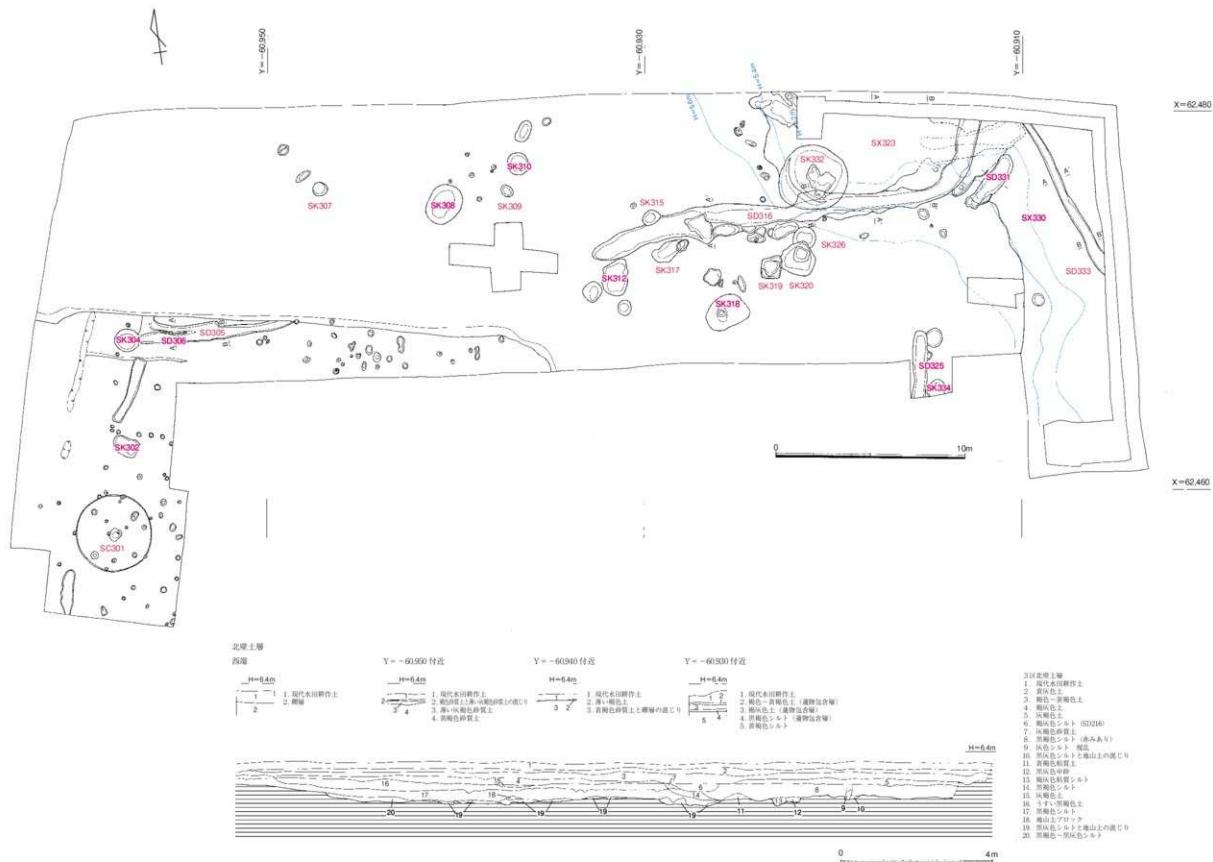
出土遺物(第63図) 454はベルト内、その他は上層出土。

450・451は刻目突帯文の甕口縁部で、いずれも直口縁である。450は断面三角形の突帯にヘラ状工具で細かい刻目を施す。451は断面半円形の厚い突帯に棒状工具で施す。外面は被熱により赤化する。452は板付系甕の口縁部である。如意形口縁の端部にヘラ状工具で細かい刻目を施す。453は鉢の口縁部である。口縁端部は屈曲して直立する。外面は横位に研磨する。454は甕の胴部で、3条の沈線文を描く。455は甕の底部片である。復元底径は8.2cmを測る。

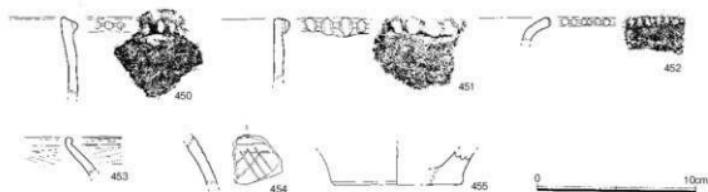
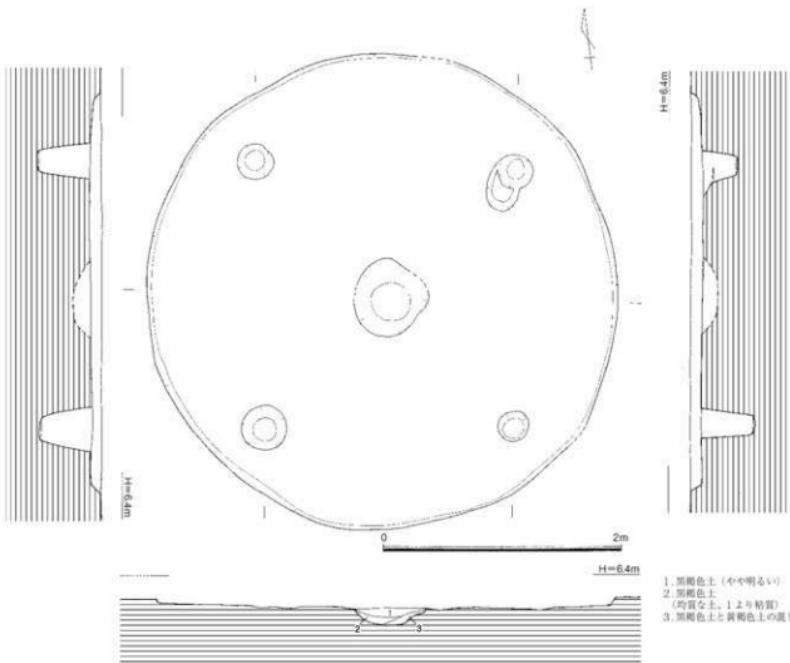
②土坑 (SK)

SK319(第64図) 調査区中央東寄りで検出した、1辺1~1.2mのやや歪んだ方形土坑である。埋土は黒褐色シルトで、深さ25cmを測る。底面は二段掘りになっている。出土遺物は少ないものの刻目突帯文土器が出土している。SK320とわずかに重複しており、不明瞭ながらSK320を切るものと思われる。

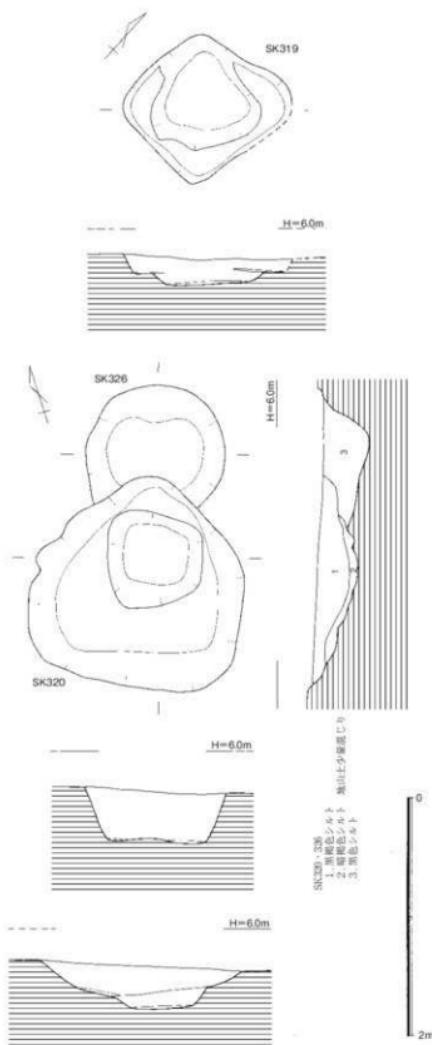
出土遺物(第65図) 456~459は刻目突帯文の甕の口縁部で、いずれも直口縁である。456・457は棒状工具、458・459はヘラ状工具で施す。いずれもナデあるいはヨコナデで器壁を調整する。460は浅鉢の口縁部である。口縁部は短く外反し、端部がさらに反りながら細くすぼまる。461は丹塗磨研甕の口縁部である。内外面ともに横位の研磨・赤色顔料を施す。復元口径14.0cmを測る。



第62図 3区構造配置図および土層断面図 (1/200, 1/40)



第63図 SC301および出土物実測図 (1/40、遺物は1/3)



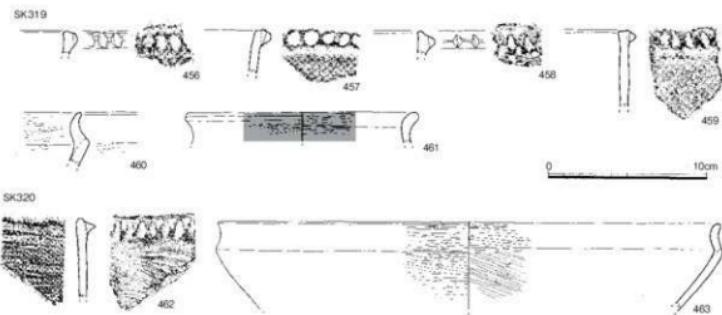
第64図 SK319・320・326実測図 (1/40)

SK320(第64図) SK319の東側で検出した土坑である。SK326と重複しており、当初は切り合いで把握できなかったが、平面・断面観察よりSK320が切っている。長軸1.8m、短軸1.7mの不整形で、深さ35cmを測る。埋土は黒褐色シルトで、SK326の埋土に比べるとやや明るい。少量の突帯文土器が出土している。

出土遺物(第65図) 462は刻目突帯文の甕の口縁部片である。高く尖る断面三角形の突帯頂部にヘラ状工具で施文する。内外面とともに横位の貝殻条痕を施す。463は浅鉢の口縁部である。口縁部は短く外反させ、端部は丸く收める。内外面とともに横位の研磨を施す。色調は灰赤色(25YR5/2)を呈す。復元口径31.0cmを測る。

SK326(第64図) SK320に切られる土坑である。径1.2m程度の円形土坑で、深さ65cmを測る。埋土は黒色シルトで、遺物は弥生土器片が少量出土したが、小片のため図示できなかった。

SK332(第66図) 調査区北東で検出した、長軸3.6m、短軸3.4mの円形土坑である。遺構検出時には把握できず、調査区北東の落ち込みSX323の掘り下げ中に検出した。掘削中に遺物が集中する地点に気付き、再度精査した結果、平面形を把握した。本来はSX323埋没後に掘り込まれたものと思われる。深さは約70cmで、上層の埋土は黒褐色土～シルト、その下は黒褐色粘質土で有機物を含む。壁面は標



第65図 SK319・320出土遺物実測図 (1/3)

高5.1m付近で灰色砂となり、湧水が見られる。底面付近には木片や棒状木製品などが残っており、そのなかに斧の柄(487)が含まれていた。2区で検出したSK203・204・205と規模や埋土の状況も似ており、同様の機能を持つものと考えている。また、埋土の土壤サンプルを採取し、自然科学分析を行った。分析結果の詳細はIV章に掲載している。突帯文単純期の遺構と推定される。遺物は、弥生土器が多い量に出土したほか、木製品、柱状片刃石斧(第80図600)が出土した。

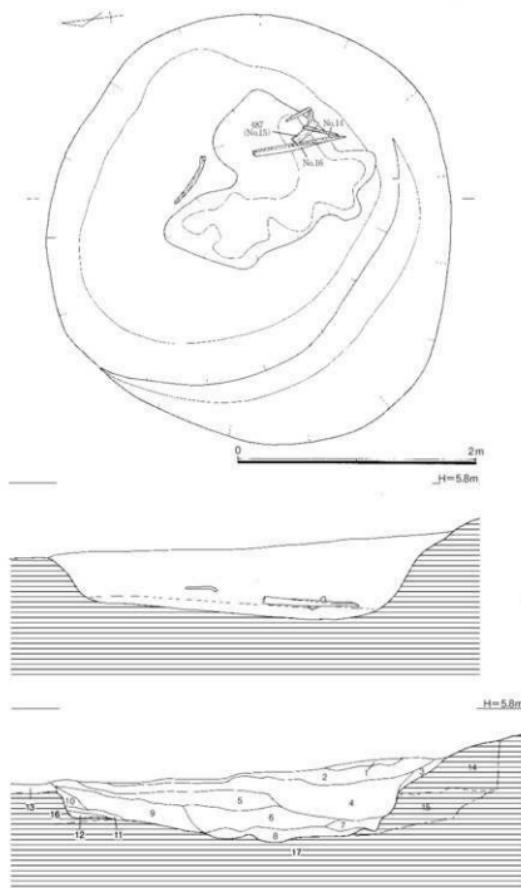
出土遺物(第67・68図) 464・487は最下層、465・466は下層、467は5層、468は6層、469～484は上層、485・486はトレンチ出土。その他は検出時のもので、SX323の遺物が混入する可能性がある。

464・468～470・472～475は刻目突帯文の壺の口縁部片で、470・473・474は屈曲壺、その他は直口縁である。468・470・472・474は棒状工具、その他はヘラ状工具で施す。468は外縁ともに貝殻条痕を残すが、外面は縦方向のケズリ調整で消される。469は外面を横方向にハケ調整、内面を横方向に板ナデ調整する。473は外反気味の口縁端部のやや下方に半円形の突帯を貼り付ける。内面は横位のケズリ調整を施す。474は屈曲部上部に貝殻条痕、下部に横位のケズリ痕が残る。475は外縁ともに貝殻条痕を残す。476～479は壺の底部である。476と477の外底面は貝殻条痕を残す。476の外縁も貝殻で調整するが、ナデにより消される。

465・483・484は浅鉢の口縁部で、465・483は黒色磨研。465は端部を屈曲・外反させる。484は口縁部がやや直立し、端部を肥厚させて丸く収める。復元口径25.4cm。486は直口縁の鉢の口縁部である。口縁端部にヘラ状工具で刻目を施す。内面に斜位のハケ目を残す。復元口径24.2cm。

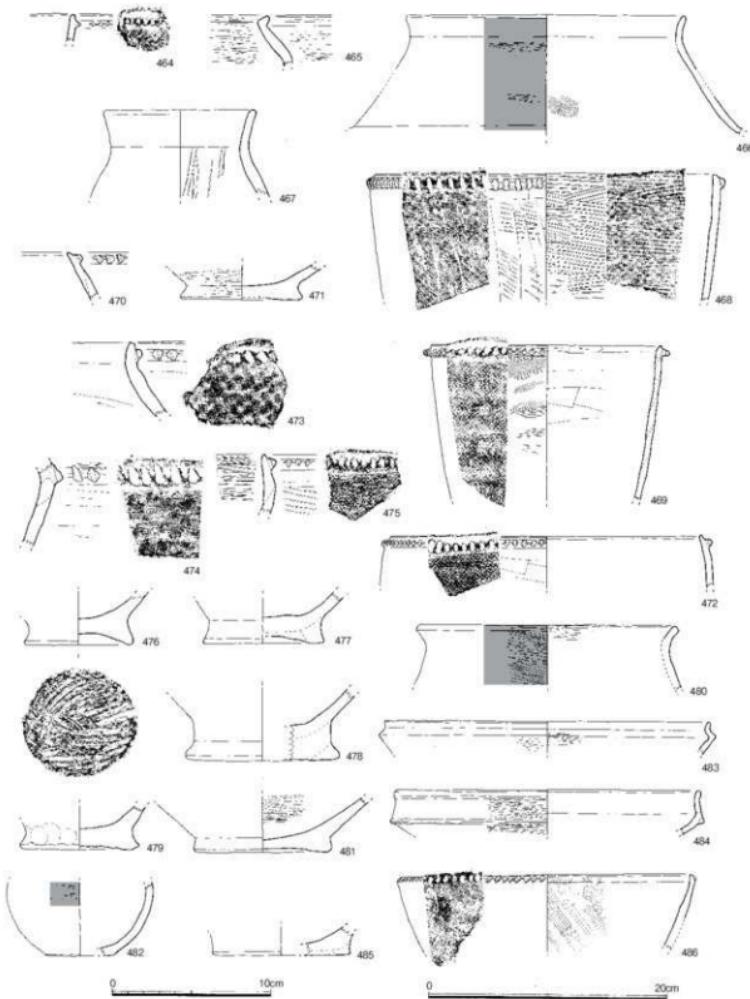
466・480は丹塗磨研壺の口縁～頸部片である。口縁は直立気味に外反する。復元口径21.2cm、480は13.8cm。467は壺の口縁～胴部片。口縁部は直立気味で、ゆるやかに外反する。内面は板ナデ調整。復元口径9.2cm。471・481は壺の底部である。内外面ともに横位の研磨を施す。482は壺の胴～底部片である。外面に赤色顔料と研磨の痕跡を残す。

487は柱状片刃石斧の木製斧柄である。共伴した柱状片刃石斧(第80図600)とセットになる可能性が高い。斧台は平面長方形で、全長29.7cmを測る。斧台前面は幅4.6cm、基部は幅1.3cmで基部にいくにつれ細くなる。幅1.8cmほどの装着溝には2カ所穿孔があるが、装着時ではなく、保管時の紐かけ孔

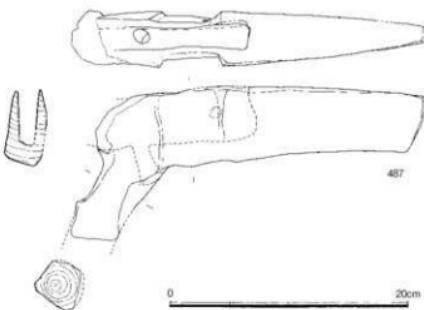


- | | |
|-----------------------|------------------------------|
| 1. 黒褐色土（わずかに砂混じる） | 10. 黒色粘質土と砂の混じり |
| 2. 黒褐色粘質シルト | 11. 黑色砂と灰色砂の混じり（黑色砂が主） |
| 3. 黒色土（わずかに黄色ishト混じり） | 12. 黑色細砂（地山土）と黒色砂の混じり（灰色砂が主） |
| 4. 黑褐色粘質土 粒子細かく均一 | 13. 黑灰シルトと灰白色砂の混じり |
| 5. 黑褐色粘質土 粒子細かく均一 | 14. 黑色～黃褐色シルト（地山） |
| 6. 黑褐色粘質土（粘性強、木質含む） | 15. 黑色～黃褐色シルト（地山） |
| 7. 黑褐色粘質土（空氣の砂混じる） | 16. 黑灰褐色粘質土～砂（地山） |
| 8. 黑灰色砂と白色砂混じり | 17. 灰白色細砂～中砂（地山） |
| 9. 黑色粘質土（粘性強い） | |

第66図 SK332実測図 (1/40)



第67図 SK332出土遺物実測図1 (466・468・469・472・480・483・484・486は1/4、その他は1/3)



第68図 SK332出土遺物実測図2 (1/4)

SX323とSX330が一連のものか判別できなかったが、掘り下げを進める過程で、埋土の違いから同一の包含層ではないと判断した。SX330との重複部分はわずかで先後関係は不明瞭であるが、北壁土層からはSX330が切っているように見える。南北方向の土層図(第69図)を見ると、SX323は南から北に緩やかに下がりながら、北壁付近ではほぼ平坦になっている。底面は凹凸が顕著である。

SX323埋没後にSK332が掘り込まれ、SK332埋没後にはさらに中世の溝SD316に切られている。先述のように、掘削当初はSK332を識別できずにSX323と一緒に掘り下げてしまったため、遺物が混じっている可能性もある。出土遺物は弥生土器片が出土したが、全体的に少ない。

出土遺物(第69図) 488~490は刻目突帯文の甕の口縁部である。488は直口縁で、断面半円形の突帶に棒状工具で施する。489・490は屈曲甕で、489はヘラ状工具で斜め方向に長く深く、490は指で突帯部に施する。490は復元口縁13.8cmを測る。491・492は甕の口縁部である。口縁形態は、491は短く直立、492は短く外反する。493は浅鉢の口縁部である。口縁部の屈曲はゆるやかで、端部は強く外反する。494も浅鉢の口縁部である。口縁部は外反するものの直立気味で、端部は肥厚し強く外反する。屈曲部には明瞭な段を設ける。復元口径17.0cm。495は甕の底部である。端部のくびれは弱く、直立気味である。復元底径9.5cmを測る。

SX330、SD333(第62・76図) 調査区東端で検出した深い谷に堆積する遺物包含層である。2区で検出したSX201の延長部分で、谷の西岸にあたり、東に向かって緩やかに傾斜する。厚さ20~30cmの堆積で、底面は平坦気味である。埋土は黒褐色粘質土であるが、分層はできなかった。先述のようにSX323を切るものと思われる。2区では大量の突帯文土器が出土したが、SX330からはほとんど遺物が出土しておらず、図示できるものはない。

堆積土を除去すると、底面で南北方向の溝(SD333)を検出したが、これは2区SX201の底面で検出したSD221と同様のものと考えている。幅30~40cm、深さ10cm程度で、黒色~褐色粗砂で埋まる。遺物は全く含まれていない。

としての機能も想定される。握り部は消失し、7~8cmほどしか残っていない。樹種はコナラ属クヌギ節で、枝が付いた芯持材を利用したものと考えられる。

③不明遺構 (SX)

SX323(第62・69図) 調査区東側の北壁沿いで検出した、緩やかな落ち込みである。直径およそ7mの半円形状に広がり、黒褐色シルトが堆積する。東端はSX330とわずかに重複しており、検出時は調査区北東端一帯に包含層が広がっていた。当初は

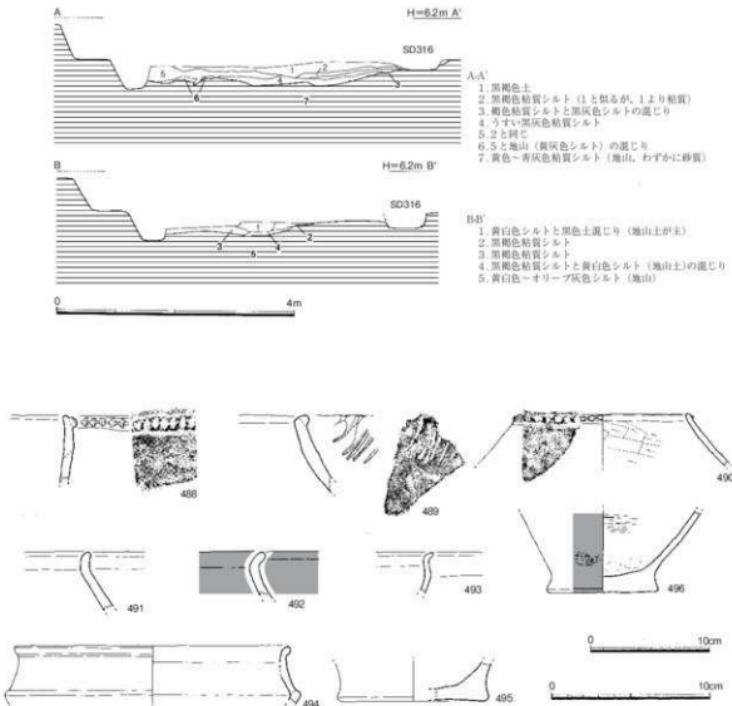
SD331（第62・76図） 調査区東端で検出した溝状遺構で、SX330を切る。長さ3.5m、幅0.9m、深さ30cmを測る。断面形は緩いU字形で、埋土は黒色シルトである。遺物は全く出土していない。

（2）古代以降

①溝（SD）

SD305（第62・70図） 調査区西端の黄褐色土上で検出した溝で、現存長8m、幅50cm前後を測る。西側はSK304に切られ、東側は削平により失われている。主軸方位はN-90°-Eを示し、磁北に直交する。北側には並走するSD306があるが、一部境界が不明瞭な部分もある。遺存状況は悪く、深さ10~20cmで底面となる。遺物は、土師質土器、瓦器が出土地したが、いずれも小片である。また、SD306の遺物が混入する可能性もある。

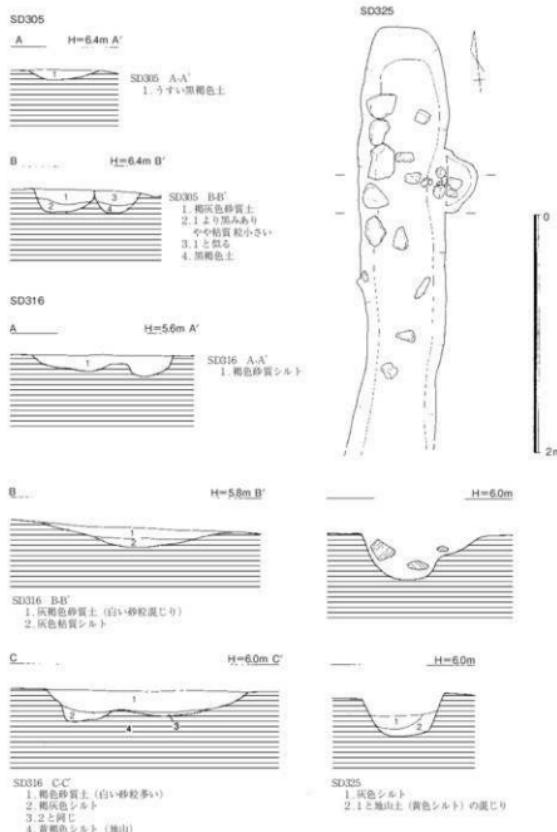
出土遺物（第71図） 497は土師質土器・皿の完形品である。底部は平坦で、体部は直線的に外に開く。



第69図 SX323土層断面および出土遺物実測図 (1/80、遺物は490・496が1/4、その他は1/3)

外底部には回転ヘラ切り・板状圧痕を残す。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈す。口径10.6cm、器高1.3cm、底径7.8cmを測る。498は瓦器椀の口縁部である。回転ナデ成形時に口縁部下位が強く押さえられたため、屈曲が生じる。内外面ともに横位の研磨を施す。黒く焼きしまり、黒褐色（5YR2/1）を呈す。復元口径16.6cmを測る。499は瓦器椀の底部である。やや焼成不良で灰黄色（2.5Y5/1）を呈す。外底面にはヘラ切りの痕跡を残す。貼り付け高台は剥落する。外面は摩滅のため調整不明だが、内面には横位の研磨痕を残す。

SD306（第62・70図） SD305と接する溝状遺構であるが、北側は削られているため、長さ・方向などは不明である。東側も途切れている。わずかにSD305と重なるものの、埋土がほぼ同じで先後関係を

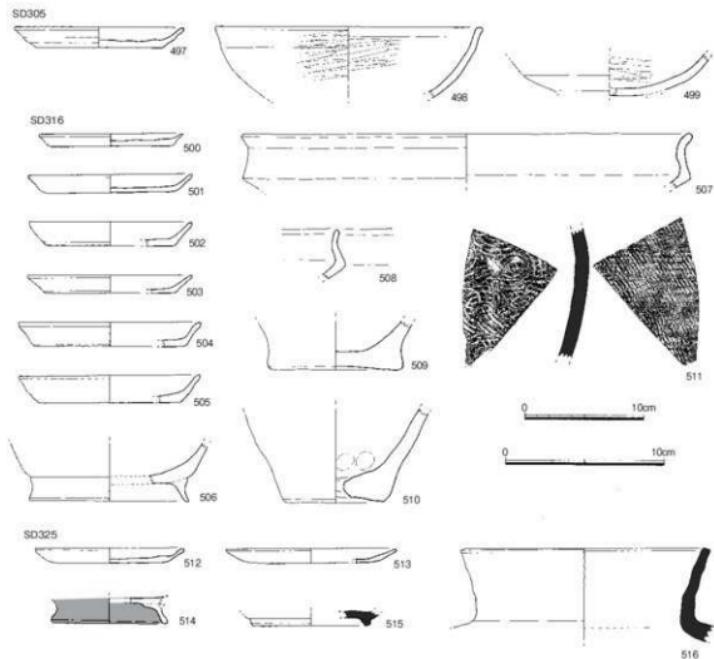


第70図 SD305・316・325実測図 (1/40)

把握できなかった。遺物は土師質土器等が少量したが、小片のため図示できるものはない。

SD316（第62・70図） 調査区東半で検出した、幅1.2mの溝状遺構である。現存長22mで、東端はL字形に折れ、北へ延びている。東西溝はN-90°-Eで磁北に直交し、南北溝はN-20°-Eを示す。西端は疊層露出部分で途切れているが、本来はさらに西へ続くものと思われる。検出当初は調査区西端のSD305と繋がる溝の可能性も考えたが、溝の幅や埋土の違いから、異なる溝と判断した。埋土は一様な灰色～褐色シルトで、分層は困難であった。深さは20～25cmで、底面は西から東へゆるく傾斜している。中世の区画溝であろうか。遺物は、弥生土器、土師質土器、須恵器、白磁などが多く出土した。

出土遺物（第71図） 500～505は土師質土器・皿である。502のみ外底面に回転糸切り痕を残すが、全体的に磨滅が著しい。色調は浅黄橙色(10YR8/4)を中心とする。500は口縁部が細く短い。にぶい黄橙色(10YR7/3)を呈す。復元口径8.8cm、器高0.8cm、復元底径7.6cmを測る。501は底部と口縁部の境がゆるやかで、口縁部は直線的に外反する。復元口径10.0cm、器高1.1cm、復元底径7.6cm。502は器高がやや高く、体部は直線的である。復元口径10.0cm、器高1.5cm、復元底径8.0cm。503は器壁がやや薄く端部はすぼまる。復元口径10.0cm、器高1.1cm、復元底径8.0cm。504は口縁部が外反気味で、



第71図 SD305・316・325出土遺物実測図 (511は1/4、その他は1/3)

端部が肥厚する。復元口径11.0cm、器高1.5cm、復元底径9.4cm。505は口縁部を強くつまみ、端部はすぼまる。復元口径11.0cm、器高1.7cm、復元底径8.8cm。506は土師質土器・椀である。高台は高く、外反しながら外に開き、端部は細く丸く收める。507・508は弥生土器・浅鉢の口縁部片、509・510は甕の底部片である。510は端部のくびれが弱く、焼成後に底部中央を敲打して穿孔する。511は須恵器・大甕の胴部片である。外面に斜格子叩きのちカキ目、内面に同心円文當て具痕を残す。灰色(N5/)を呈す。

SD325(第70図) 調査区東半の南壁際で検出した溝状遺構である。調査区外に延びていたため南壁を2m程拡張したが、南端を確認することはできなかった。現存長3.5m、幅80m、深さ35cmを測る。主軸方位はN=10°-Eを示す。埋土は灰色シルトで、断面形は緩いU字形を呈する。溝底面付近には石を置いて並べている。遺物は、土師質土器・須恵器、黒色土器、打製石鑓(第78図576・582)が出土したが、遺構の時期は中世以降と思われる。

出土遺物(第71図) 512・513は土師質土器・皿である。512は外底面に板状圧痕を残す。にぶい橙色(5YR7/4)を呈し、復元口径9.1cm、器高0.95cm、復元底径7.2cmを測る。513は灯明皿で、口縁端部に沿って油煙が付着する。浅黄橙色(7.5YR8/4)を呈し、復元口径10.6cm、器高0.9cm、復元底径7.7cmを測る。514は黒色土器B類・椀の底部である。高台は外に開き、端部は肥厚させて丸く收める。外底部はヘラ切りか。復元高台径7.2cmを測る。515は須恵器・椀の底部片である。低い高台は断面台形を呈し直立する。灰色(N6/)を呈し、復元高台径7.6cmを測る。516は須恵器・大甕の口縁部片である。口縁部は直線的に外に開き、端部は平坦面をなす。外面は灰色(N5/)、内面はオリーブ灰色(2.5GY6/1)を呈す。復元口径15.0cmを測る。

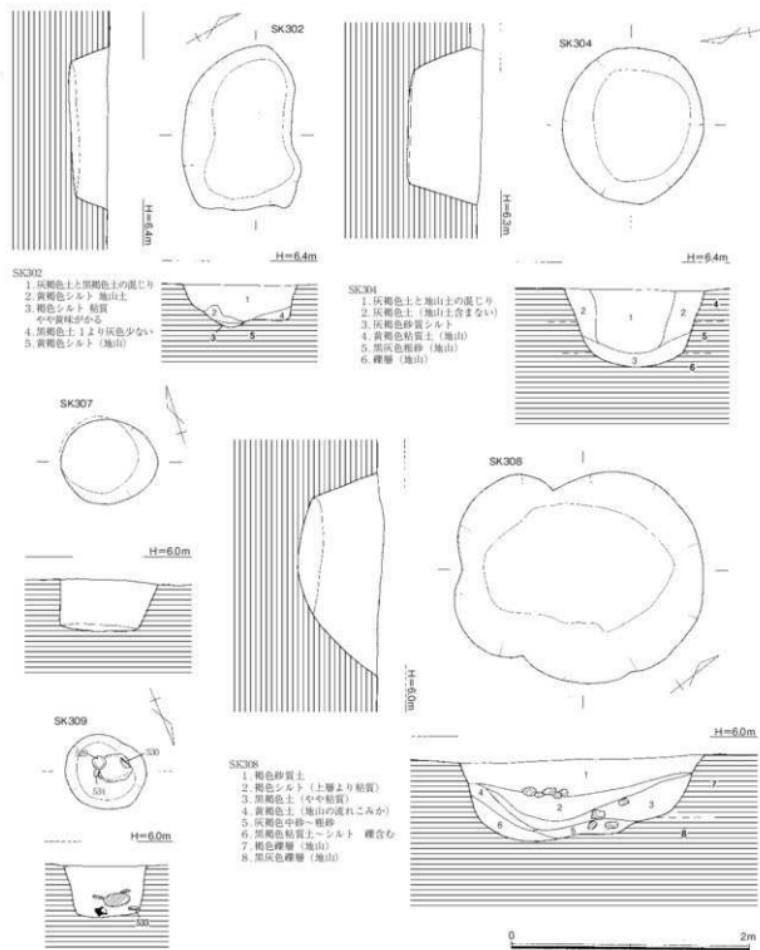
③土坑(SK)

SK302(第72図) 調査区西端で検出した土坑である。長軸1.4m、短軸0.9mの不整形を呈する。壁面は直立気味で、底面にはやや凹凸がある。埋土は灰色砂質土と黒色土の混じりが主体を占め、底面付近にはやや粘土質の土が堆積していた。残存の深さ35cmを測る。遺物は弥生土器と土師質土器が出土したが、小片のため図示できなかった。

SK304(第72図) 調査区西端で検出した円形土坑で、長軸1.3m、短軸1.2m、残存の深さ65cmを測る。埋土上層は灰褐色土と地山土の混じりで、下層は砂質シルトである。底面は礫層にまで達している。遺物は弥生土器、土師質土器、黒色土器、白磁、瓦などが少量出土したが、いずれも小片で図示できたものは少ない。

出土遺物(第73図) 517は土師質土器・壺の口縁部である。外底部にはヘラ切り痕を残す。にぶい橙色(7.5YR7/3)を呈す。518は黒色土器A類・椀の底部片である。高台は外に開き、端部は丸く收める。内面が黒化する。519は丸瓦片である。玉縁部は欠損する。凸面には斜格子目の叩打痕、内面には布目圧痕を残す。叩打具の劣化のためか、格子目の間に本目が浮き出る。側面は凹面側に分割時の截面、凸面側に破面を残し、面取りは行わない。復元内径15.3cmを測る。焼成は須恵質で、灰色(10Y5/1)を呈す。

SK307(第72図) 調査区北西の礫層が露出した部分で検出した。長軸0.8m、短軸0.7m、深さ40cmの卵形土坑である。埋土は灰褐色土と地山土の混じりが主体を占め、黒色土も少量混じる。壁面は抉れ気味で、ややオーバーハンプしている。遺物は、弥生土器、土師質土器が少量出土した。



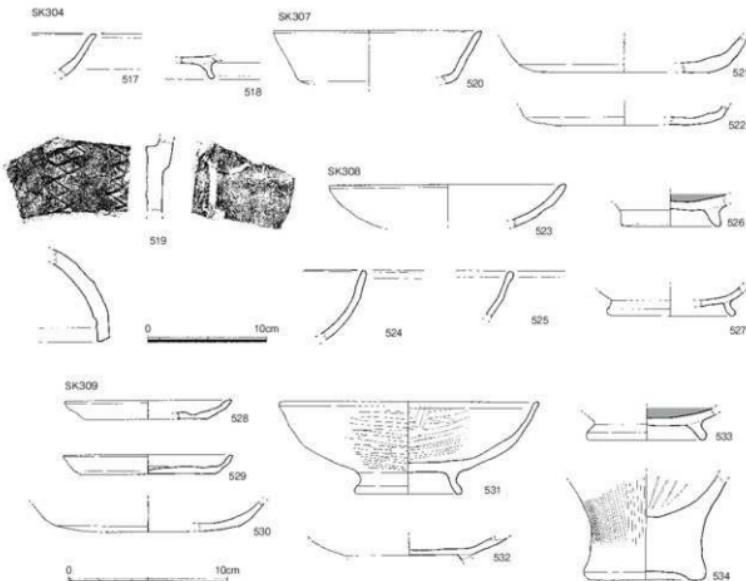
第72図 SK302・304・307～309実測図 (1/40)

出土遺物（第73図） 520～522は土師質土器・壺である。いずれも外底面に板状圧痕が残る。522は底部をヘラ切りする。520は復元口径14.0cm、521は復元底径13.4cm、522は12.2cmを測る。

SK308（第72図） 調査区北西の礫層部分で検出した、長軸2.1m、短軸1.8mのやや大型の不整形土坑である。埋土は自然堆積と思われ、上層は褐色土、下層は黒褐色粘質土で、埋土中に礫を多く含む。残存の深さは70cm前後で、壁は直立せず、緩やかにすぼまっていく。出土遺物は土師質土器、黒色土器、瓦器などが出土した。

出土遺物（第73図） 524・527は1・2層、その他は一括出土。

523は土師質土器・壺である。体部はやや外に開き、器高は浅い。口縁端部は肥厚気味に丸く收める。橙色（25YR6/6）を呈し、復元口径は14.4cmを測る。524は土師質土器・椀である。体部は丸みを持ち、口縁端部は丸く收める。褐灰色（7.5YR7/2）を呈す。525・527は瓦器である。525は椀の口縁部で、口縁部下位は強い押さえにより、稜が生じる。端部は肥厚させながら丸く收める。内外面とともに横位の研磨を施す。焼成は良好で、黒く焼きしまる。527は椀の底部片である。高台は外反し、端部は外面に段を有し肥厚する。復元高台径8.1cmを測る。526は黒色土器A類の底部である。高台はやや厚いが、端部はすぼまる。内面が黒化する。焼成はあまり。外面は浅黄橙色（10YR8/4）。復元高台径6.3cmを測る。



第73図 SK304・307～309出土遺物実測図 (519は1/4、その他は1/3)

SK309（第72図） 調査区北西の礫層部分で検出した、長軸0.7m、短軸0.5mの円形土坑である。残存の深さは45cmで、埋土は大きく3層に分層した。上層は褐色土、中層は暗灰色粘質シルト、下層は褐色土である。壁面は直立し、底面は平坦である。遺物は中層に多く見られ、土師質土器の皿（529）や瓦器椀（531）などが出土した。下層からは黒色土器の椀底部（531）や弥生土器底部（534）も出土した。

出土遺物（第73図） 533・534は下層、528・531は中層、532は上層出土。

528・529は土師質土器の皿である。いずれも外底面にヘラ切り痕を残す。528は体部が外方に開き、口縁端部はすぼまる。黄灰色（25YR4/1）を呈し、復元口径10.4cm、器高12cm、復元底径7.6cmを測る。529は完形品である。口縁部は肥厚し、丸く收める。橙色（7.5YR7/6）を呈す。口径10.6cm、器高12cm、底径8.4cmを測る。530は壺の底部である。体部と底部の境が明瞭で、外底部にヘラ切り痕を残す。色調は浅黄色（25Y7/3）～黄灰色（25Y6/1）を呈す。復元底径11.6cmを測る。531は瓦器椀である。体部は開き気味だが、中位で角度を変えて立ち上がる。高台は高く、外に開きながら端部を肥厚させる。内外面ともに横位の研磨を施す。炭素を吸着させるが焼成は良好でなく、内面は灰色（7.5Y5/1）、外面はオーリーブ黒色（7.5Y3/1）を呈す。復元口径16.0cm、器高5.8cm、高台径6.8cmを測る。532は土師器椀である。高台の端部が欠失するため、形状は不明である。焼成はあまり、浅黄橙色（7.5YR8/6）を呈す。533は黒色土器A類・椀の底部である。高台は外に開き、端部を肥厚させて丸く收める。内面は黒化するが、焼成は不良で褐灰色（10YR4/1）を呈す。外面にはぶい黄橙色（10YR7/3）を呈す。高台径7.4cmを測る。534は弥生土器・甕の底部である。厚底で、外底部は内湾する。外面には縱位のハケ目を施す。底部径7.0cmを測る。

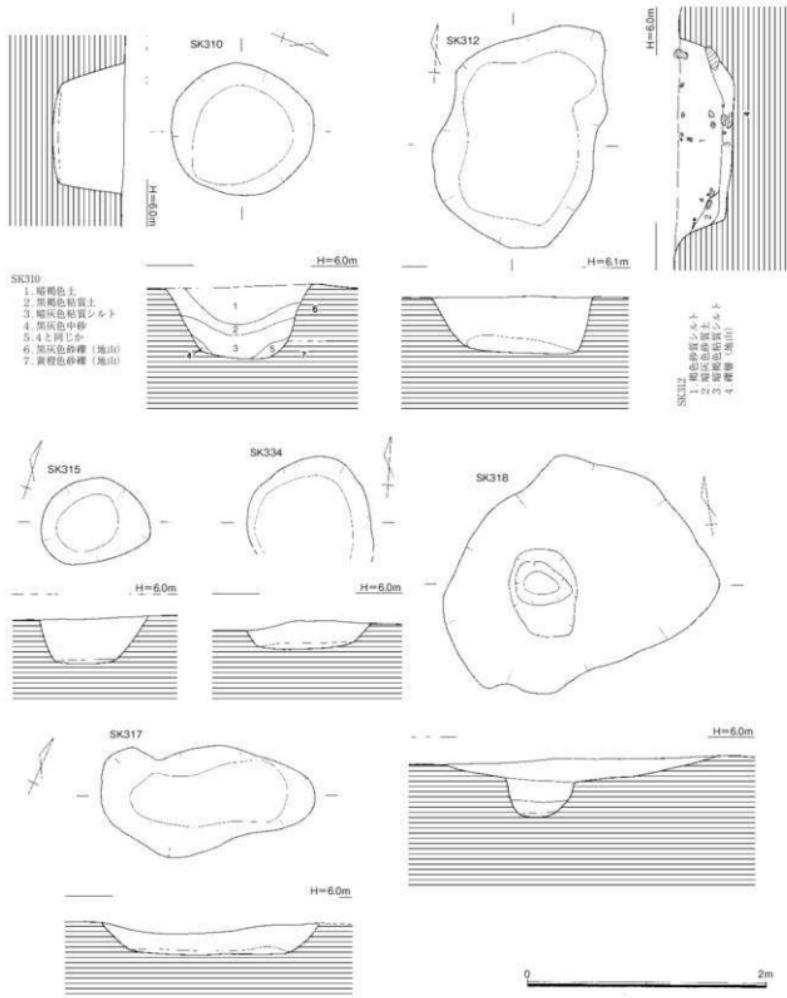
SK310（第74図） 調査区中央で検出した、長軸1.2m、短軸1.1mの円形土坑である。残存の深さ60cmで、埋土は暗褐色土と黒褐色土の自然堆積である。壁面は直立し、底面は平坦である。遺物は、弥生土器、土師質土器、須恵器、黒色土器、白磁等が出土した。

出土遺物（第75図） 540は最下層、535・539・542は1層出土。

535～537は土師質土器・皿である。535の口縁部は短く外反する。摩滅が著しい。橙色（7.5YR7/6）を呈す。復元口径8.0cm、器高1.0cm、復元底径6.4cm。536の口縁部は直線的に外反し、端部は丸く收める。外底部にヘラ切り痕を残す。復元口径11.2cm、器高1.2cm、復元底径8.0cm。537は復元口径が13.0cmと大きめで、体部中位に稜線をもつ。外底部にヘラ切り痕を残す。器高1.3cm、復元底径10.0cm。538は瓦器椀である。口縁部下位を強くナデて、端部は肥厚させて丸く收める。焼成は良好で、灰色～黒色を呈す。539は須恵器・鉢の底部である。体部に回転ナデによる凹凸を強く残す。灰色（7.5Y5/1）を呈す。復元底径12.8cmを測る。540は須恵器・甕の胴部片である。外面にカキ目、内面に同心円文当て具痕を残す。焼成は不良で、やや軟質。灰色（5Y6/1）を呈す。541は白磁椀IV類の口縁部である。玉縁部の段差は浅いが、明瞭な稜をもつ。胎土は黄褐色（2.5Y5/3）。釉は厚くてのびが悪く、灰白色（2.5Y8/1）を呈す。542～544は弥生土器である。542は甕の底部。底面は円盤状を呈す。543・544は底部片で、端部のくびれは強くない。

SK312（第74図） 調査区中央で検出した、長軸1.8m、短軸1.3mの不整形土坑である。深さ45cmで、礫層に掘り込まれている。埋土は褐色～暗褐色シルトで、地山由来の礫を多く含む。壁面は直立し、底面は平坦である。遺物は、土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器、白磁等が出土した。

出土遺物（第75図） 545・546は土師質土器・壺の底部である。いずれも内面は灰褐色（7.5Y6/2）を呈す。二次被然によるものか。545は外底面に板状压痕を残す。外面は橙色（5YR7/6）を呈す。復元

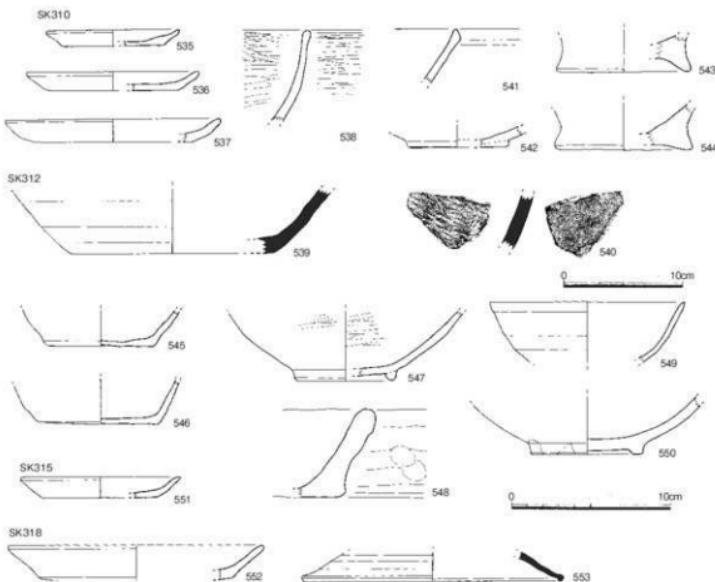


第74図 SK310・312・315・317・318・334実測図 (1/40)

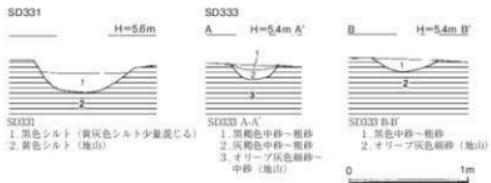
底径6.6cmを測る。546は外底面にヘラ切り痕を残す。外面は橙色（5YR6/6）を呈す。底径は6.5~8.0cmで歪みのため平面形は橢円形を呈す。547は瓦器碗の底部である。体部は開くが、中位で角度を変えて直立気味になる。高台は短くて厚く、端部は丸みを帯びる。焼成はあまり、内面は褐灰色（5YR5/1）、外面は黒褐色（5YR3/1）を呈す。復元高台径は6.0cmを測る。548は土師質土器・壺である。器壁は厚く、回転ナデで形成するが指頭圧痕を残し、外面調整は粗雑である。外底面には繩垂圧痕が残る。外面はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）、内面はススによるものか黒化して赤灰色（2.5YR4/1）を呈す。器高は5.5cmを測る。549・550は白磁碗である。549は直口縁だが、口縁部外面のやや下に稜線、内面には沈線が巡る。釉には貫入があり、透明感はないが光沢はある。灰白色（7.5Y7/2）を呈し、復元口径は12.0cmを測る。550は底部片で、高台は浅く削り出す。釉は疊付きの一部にも至るが、搔き取りはない。釉ののびは悪いが光沢はある。胎土は浅黄色（5Y7/4）、釉は灰白色（5Y7/1）を呈す。復元高台径は6.8cmを測る。

SK315（第74図） 調査区中央で検出した、長軸0.9m、短軸0.7mの橢円形土坑である。SD316と重複するが、先後関係ははっきり把握できていない。残存の深さ30cmで、埋土は褐色~灰色砂質土である。遺物は、土師質土器が少量出土した。

出土遺物（第75図） 551は土師質土器・皿である。口縁部は直線的で、端部が細くすぼまる。外底面にヘラ切り痕を残す。一部が赤化しており、二次被熱を受けたものか。色調は橙色（7.5YR7/6）を呈



第75図 SK310・312・315・318出土遺物実測図（540は1/4、その他は1/3）



第76図 SD331・333土層断面図 (1/40)

し、復元口径10.0cm、器高1.3cm、復元底径7.0cmを測る。

SK317（第74図） 調査区中央で検出した不整形土坑で、長軸1.8m、短軸0.8m、深さ25cmを測る。平面形は不明瞭で、明確な遺構ではない。遺物は出土しなかった。

SK318（第74図） 調査区中央で検出した、長軸2.3m、短軸1.6m、深さ60cmの不整形土坑である。中央部のみ深く、その周縁は緩やかに傾斜し、テラスを形成する。埋土は褐灰色～黒色の砂質土である。遺物は土師質土器、須恵器が少量出土したほか、弥生土器の小片が多量に含む。

出土遺物（第75図） 552は土師質土器・壺である。体部は回転ナデの単位が一つしかなく、指の腹を広く使って成形している。外底部にはヘラ切り痕を残す。色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈す。復元口径は大きく、16.0cmを測る。553は須恵器の蓋である。口縁部は外反気味で、端部は小さな断面三角形を呈す。8c前半。青灰色(5GB5/1)を呈し、焼成は堅緻である。復元口径16.0cm。

SK334（第74図） 調査区南東で検出した土坑状の浅い窪みで、調査区外に延びる。残存長1.0m、短軸0.9m、残存の深さ20cmを測る。埋土は灰色シルトで、中世の遺構か。黒曜石製の石鏃(579)が出土したが、土器類は出土しなかった。

3) 小結

3区の調査では弥生時代早～前期の集落と、中世の遺構を確認した。

前者の遺構としては、調査区西端で竪穴住居跡SC301を検出した。検出時には平面形がはっきり見えたため遺構の残り具合もよいかと思われたが、掘削してみると深さ5～10cmしか残っておらず、付近が大きく削平されていることがわかる。同様に削平が及ぶ調査区北西の礫層露出範囲にも本来は遺構が広がり、1区とともに居住域として利用された可能性もある。調査区東端で検出したSX330は、2区SX201と同様に浅い谷地形に堆積した包含層と考えられる。いずれも、底面にSD221・SD333の細い溝を伴い、埋土の状況から水の流れが想定される。溝底面の標高はSD221が約5.4m、SD333が約5.1mを測り、両者が一連のものとすると、SD221からSD333へと北流する自然流路と位置付けられよう。また、付近には貯木遺構と考えられるSK332が位置することから、調査区東半は2区と同様に低地として利用されたものと思われる。

また、調査区中央には中世の溝SD305・306とSD316が継続する。SD316はL字状に折れて、さらに北へ延びており、中世期の区画溝の可能性が高い。その詳細については不明であり、今後の周辺調査の成果に期待したい。

(遺物：比嘉、その他：今井)

5. 4区の調査

1) 調査の概要

4区は、26次調査区の北端に位置する。平成22年度の調査時には原中公園として利用中であったため、翌年度の5月に追加して調査を行った。調査範囲は、工事により掘削が及ぶ南北2箇所で、便利的に北調査区、南調査区と称する。5月16日に重機により表土を除去し、現地表-80~90cm（標高約65m）で遺構を検出した。調査期間は1日で、遺構掘削、測量、実測、写真撮影を完了し、埋戻しを行った。調査面積は約20m²を測る。

2) 遺構と遺物

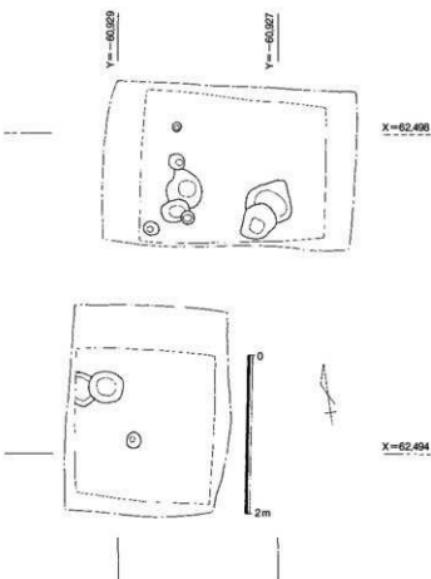
北調査区ではピット8基、南調査区ではピット3基を検出した。いずれも、地土の黄橙色ブロックを含む暗灰褐色シルトの埋土であった。遺物は、土師質土器の細片が出土したが、図示可能なものはなかった。（比嘉）

6. 出土石器

1) 出土石器の組成（第78~81図、第2表）

原遺跡第26次調査区から出土した石器には大別して武器類、伐採具（石斧類）、収穫具、植物処理具、漁撈具、刃器類、工具、紡織具、土掘り具、その他がある。武器類には石鎌（第78図554~582）、同未製品（第79図585・586）、石槍（第79図583・584）、同未製品、投弾がある。投弾は重量40g程度の円礫である。このような自然石が包含層中に混入するのは不自然であるので、投弾として取り上げた。板付遺跡等にも同様の自然石利用の投弾が存在する。石斧類には縄文系石斧をはじめ、大陸系磨製石器である太形蛤刃石斧（第80図596~598）、扁平片刃石斧（第80図601）、柱状片刃石斧（第80図599・600・602）、同未製品がある。特に大型の柱状片刃石斧（599）は特徴的で、朝鮮半島から搬入された可能性が強い。収穫具には石包丁（第80図603）、同未製品があり、植物処理具には磨石、叩石、台石等、縄文時代以来の石器がある。漁撈具には疊石錐があるが数は少ない。刃器類には石匙、大型スクレイパー、スクレイパー、使用痕剥片（第589~591）がある。石匙は弥生時代には極めて珍しい。工具には石錐、砥石があるが、本遺跡には磨製のドリルは未確認である。紡織具には紡錘車がある。紡錘車は報告にもあるように土製紡錘車の存在もある。土掘り具として数は少ないが打製石斧がある。その他として異形石器（第79図592~595）がある。同様の石器は板付遺跡にも確認されている。今後、用途も含め検討が必要な石器である。

各石器の点数と構成比については第1表に示した。なお構成比については使用痕剥片を含めた%①と使用痕剥片を含めない%②の二者を示した。これは使用痕剥片の認定の問題と、使用痕剥片が取り



第77図 4区遺構配置図 (1/60)

上げられていない遺跡との比較を考慮したためである。弥生時代開始期の遺跡に黒曜石が多用されていることは周知のことであるが、本遺跡も同様である。黒曜石の石核（第79図587・588）は378点存在し、遺跡出土の黒曜石の量は約14kgである。

（山崎純男）

第2表 出土石器構成比表

	器種	点数	% ①	% ②		器種	点数	% ①	% ②
武器	石鏃	52	4.13	7.12	刃器	石鋸	2	0.16	0.27
	石鏃未製品	26	2.07	3.56		計	2	0.16	0.27
	石槍	1	0.08	0.14		石匙	2	0.16	0.27
	石槍未製品	2	0.16	0.27		大型スクレイパー	4	0.32	0.55
	投擲	39	3.10	5.34		スクレイバー	489	38.87	66.98
	計	120	9.54	16.43		使用痕跡片	528	41.97	—
伐採具	太形船刃石斧	5	0.40	0.68		計	1023	81.32	67.80
	扁平片刃石斧	8	0.64	1.10		石鎌	12	0.95	1.64
	柱状片刃石斧	5	0.40	0.68		武石	25	1.99	3.42
	柱状片刃石斧未製品	1	0.08	0.14		計	37	2.94	5.06
	礎文系石斧	29	2.31	3.97		筋鉤車	3	0.24	0.41
	計	48	3.83	6.57		計	3	0.24	0.41
収穫具	石庖丁	8	0.64	1.10		打製石斧	1	0.08	0.14
	石庖丁未製品	5	0.40	0.68		計	1	0.08	0.14
	計	13	1.04	1.78		異形石器	4	0.32	0.55
植物 処理具	磨石	5	0.40	0.68	その他	計	4	0.32	0.55
	叩石	1	0.08	0.14					
	台石	1	0.08	0.14					
	計	7	0.56	0.96		総 計	1258 (730)	100.00	100.00

2) 繩文時代草創期資料について（第81回）

604は、細石刃核である。残存高1.6cm、幅1.0cm、長さ1.8cm、重量2.16gである。漆黒色の黒曜石を素材とする。一部に自然面を残すが、原産地の推定は困難である。石核は平坦打面であり、作業面は正面から一部左側面に及んでいる。石核調整は不十分であるが、左側面と背部にあり、前者は打面から、後者は右側面や下方から施される。なお、右側縁は一つの剥離面で形成されるが、打面に切られしており石核形成段階の分割面とみられる。打面は平坦剥離面であり作業面の右側前方に予測できるが、これが初期打面であるか再生打面かは判断できない。何れにせよ現在の作業面が、打面形成バルブから数mm後退していることからみて、打面形成後数枚の細石刃が剥離されたと考えられる。

本細石刃核は打面再生後の残核としても極めて小型であり、剥離された細石刃の長さは1.5cm程度であるとみられる。近接して出土した後述の細石刃の法量や、西区の吉武遺跡9次調査個体別資料1・3群や元岡・桑原遺跡群50・54次などに類似する細石刃核が存在することから、こうした小型の細石刃核でも実用性を有していたと考えられる。

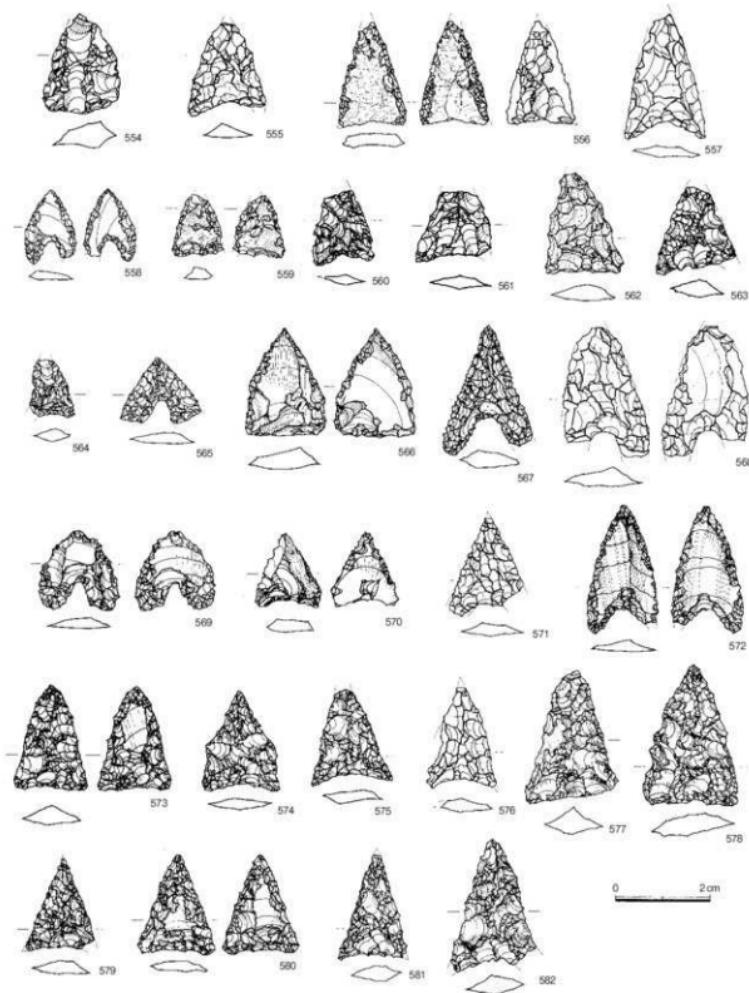
605は細石刃である。素材は黒色良質透明黒曜石である。背面には先行する剥離による二条の稜線が平行して見られる。先端と基部をカットした完形品である。歪みは少なく、長さ1.4cm、幅0.8cm、厚さ0.2cm、重量0.177gである。両側縁に微細剥離が認められるものの使用痕かは不明である。

以上の細石刃石器群の位置づけは、資料数も少なく困難であるが、石核の著しい小型化、粗雑化、また周辺地域の類例などから繩文時代草創期段階と考えられる。

（吉留秀敏）

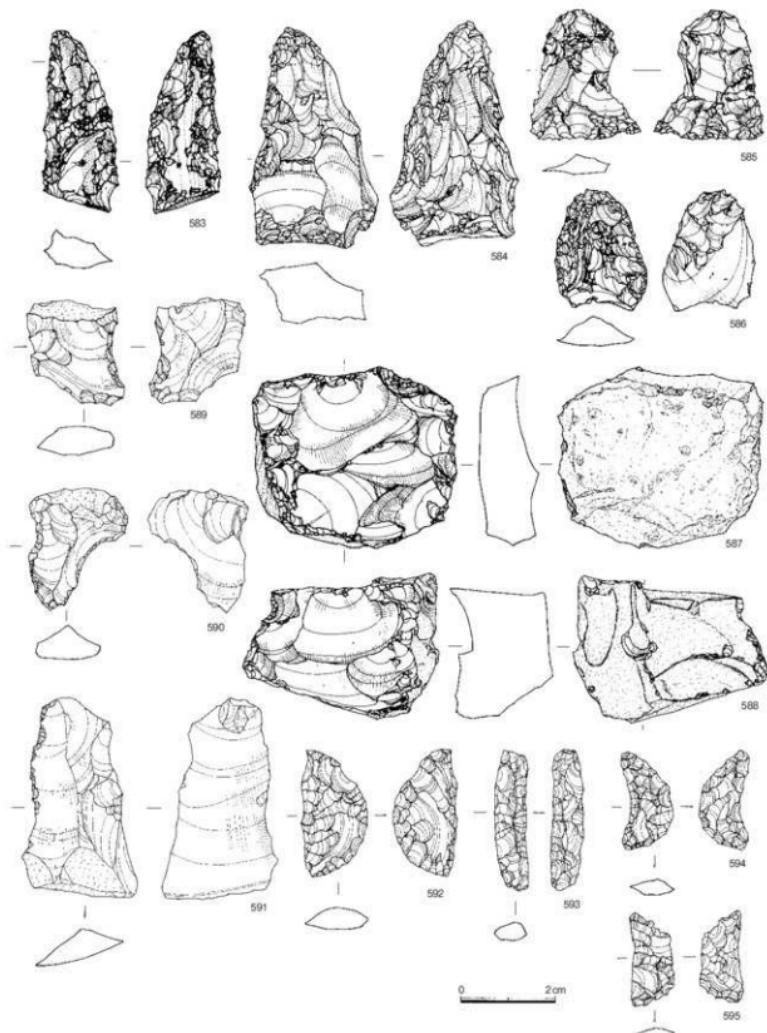
3) 小結

繩文時代草創期から弥生時代前期かけての石器がコンテナケース10箱以上も出土したが、調査担当者の力不足により、ほんの一部しか掲載できなかった。今後、報告する機会を設けたい。（比嘉）



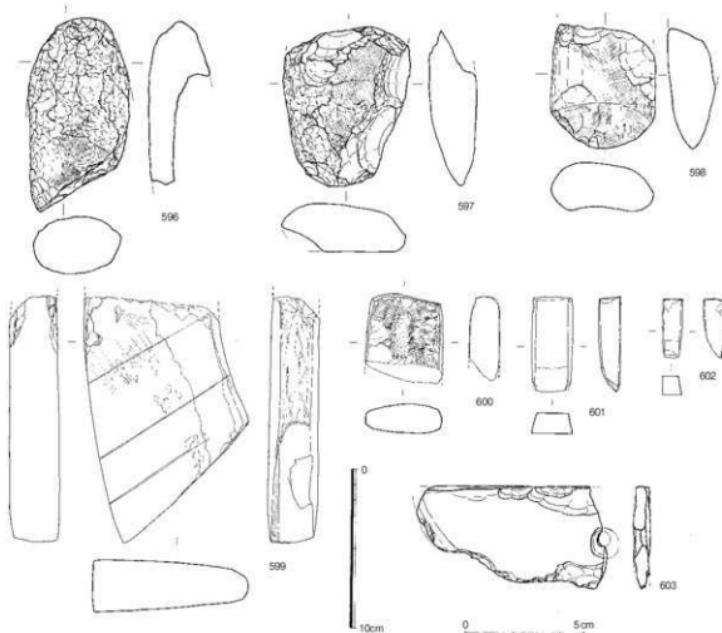
番号	出土遺構	重量(g)	番号	出土遺構	重量(g)	番号	出土遺構	重量(g)	番号	出土遺構	重量(g)
554	SX201上層	1.650	562	SK211付近	1.046	569	SK026上層	0.646	576	SD325	0.654
555	表様	0.758	563	3区検出時	0.824	570	SK070	0.497	577	SX201上層	2.038
556	SX201上層	0.901	564	SC301上層	0.334	571	1区消揚時	0.693	578	SK002	2.005
557	SX201上層	1.019	565	SK203上層	0.439	572	SP579	0.864	579	SK334	0.707
558	SX201ベルト	0.264	566	SK211付近	1.650	573	SE036	1.116	580	SP1202	0.785
559	SX201中層	0.369	567	表様	1.150	574	SX201上層	0.715	581	SP902	0.673
560	1区検出時	0.413	568	表様	2.056	575	SX201上層	0.755	582	SD325	1.439
561	SK211付近	0.650				555・557・568・571・576	・安山岩製	その他	・黒曜石製		

第78図 出土石器実測図1 (1/1)



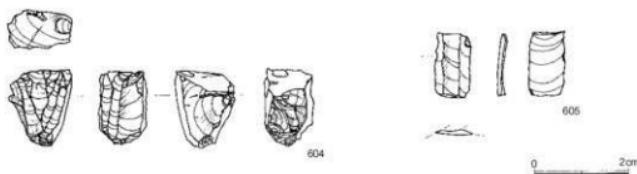
番号	器種	出土遺構	重量(g)	番号	器種	出土遺構	重量(g)	番号	器種	出土遺構	重量(g)
583	石槌	SK086	4.688	588	石核	SX201上層	23.229	592	異形石器	SX201上層	1.830
584	石槌	2区検出時	12.889	589	使用痕剥片	SX201上層	2.685	593	異形石器	SP852	0.787
585	石錐未製品	SK024R-18	2.189	590	使用痕剥片	SX201上層	2.730	594	異形石器	SP519	0.632
586	石錐未製品	SD316	29.19	591	使用痕剥片	表採	6.068	595	異形石器	SX201上層	0.427
587	石核	SK203周辺	26.774								すべて黒曜石製

第79図 出土石器実測図2 (1/1)



番号	器種	出土遺構	石材	重量(g)	番号	器種	出土遺構	石材	重量(g)
596	太形船刃石斧	SK204下層	玄武岩	259.38	600	柱状片刃石斧	SX332砂層	泥岩	91.37
597	太形船刃石斧	SX201上層	頁岩	308.83	601	扁平片刃石斧	SD071	層灰岩	43.43
598	太形船刃石斧	SC012	玄武岩	239.13	602	小型柱状片刃石斧	SK033	層灰岩	11.81
599	柱状片刃石斧	SK222	凝灰岩	732.52	603	石錐丁	SK204下層	片岩	37.28

第80図 出土石器実測図3 (603は1/2、その他は1/3)



番号	器種	出土遺構	石材	重量(g)	番号	器種	出土遺構	石材	重量(g)
604	細石刃核	SP1055	黑曜石	2,164	605	細石刃	SP1184	黑曜石	0.177

第81図 出土石器実測図4 (1/1)

IV 自然科学分析 1

株式会社パレオ・ラボ

1. 放射性炭素年代測定

1) はじめに

原遺跡第26次調査では弥生時代早期の貯木遺構が検出され、木製品や加工木が出土した。ここでは、貯木遺構から出土した割材について加速器質量分析法（AMS法）によるウイグルマッチングを行った。

2) 試料と方法

ウイグルマッチングを行った試料は、貯木遺構（SK211）から出土した木材（割材、試料No.10）である。樹種はコナラ属クヌギ節で、最終形成年輪部（=伐採年代）が残っていたため、測定試料として選出した。試料の木材は、鋸を用いて輪切りにした後、年輪計測を行った。その結果、半径14.5cmで52年輪が計測された（第3表、写真2）。

ウイグルマッチングは、3年輪部（最終形成年輪部から1~5年輪、21~25年輪、41~45年輪）について採取し、調製した後、加速器質量分析計（NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

第3表 ウィグルマッチング試料および処理

測定番号	遺跡・試料データ	採取データ	前処理データ
PLD-19115 遺跡: SK211(貯木遺構) 試料No.10(遺物No.8-2)	採取位置: 1~5年輪 幅: 1mm	粗骨波洗浄 糊・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)	
PLD-19116 種類: 割材、生材(コナラ属クヌギ節) 性状: 52年輪、樹幹半径14.5cm、最終形成年輪 部有	採取位置: 21~25年輪 幅: 1mm	粗骨波洗浄 糊・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)	
PLD-19117	採取位置: 41~45年輪 幅: 1mm	粗骨波洗浄 糊・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)	

3) 結果

第4表に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{14}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、ウイグルマッチング結果を、第82・83図にウイグルマッチング結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代 (yrBP) の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5688年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。なお、暦年較正、ウイグルマッチング法の詳細は以下のとおりである。

[暦年較正]

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.1 (較正曲線データ:IntCal09) を使用した。なお、 1σ 暦年範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年範囲であり、同様に 2σ 暦年範囲は95.4%信頼限界の暦年範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

[ウイグルマッチング法]

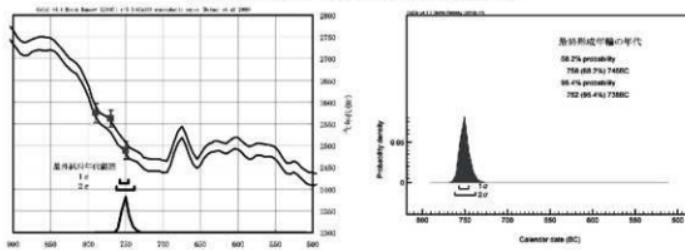
ウイグルマッチング法とは、複数の試料を測定し、それぞれの試料間の年代差の情報を用いて試料の年代パターンと較正曲線のパターンが最も一致する年代値を算出することによって、高精度で年代値を求める方法である。測定では、得られた年輪数が確認できる木材について、1年毎あるいは数年分をまとめた年輪を数点用意し、それぞれ年代測定を行う。個々の測定値から暦年較正を行い、得られた確率分布を最外試料と当該試料の中心値の差だけずらしてすべてを掛け合わせることにより最外試料の確率分布を算出し、年代範囲を求める。なお、得られた最外試料の年代範囲は、数年輪分をまとめた試料の平均の年代を表している。

第4表 木材試料No.10 (SK211R-3) の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-19115	-28.04 \pm 0.20	2489 \pm 20	2490 \pm 20	756BC (10.9%) 735BC 689BC (2.2%) 685BC 669BC (3.0%) 663BC 649BC (52.2%) 546BC	767BC (94.4%) 537BC 530BC (1.0%) 523BC
PLD-19116	-27.64 \pm 0.20	2562 \pm 20	2560 \pm 20	795BC (68.2%) 767BC 686BC (12.3%) 667BC 612BC (2.3%) 597BC	802BC (80.8%) 753BC 684BC (6.6%) 670BC
PLD-19117	-28.08 \pm 0.19	2575 \pm 22	2575 \pm 20	797BC (68.2%) 774BC 758BC (68.2%) 746BC	805BC (88.8%) 759BC 762BC (95.4%) 738BC
最終形成年輪部の年代				758BC (68.2%) 746BC	762BC (95.4%) 738BC



写真2 試料No.10 (SK211R-3) の年輪計測結果



第83図 最終形成年輪部のウィグルマッチング結果

4) 考察

測定結果は、同位体分別効果の補正および暦年較正を行い、3年輪部の試料（PLD-19115～19117）を用いてウィグルマッチング法により最終形成年輪部の暦年代を求めた。

ウィグルマッチングを行った結果、 1σ (68.2%の確率) 暦年代範囲において758-746 cal BC (68.2%)、 2σ (95.4%の確率) 暦年代範囲において762-738 cal BC (95.4%) で、 1σ では前8世紀中葉、 2σ では前8世紀中葉から後葉の年代範囲を示した。ウィグルマッチングを行わなかった場合、 2σ で6世紀後葉から8世紀前葉までの年代範囲となるため、1試料あたり3点のウィグルマッチングを行うことによって、年代範囲を絞ることができた。藤尾（2009）などで示された土器の付着炭化物の年代と参照すると、この年代範囲は弥生時代早期に相当する年代範囲であった。

（分析者：パレオ・ラボAMS年代測定グループ；伊藤 茂・尾崎大真・丹生越子・廣田正史
山形秀樹・小林統一・Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・藤根 久・佐々木由香）

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C., van der Plicht, J., and Weninger, B. (2001) 'Wiggle matching' radiocarbon dates. Radiocarbon, 43 (2A), 381-389.
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 藤尾慎一郎 (2009) 弥生時代の実年代. 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」:9-54. 雄山閣.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20. 日本国第四紀学会.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

2. 花粉分析

1) はじめに

原遺跡第26次調査において、遺跡周辺の古植生を検討するために、弥生時代早期の貯木遺構と考えられているSK203とSK332から花粉分析用の試料が採取された。以下では花粉分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。

2) 試料と分析方法

分析試料は2区SK203の5層から採取された土壌試料1点と、3区SK332の9層から採取された土壌試料1点の計2試料である。SK203の5層は黒色（7.5YR1.7/1）粘土、SK332の9層は植物片を含む黒色（N1.5/）粘土である。これらの試料について、以下の手順にしたがって花粉分析を試みた。

試料（湿重約3～4g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%のフッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を收回し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトトリル処理（無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。この残渣より適宜プレパラートを作製した。各プレパラートは樹木花粉が200を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉を選んで単体標本を作製し、写真3に示した。写真3に示した分類群ごとの単体標本（PLC.370～377）はパレオ・ラボに保管されている。

3) 結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉26、草本花粉20、形態分類を含むシダ植物胞子3の総計49である。これらの花粉・胞子の一覧を第5表に、その分布図を第84図に示した。分布図において樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉・胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。図および表においてハイフン（-）で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。また、クワ科とバラ科、マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。なお、SK332の9層からは三溝孔型で表面は網目模様をした花粉が多く産出した（写真3のg, h参照）。この花粉の形態はヤナギ属の花粉と似ているが、発芽孔がやや突出している点でヤナギ属の花粉と異なる。分類群は不明であるが産出数が多いので、ここではヤナギ属近似種として図表に示した。

SK203の③の樹木花粉で最も多く産出するのはコナラ属アカガシ亜属で、33%の産出率を示す。次いでシノキ属・マテバシイ属が多く、32%の産出率を示す。その他の樹木ではコナラ属コナラ亜属とニレ属・ケヤキ属、マツ属複維管束亜属の産出が目立ち、それぞれ9%と7%、4%の産出率を示す。草本花粉ではイネ科が最も多く30%の産出率を示し、次いでヨモギ属が5%の産出率である。また、水田雑草を含む分類群であるオモダカ属とキカシグサ属がわずかに産出している。SK332の9層では草本花粉よりも樹木

属やシノキ属-マテバシイ属を構成種とする照葉樹林が発達していたと思われる。さらに、コナラ属コナラ亜属やマツ属複維管束亞属など二次林要素の花粉が見られるため、遺跡周辺には開けた場所があり、そこにはコナラやニヨウマツ類などの二次林が分布していたと推定される。

こうした照葉樹（ツブライ）や二次林構成種（コナラ属クヌギ節）は、本遺跡から出土する木製品や加工木のなかで比較的多く使用されており（5項参照）、本遺跡の同時期の遺構から産出する大型植物遺体のなかでも照葉樹（ツブライの果実）の産出が最も多い（4項参照）。SK203の5層の草本花粉ではイネ科花粉の産出が目立ち、水田雑草を含む分類群であるオモダカ属やキカシグサ属の産出を伴う。イネ科花粉の形態で栽培種と野生種を区別するのは難しいが、イネ科花粉のある程度の産出とともに水田雑草を含む分類群が見られ、同試料を用いて行われたプラント・オパール分析でもイネ機動細胞珪酸体が産出している点から考えると、遺跡周辺において水田稲作が行われていたと思われる。

（分析者：森 将志）

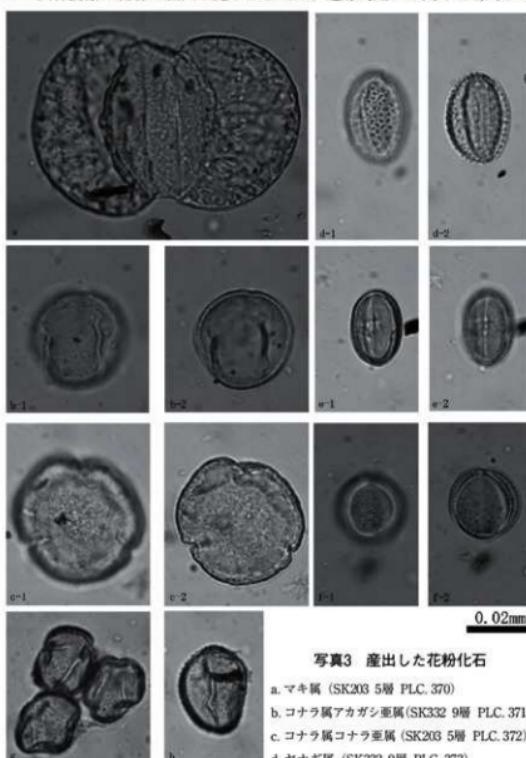


写真3 産出した花粉化石

- a. マキ属 (SK203 5層 PLC. 370)
- b. コナラ属アカシヤ属 (SK332 9層 PLC. 371)
- c. コナラ属コナラ亜属 (SK203 5層 PLC. 372)
- d. ヤナギ属 (SK332 9層 PLC. 373)
- e. シノキ属-マテバシイ属 (SK332 9層 PLC. 374) f. ヨモギ属 (SK203 5層 PLC. 375)
- g. ヤナギ属近似種 (SK332 9層 PLC. 376) h. ヤナギ属近似種 (SK332 9層 PLC. 377)

3. プラント・オパール分析

1) はじめに

原遺跡第26次調査において、弥生時代早期におけるイネ科植物について検討する目的で、貯木遺構より土壤試料が採取された。以下、この試料について行ったプラント・オパール分析の結果・考察を示す。

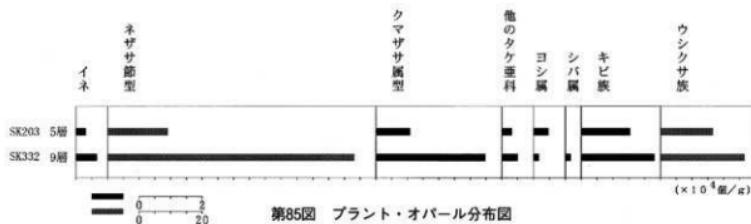
2) 試料と分析方法

分析用試料は、2区SK203と3区SK332の2遺構より採取された2試料である。各試料について、SK203の5層は暗灰色の砂質粘土、SK332の9層は黒色の泥炭質粘土である。時期は両試料とも弥生時代早期と考えられている。プラント・オパール分析はこの2試料について下記の方法にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスピーブ（直径約0.04mm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30cc加え、

第6表 試料1g当りのプラント・オパール個数

遺構	試料番号	イネ	ネザサ節型	クマザサ属型	他のタケア科	ヨシ属	シバ属	キビ族	ウシクサ族	不明
	SK203 5層	3,100	191,000	10,800	3,100	4,600	0	15,400	164,800	16,900
	SK332 9層	6,600	780,700	34,700	5,000	1,700	1,700	23,100	265,700	79,200



脱水機器処理を行う。処理後、水を加え、超音波モジュライザーによる試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。ガラスビーズが300個に達するまで機動細胞壁酸体に由来するプラント・オパールの同定および計数を行った。

3) 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め(第6表)、それらの分布を第85図に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当りの検出個数である。

検鏡の結果、2試料ともイネのプラント・オパールが検出され、個数的にはSK203の5層が3,100個、SK332の9層が6,600個であった。最も多く観察されたのはネザサ節型で、9層では約780,000個と非常に高い数値を示している。ウシクサ族が多く、200,000個前後が検出されている。また、キビ族は20,000個前後、クマザサ属は9層で約35,000個とやや多く観察され、その他、ヨシ属やシバ属などが検出されている。

4) 考察

上記したように両試料からイネのプラント・オパールが検出された。ここで検出個数について示すと、イネのプラント・オパールが試料1g当り5,000個以上検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている(藤原、1984)。先に記したようにSK332の9層からは6,600個と5,000個を超えるイネのプラント・オパールが検出されており、検出個数のみからは稻作が行われていた可能性は高いと判断される。しかしながら今回分析した2試料は貯木遺構と考えられている土坑の覆土であることから、この土坑内の稻作は考えられず、イネのプラント・オパールは遺跡周辺の稻作地より流れ込んだと推測される。あるいは稻藁が捨てられたり、何らかの用途で稻藁が焼かれた灰が一部混入していることも考えられるが、少なくともこの時期、すなわち弥生時代早期の原遺跡においてイネが存在していたと推察されよう。

遺跡周辺のイネ科植物では、最も多く検出されているネザサ節型のササ類(ケネザサ、ゴキダケなど)については日のあたる開けたところでの生育が考えられ、遺跡周辺の森林の林縁部や空き地などに広く生育していたと推測される。花粉分析結果をみると、遺跡周辺には照葉樹林が広がっていたと推測されており(2項参照)、こうした森林の林縁部や集落周辺の空き地などにケネザサなどが多く分布していたとみられる。また、ウシクサ族(ススキ、チガヤなど)についても同じようなところに生育していたと考えられ、一部にはススキ・ケネザサ群集といった草地が形成されていたことが推測される。一方、クマザサ属型のササ類(ミヤコザサ、スマズケなど)については主に森林の下草の存在での生育が考えられ、上記森林内的一部に分布していたとみられる。なお、SK332の9層では、ネザサ節型が約780,000個、ウシクサ族が約270,000個と非常に多く検出されており、その要因として先に記したイネと同様にこれらの植物が遺構内に

捨てられたり、焼かれた灰が混入していることなどが考えられよう。

キビ族についてはその形態からアワやヒエ、キビといった栽培種によるものが、エノコログサやズメノヒエ、イヌヒエなどの雑草類によるものかについて現時点においては分類が難しく不明である。

ヨシやツルヨシといったヨシ属について、試料を採取した調査2区や3区には、これらにまたがる浅い谷が存在しており、そうした谷の一部や遺跡周辺の稲作地などに生育していたと推測される。また、シバ属は住居周辺などの比較的乾いたところに分布していたことが考えられる。

(分析者：鈴木 茂)

引用文献

藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－、考古学ジャーナル、227、2-7。

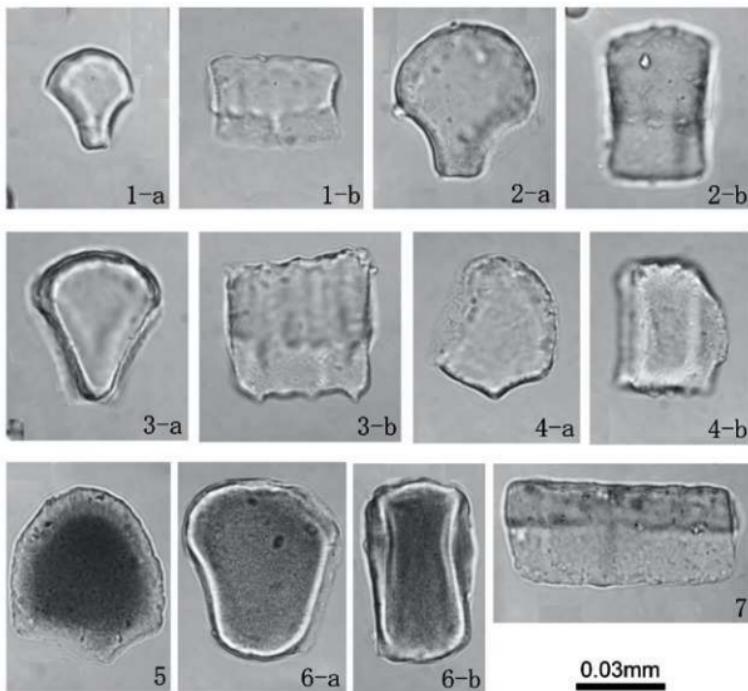
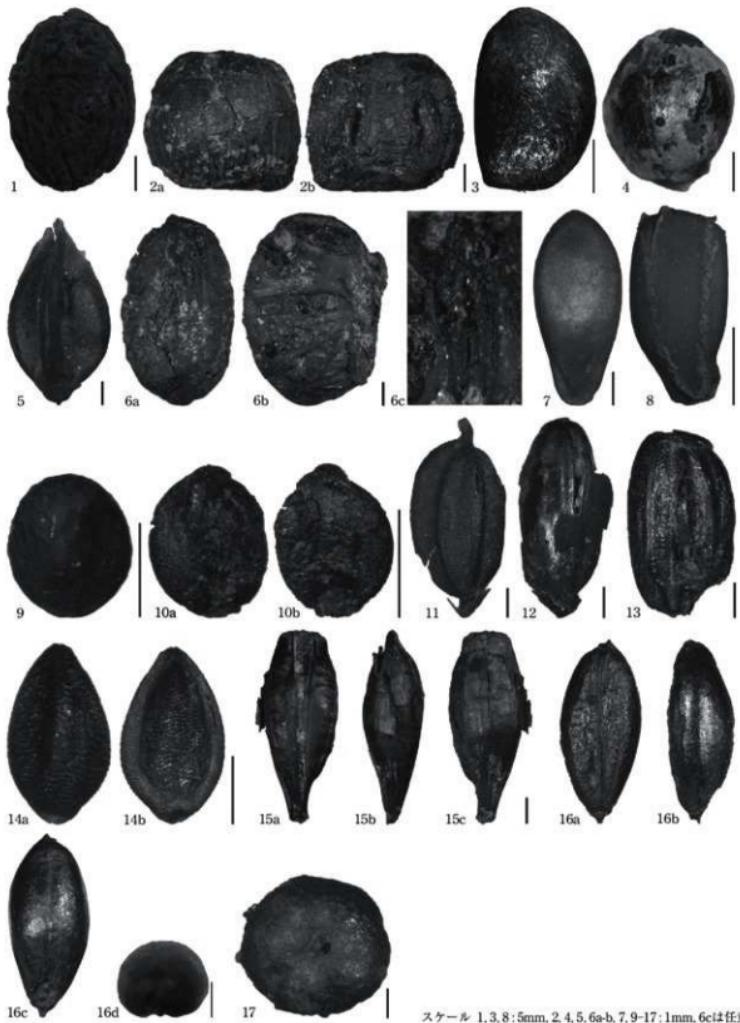


写真4 産出したプラント・オパール

1、2：イネ（a：断面、b：側面） 1：5層、2：9層 3：ネザサ節型（a：断面、b：側面） 5層

4：クマザサ属型（a：断面、b：側面） 5層 5：ヨシ属（断面） 5層

6：ウシクサ族（a：断面、b：側面） 9層 7：キビ族（側面） 9層



スケール 1,3,8:5mm, 2,4,5,6a-b, 7,9-17:1mm, 6cは任意

写真5 出土した大型植物遺体

1. モモ核 (SE089)、2. バラ科炭化果実 (SE089)、3. カキノキ種子 (SE036)、4. アサ核 (SE089)、5. ソバ果実 (SE089)、6. ダイズ炭化種子 (SE089)、7. メロン仲間種子 (SK203)、8. ヒヨウタン仲間種子 (SK217)、9. シソ属果実 (SK217)、10. ヒエ炭化種子 (SK217)、11. イネ粉 (SE089)、12. イネ炭化稈 (SE089)、13. イネ炭化種子 (SE089)、14. アワ有ふ果 (SK203)、15. オオムギ炭化果実 (SE089)、16. オオムギ炭化種子 (SE089)、17. 不明種実 (SE036)

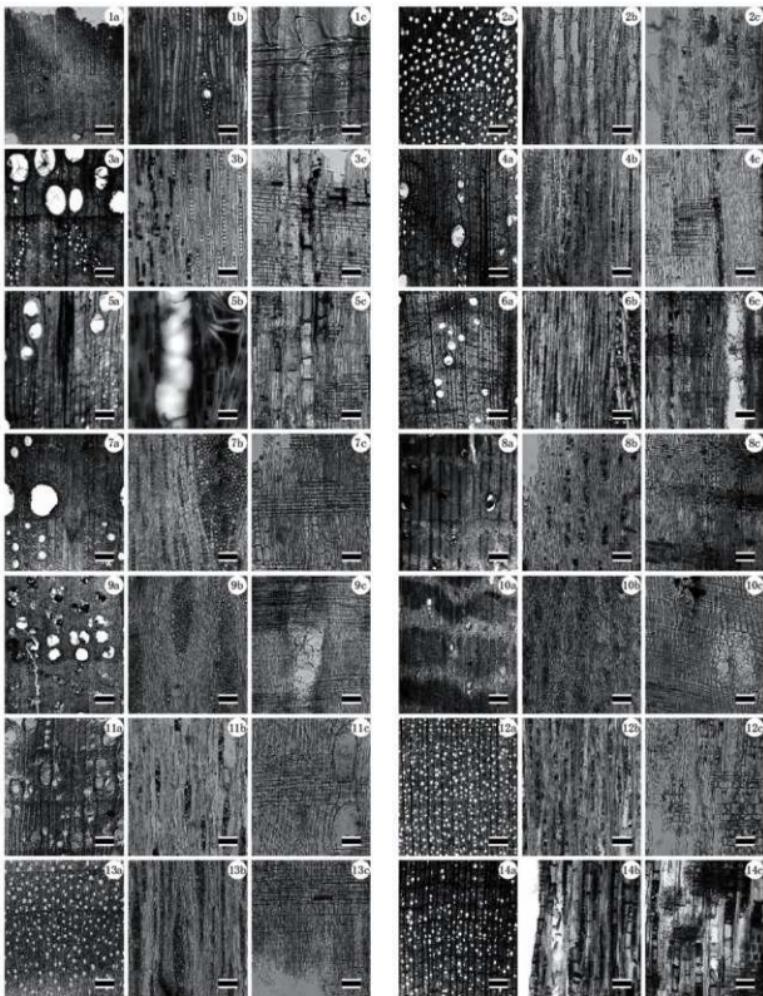


写真6 出土木材の光学顕微鏡写真

1a-1c. マツ属複維管東亞属(No.3)、2a-2c. ヤナギ属(No.16)、3a-3c. クリ(No.4)、4a-4c. ツブラジイ(No.8)、
5a-5c. ツブラジイ(No.19)、6a-6c. コナラ属アカガシ亜属(No.7)、7a-7c. コナラ属クヌギ節(No.10)、
8a-8c. ムクノキ(No.27)、9a-9c. エノキ属(No.6)、10a-10c. イヌビワ(No.18)、11a-11c. クスノキ(No.11)、
12a-12c. ツバキ属(No.1)、3a-13c. ヒサカキ(No.9)、14a-14c. イヌノキ(No.14)
a:横断面 (スケール=250μm), b:接線断面 (スケール=100μm), c:放射断面 (スケール=1:25μm・2-14:100μm)

V 自然科学分析2

1. 土器圧痕の調査

原遺跡群第26次調査区出土土器総点数約6,800点について実体顕微鏡を用いて圧痕探索の悉皆調査を実施し、118点の圧痕の可能性ある土器片を抽出、レプリカを作成、走査型電子顕微鏡（SEM）による観察を行っている。代表的な圧痕例を写真8に示した。①はイネのモミ圧痕、②は韁がはずれた玄米圧痕、③はイネの芒圧痕、④はイネの顆粒状突起圧痕、⑤はアワの圧痕、⑥はキク科植物の種子圧痕、⑦は不明種子の圧痕、⑧は微小貝の圧痕である。圧痕の中で最も多いのはモミ、玄米圧痕である。圧痕の詳細については別稿において報告する。

（山崎純男）

2. 井戸SE025出土土壤塊の調査

原遺跡第26次調査1区SE025遺構下層底面より検出された灰色の水分を含んだしまりのない土壤塊について、実体顕微鏡、偏光顕微鏡、電子顕微鏡を使用して調査を行った。観察は土壤をほぐした後に水洗して余分な泥をおとし、乾燥させた後に行つた。

実体顕微鏡による観察では、砂粒のほかに灰色～白色、黒色の大小さまざまな細く短い繊維状の物質や針状、不定形の物質が見られ、多数の形状の物質で土壤は構成されていることがわかった。偏光顕微鏡観察は純水でプレパラートを作成して行い、針状や繊維状の物質を捉えることができた。針状物質は短いもののほかに、片方の端部が球形でもう一端は尖った虫ビンのような形態をしているものや、表面に細かな突起をもつ管状のものも観察できた。電子顕微鏡はステープにカーボンテープを貼り土壤を付着させて観察をおこなった結果、不定形の塊のほか、偏光顕微鏡で観察できた虫ビン状の針状物質や突起をもつ管状のものなどが多数含まれていることが確認できた。

虫ビン状の針状物質は、市内下山門敷町遺跡第3次調査出土の白色遺物を構成している海綿骨針と呼ばれるものと酷似しており、本資料に見られるものも海綿骨針であると思われる。虫ビンのような形状の海綿骨針は尋常海綿の一軸型に属するもので、本資料にはこの一軸型のほかに有棘棒状体型の海綿骨針も含まれているようである。下山門出土白色遺物は、ほぼ一軸型の海綿骨針で構成されており、出土状況から二次的に持ち込まれたものと考えられているが、原遺跡検出土土壤塊は、純粹な海綿骨針塊ではなく、複数種の海綿骨針のほか、砂粒、泥などが多く混じったもので、自然堆積に由来するものではないかと考える。

（福岡市埋蔵文化財センター 西澤千絵里）

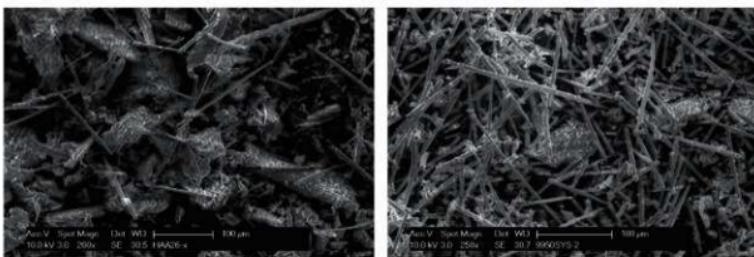


写真7 海綿骨針のSEM画像（左：原遺跡第26次調査SE025、右：下山門敷町遺跡第3次調査）

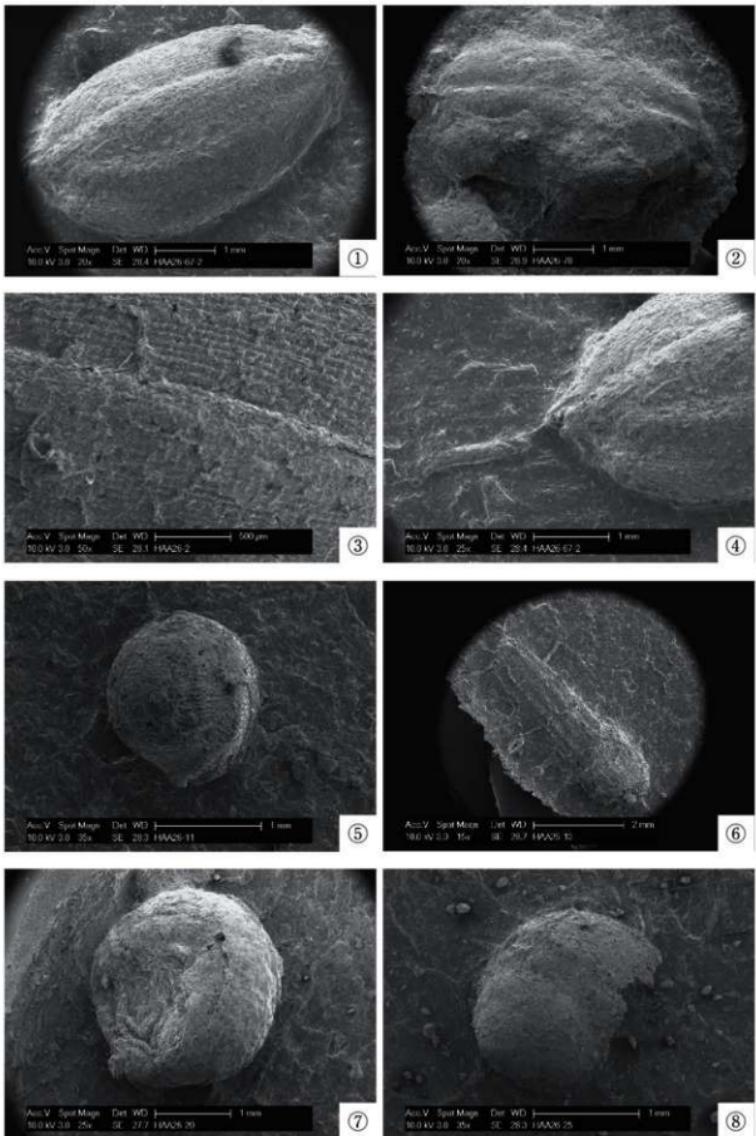


写真8 土器圧痕のSEM画像

VI まとめ

1. 遺構の時期について

原遺跡第26次調査では、縄文時代、弥生時代および古代～中世の遺構・遺物が確認された。

1) 縄文時代

草創期から前期、および後～晩期に属する石器群があるが、縄文土器や当該期の遺構は確認できていない。吉留秀敏氏のご教示によれば、温暖化に伴ういわゆる縄文海進とその後の沖積作用により、草創期～前期の遺構が砂疊層の下に埋まっている可能性があるという。

2) 弥生時代

早期から前期前半が主体で、一部に後期に属するもの（2区SD210）がある。筆者の浅識では詳細な土器の分類・編年が困難なため、ここでは大きく3段階に分けて遺構の時期を概観する。

＜第1段階－早期＞ 夜臼式段階に相当し、1区の掘立柱建物SB063、2区の土坑SK211、3区の土坑SK332がある。SK211はウイグルマッチングにより紀元前750年前後という測定結果を得た。SB063と同規格のSB072・073・077もこの時期に該当する可能性がある。

＜第2段階－早～前期＞ 1区の掘立柱建物SB066、堅穴住居跡SC012、土坑SK002・020・022・024・033・039・069・070・080・085・086、2区の土坑SK203・204・205・217・219・220・222、3区の堅穴住居跡SC301、土坑SK319・320がある。SB066と同規格のSB094もこの時期か。夜臼・板付式移行段階に相当するが、古相を示す遺構・遺物を含むため、細分が必要である。

＜第3段階－前期前半＞ 1区のSK011・013・014・032・034・037・039・049・084がある。いずれも長方形土坑で、2・3区ではこの時期の遺構が確認できない。板付Ⅱ式段階に相当する。

3) 古代～中世

この時期の遺構は、主に10世紀代から12世紀後半、古代後期から中世前期を中心とする。

＜8～9世紀代＞ 遺構は確認できないが、SD325・SK318出土の須恵器が8世紀後半に属する。周辺にこの時期の遺構が存在する可能性を示唆する。

＜10世紀代＞ 同一個体の土師器腕片が各柱穴からばらばらに出土した掘立柱建物SB096や、黒色土器A類や土師器椀を祭祀に使用した可能性のある井戸SE054・056がある。掘立柱建物や柵列の時期決定は難しいが、SB096と主軸方位が揃う掘立柱建物SB064や柵列SA101・103・107・108、溝SD071との関連性も否定できない。

＜12世紀前半代＞ 最も遺構が多い時期で、掘立柱建物SB067、溝SD316、井戸SE008・019・025・038・042・046・047・089・091、土坑SK015・043・044・045・216・305・308・309、土壙墓SR062、ピットSP501・SP502が該当する。掘立柱建物SB067と主軸方位を一にするSA102・104・105・106、掘立柱建物SB093・097もこの時期に該当する可能性がある。

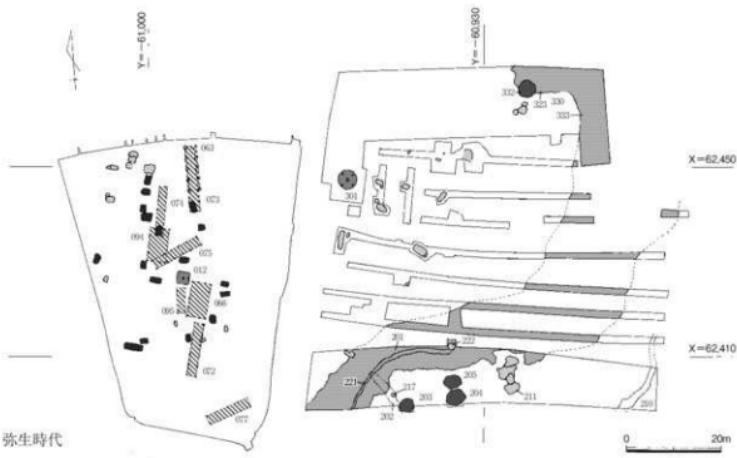
＜12世紀後半＞ 井戸SE036・041、土坑SK030、不明遺構SX016が該当する。

2. 遺構の性格と集落変遷

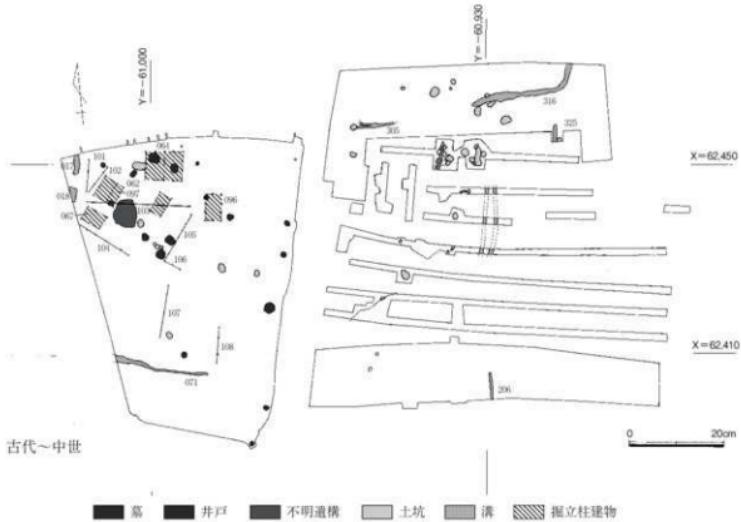
第26次調査では2区と3区の間を調査対象外としていたが、集落構造を解明するため、13箇所のトレンチを設定して確認調査を実施した。その結果、弥生時代早～前期と古代後期～中世前期における集落の変遷・景観復元が検討可能となった。

1) 弥生時代早～前期（第86図上）

弥生時代の遺構は、調査区を縱断する南北方向の浅い谷SX201・330の周辺と、西側の黄褐色砂質土上の遺構では様相が全く異なる。谷の周囲ではSK211・217などの壁面下位が抉れる小さめの土坑と、



■ 墓穴住居跡 ■ 貯藏穴 ■ 貯木道構 ■ 土坑 ■ 谷部 ■ 仓库



■ 墓 ■ 井戸 ■ 不明遺構 ■ 土坑 ■ 溝 ■ 挖立柱建物

第86図 遺構配置模式図 (1/1,000)

SK203～205・332の浅い大きめの土坑が見られる。両者とも湧水が確認され、木製品や未製品、木材が出土したことから、木器加工のための水漬け施設、あるいは貯木施設であると考えられる。しかし、前者に関しては、水が一定量溜まった静止状態で壁面がこれほど抉れるとは考えにくいくことから、人為的な水の汲み上げが影響した可能性もある。この時期の湧水土坑を「井戸」と断言する根拠も類例も持ちえないが、その可能性も視野に入れつつ、今後の資料増加を待ちたい。

谷部から西側の微高地上では、掘立柱建物や長方形土坑が中心となる。1×5～6間の掘立柱建物は、弥生時代早期の環濠集落として著名な江辻遺跡や、近隣では糸島市（旧二丈町）上深江・小西遺跡（村上編1998）に類例があり、梁行より桁行の柱間距離が長い特徴も同様である。後出する4×3間の長方形建物は倉庫、やや遅れる時期に増加する長方形土坑は貯蔵穴と考えられ、貯蔵施設がこの地区周辺で長期間に渡って営まれたのであろう。先述のように、SB063-073、SB072-074、SB075-077、SB066-094の主軸方位がそれぞれ同じであること、また両者が一定の距離を隔てていること、さらに長方形貯蔵穴の長軸方位に南北・東西の2種類があることなど、これらの配置に際して時期・集团・用途・機能などの差異が影響を与えた可能性があるが、憶測の域を出ない。また、花粉・植物珪酸体分析や種子圧痕から、イネを主体とする穀物のある程度の収穫量が想定されるため、これらの貯蔵施設は穀物等の保管場所と考えるのが妥当だが、出土した石庖丁の比率は決して高くない。別の地点に居住地や水田・畑地が存在する可能性も考えるべきであろう。

このように、低地では湧水を利用した貯木・水漬け施設、微高地上では居住あるいは食糧貯蔵施設が営まれており、当該期の人々が地理的条件に応じて土地の利用方法を選択していたことが窺える。この地域における居住形態、食糧の獲得・保管技術、物資の生産・流通など、弥生時代早・前期集落の多面的な生活復元が今後の課題である。

2) 古代後期～中世前期（第86図下）

この時期の遺構は1区北西に集中するが、無数のピットから全ての掘立柱建物を復元できたとは言い難い。まず、調査担当者の力量不足により集落の一側面しか報告できないことをお詫びしたい。

建物の主軸方位は北一南軸、北東一南西軸の2種類がある。前者は3×4間の大型建物であるSB064やSB096があり、柵列SA101・103や溝SD017・018が屋敷地を区画する可能性もある。SB064のすぐ東側に位置する井戸SE042や銅鏡が出土したSP501もこの屋敷に伴うものであろうか。

後者はSB067・093・097の3面をSA102・104・105の柵列が区切り、SB097のすぐ北東側には土壙墓SR062が位置する。また、3つの建物の中心には深い窪みSX016があり、池状遺構の可能性もある。これらの中の遺構が一連の屋敷地を構成する可能性があり、SR062は「屋敷墓」として位置づけられよう。ただし、井戸の時期や位置関係からみて、すべてが同時期に併存したとは考えにくい。建物規模が最も大きい庇付建物SB097の面積は約20m²と中型で、集落類型の④ないし⑤（柴尾1997）、屋敷墓分類ではA類に該当し（橋田1991）、その階層はいずれも百姓層に位置づけられている。SR062からは希少な龍泉・同安窯系青磁0類の碗や陶器の水注など、中国産輸入陶器・陶器が副葬されていたことから、有力層の屋敷であることは疑いない。原遺跡の既存調査で同時期の屋敷地はいくつか見つかっており、当該期の農業経営のあり方、名主・百姓層の動態の解明が待たれる。（比嘉）

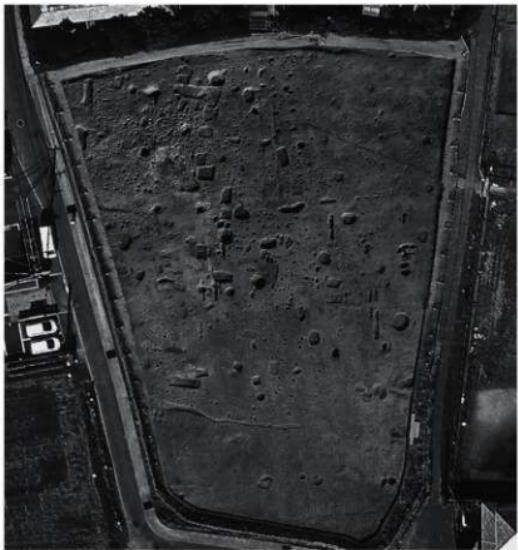
＜参考文献＞

- 一本亨2001「福岡平野における中世前期の屋敷地」2001「博多研究会誌」9 博多研究会
橋田正徳1991「屋敷墓試論」「中近世土器の基礎研究」Ⅶ 日本中世土器研究会
柴尾俊介1997「筑前における中世集落遺跡について（予察）」「研究紀要」11 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
村上教編1998「上深江・小西遺跡Ⅰ」二丈町文化財調査報告書第19集 二丈町教育委員会

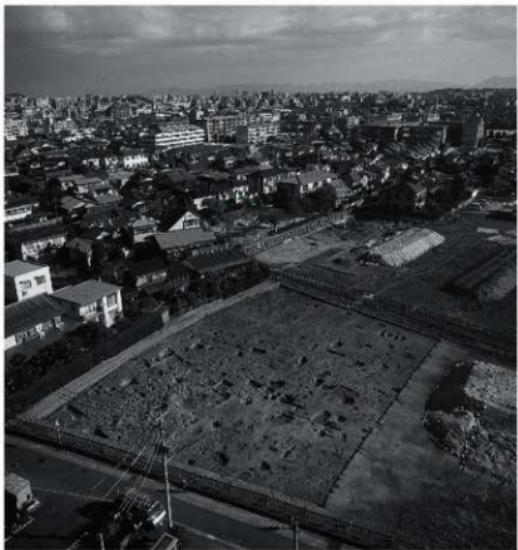
図 版



発掘調査風景(1区)



(1) 1区全景（合成写真、上が北）



(2) 1区北半全景（南西から）

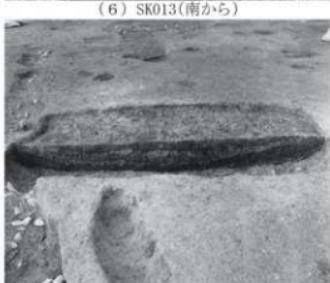
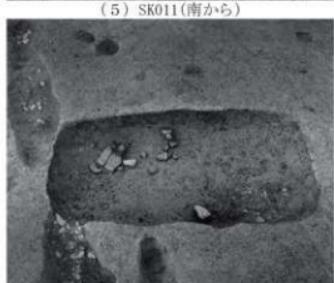
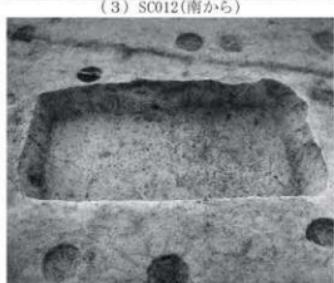
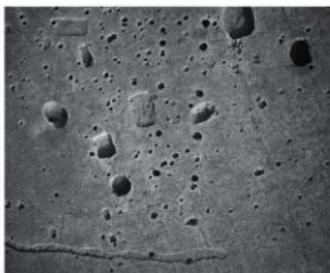
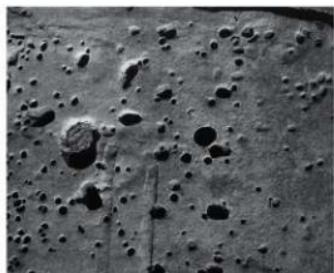
図版 2



(1) SR062 (南東から)



(2) SR062 副葬品出土状況 (南東から)



図版4



(1) SK022(東から)



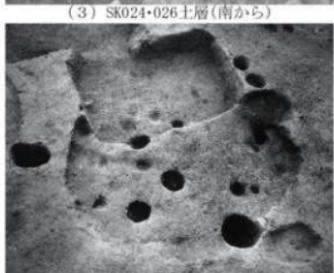
(2) SK022土層(東から)



(3) SK024・026土層(南から)



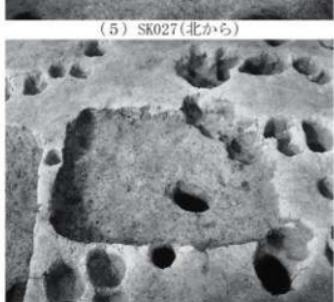
(4) SK024遺物出土状況(南から)



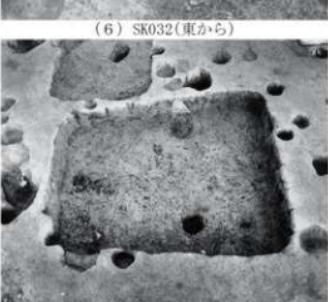
(5) SK027(北から)



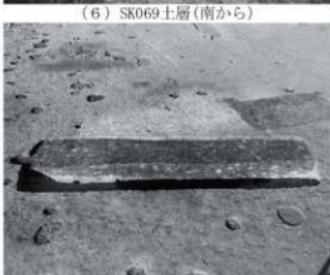
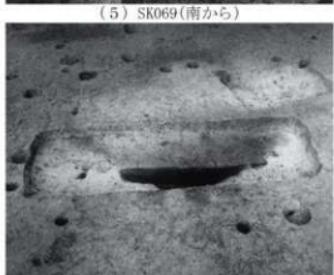
(6) SK032(東から)



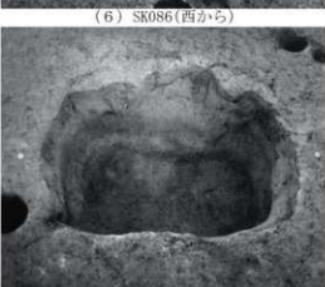
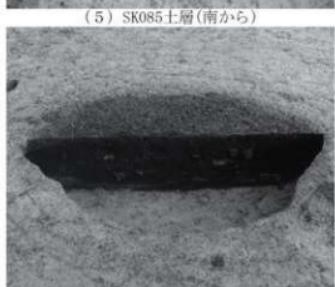
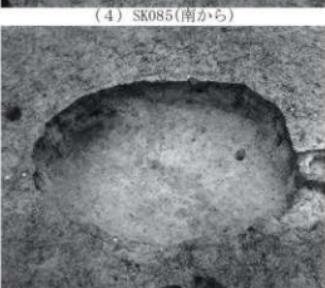
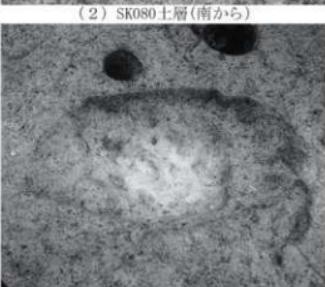
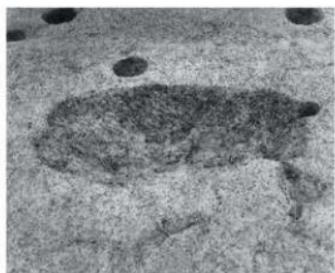
(7) SK034(東から)



(8) SK035(南から)



図版 6





(1) SB064 東半(北から)



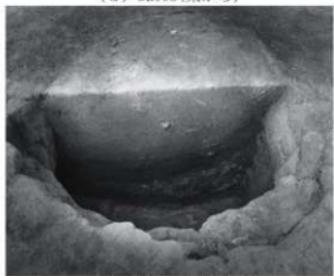
(2) SB064 西半(北から)



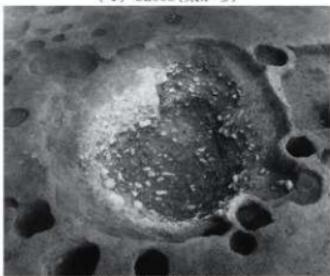
(3) SE003(東から)



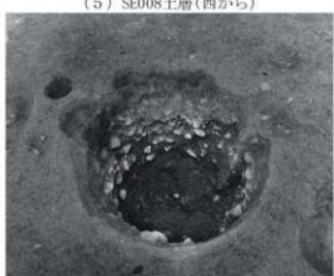
(4) SE008(東から)



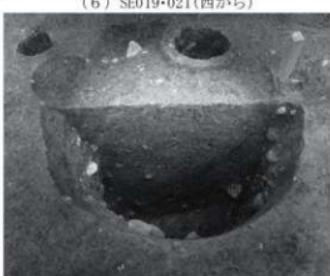
(5) SE008 土層(西から)



(6) SE019-021(西から)



(7) SE025(南から)



(8) SE025 土層(南から)

図版 8



(1) SE036(南西から)



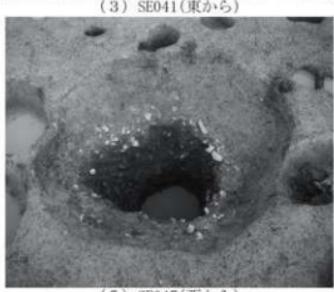
(2) SE038(西から)



(3) SE041(東から)



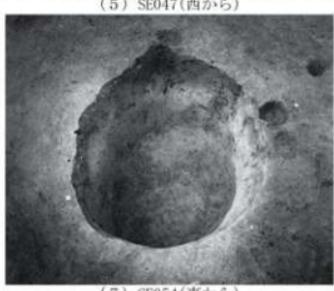
(4) SE046(西から)



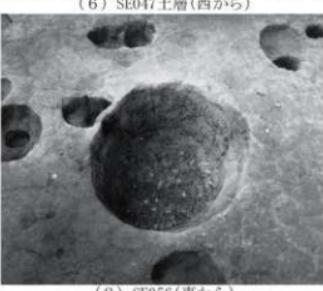
(5) SE047(西から)



(6) SE047土層(西から)



(7) SE054(東から)



(8) SE056(東から)



(1) SE056 土層(東から)



(2) SE081(南から)



(3) SE081 土層(東から)



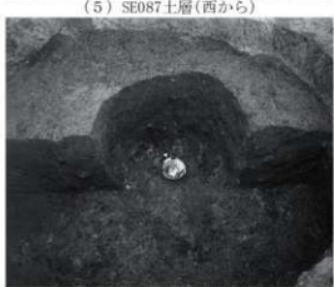
(4) SE087(南から)



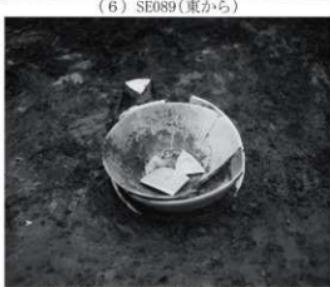
(5) SE087 土層(西から)



(6) SE089(東から)



(7) SE089遺物出土状況1(東から)



(8) SE089遺物出土状況2(東から)



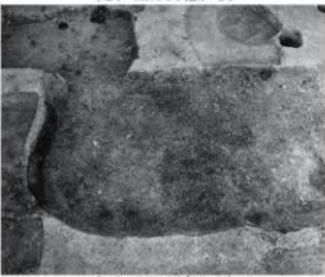
(1) SE089井戸棒底面(東から)



(2) SE091(北から)



(3) SK015(北から)



(4) SK030(南から)



(5) SP502土層(東から)



(6) SX016(東から)



(7) SD001土層(東から)



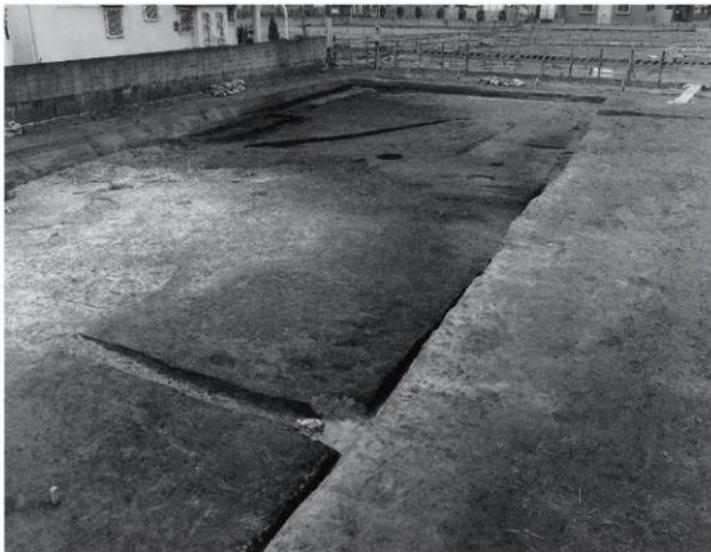
(8) SD071土層(東から)



(1) 2 区全景 (北が上)



(2) 2 区全景 (西から)



(1) SX201検出（北東から）



(2) SX201完掘（北東から）



(1) SK203(北から)



(2) SK204木製品出土状況(南から)



(3) SK205木製品出土状況(南西から)



(4) SK211木製品出土状況(南から)



(5) SK222(南から)



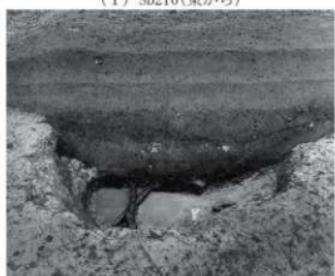
(6) 2区南壁土層(北西から)



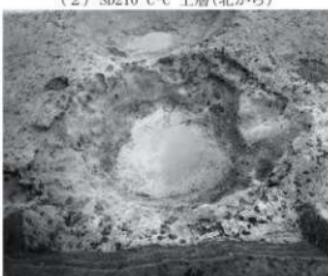
(1) SD210(東から)



(2) SD210 C-C' 土層(北から)



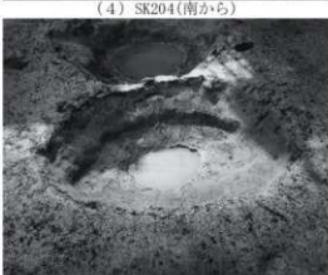
(3) SK203 土層(北から)



(4) SK204(南から)



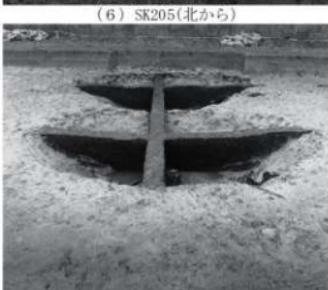
(5) SK204 土層(西から)



(6) SK205(北から)



(7) SK205 土層(西から)



(8) SK204・205 土層(北から)



(1) SK211(東から)



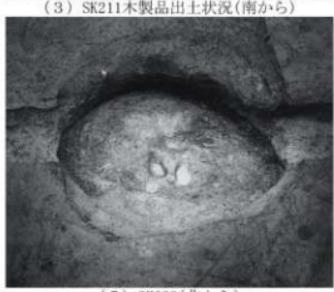
(2) SK211底面(北から)



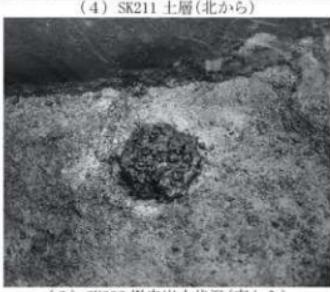
(3) SK211木製品出土状況(南から)



(4) SK211 土層(北から)



(5) SK222(北から)



(6) SK222 樹皮出土状況(南から)



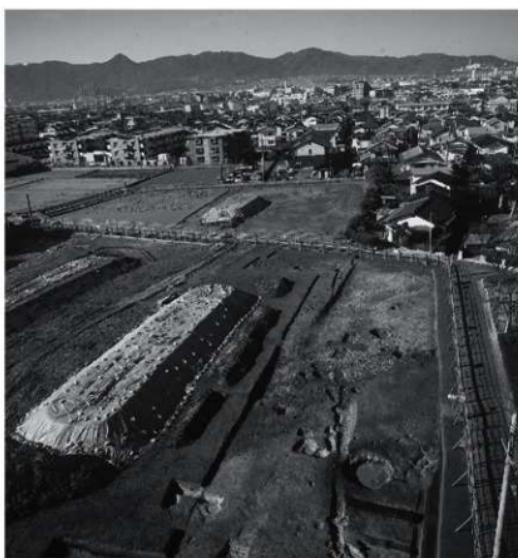
(7) SX201検出時(南西から)



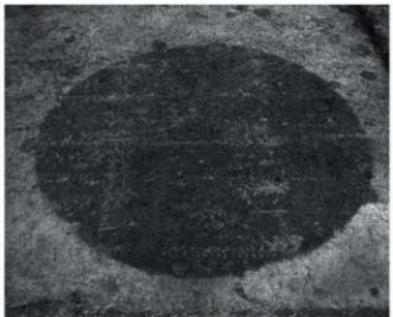
(8) SX201完掘(南西から)



(1) 3区全景（上が北）



(2) 3区全景（北東から）



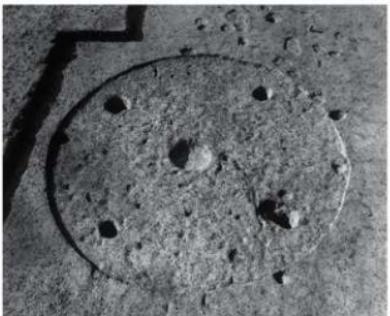
(1) SC301 検出(南から)



(2) SC301 床面検出(南から)



(3) SC301 柱穴半裁(南から)



(4) SC301完掘(東から)



(5) SK332(西から)



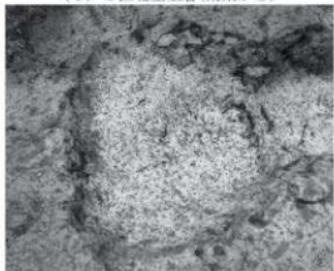
(6) SK332 土層(西から)



(1) 3区北壁土層(南東から)



(2) SK319(南から)



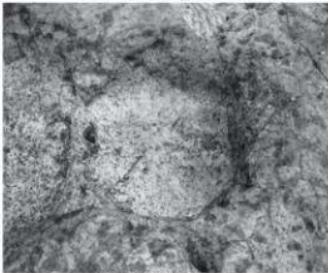
(3) SK320(東から)



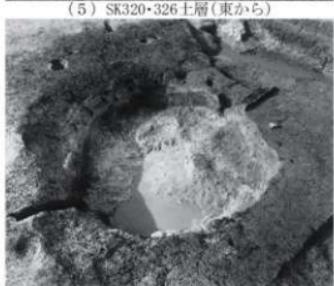
(4) SK320 土層(東から)



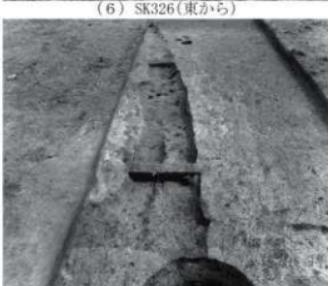
(5) SK320・326 土層(東から)



(6) SK326(東から)



(7) SK322(南東から)



(8) SD305・306(西から)



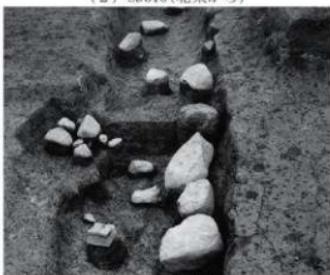
(1) SD316(西から)



(2) SD316(北東から)



(3) SD325(北から)



(4) SD325土層(北から)



(5) SD331(北東から)



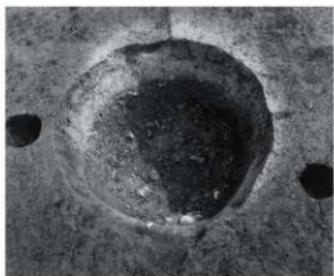
(6) SD333(南から)



(7) SK302(南から)



(8) SK302 土層(東から)



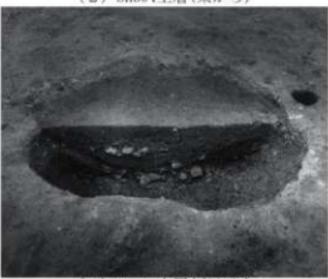
(1) SK304(西から)



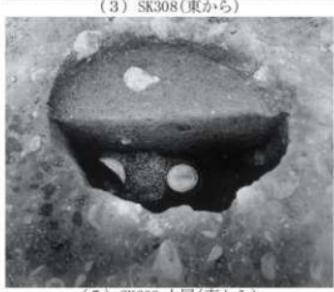
(2) SK304 土層(東から)



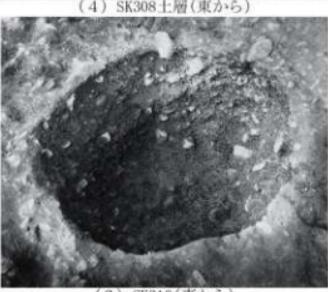
(3) SK308(東から)



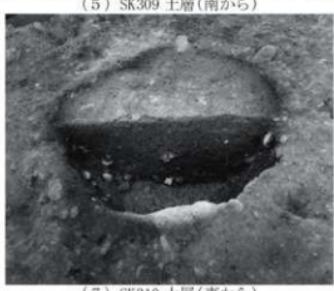
(4) SK308 土層(東から)



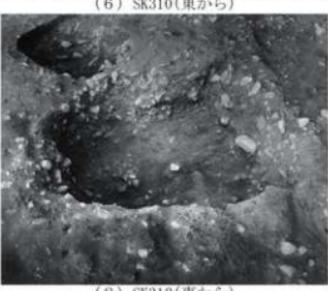
(5) SK309 土層(南から)



(6) SK310(東から)



(7) SK310 土層(東から)



(8) SK312(東から)



(1) SK312土層(東から)



(2) 4区調査区全景(北東から)



(3) 4区北調査区(東から)



(4) 4区南調査区(北から)



(5) SC301東側確認調査(北東から)



(6) 3区南側確認調査(南から)

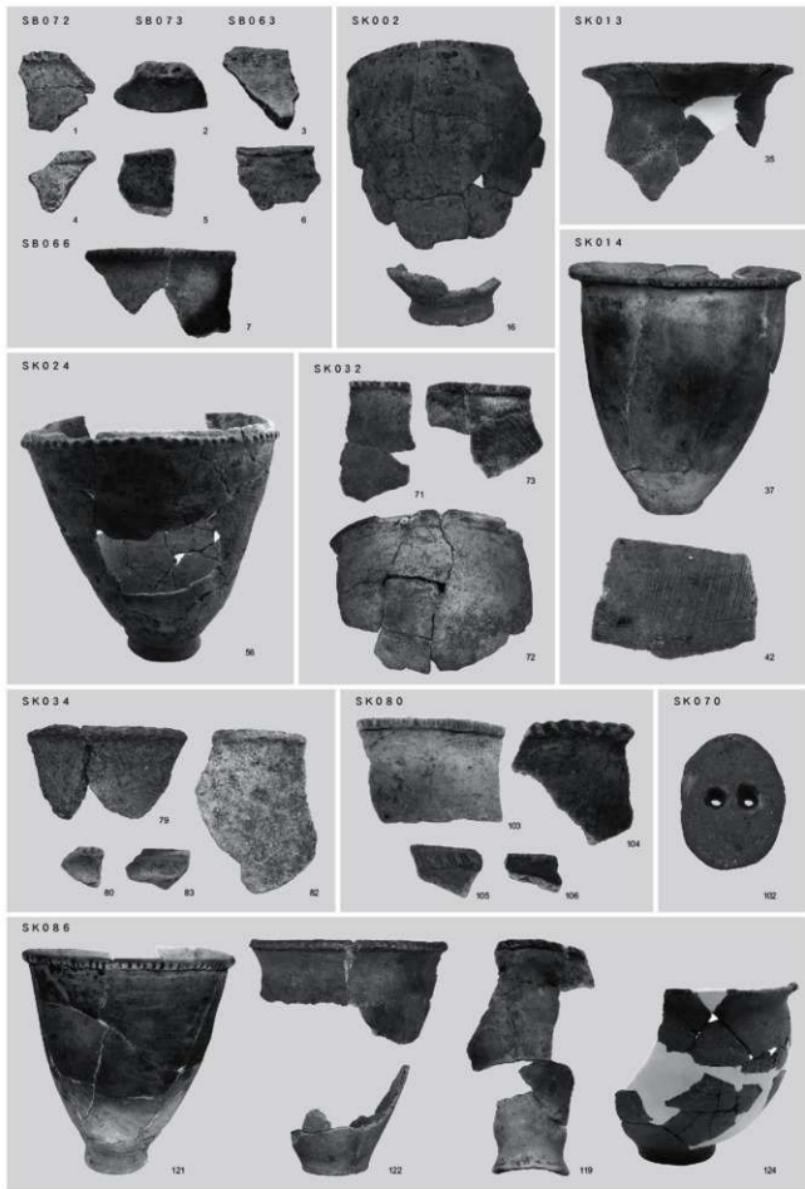


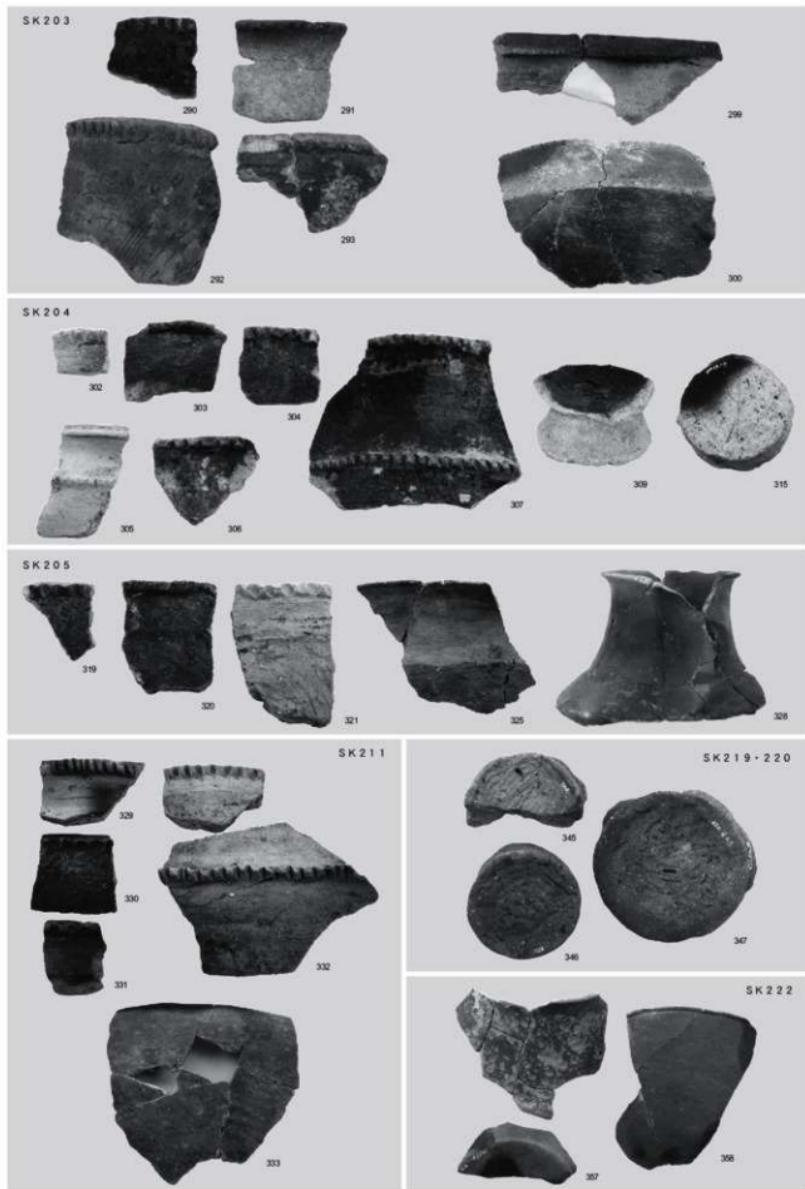
(7) SX201北側確認調査(北から)



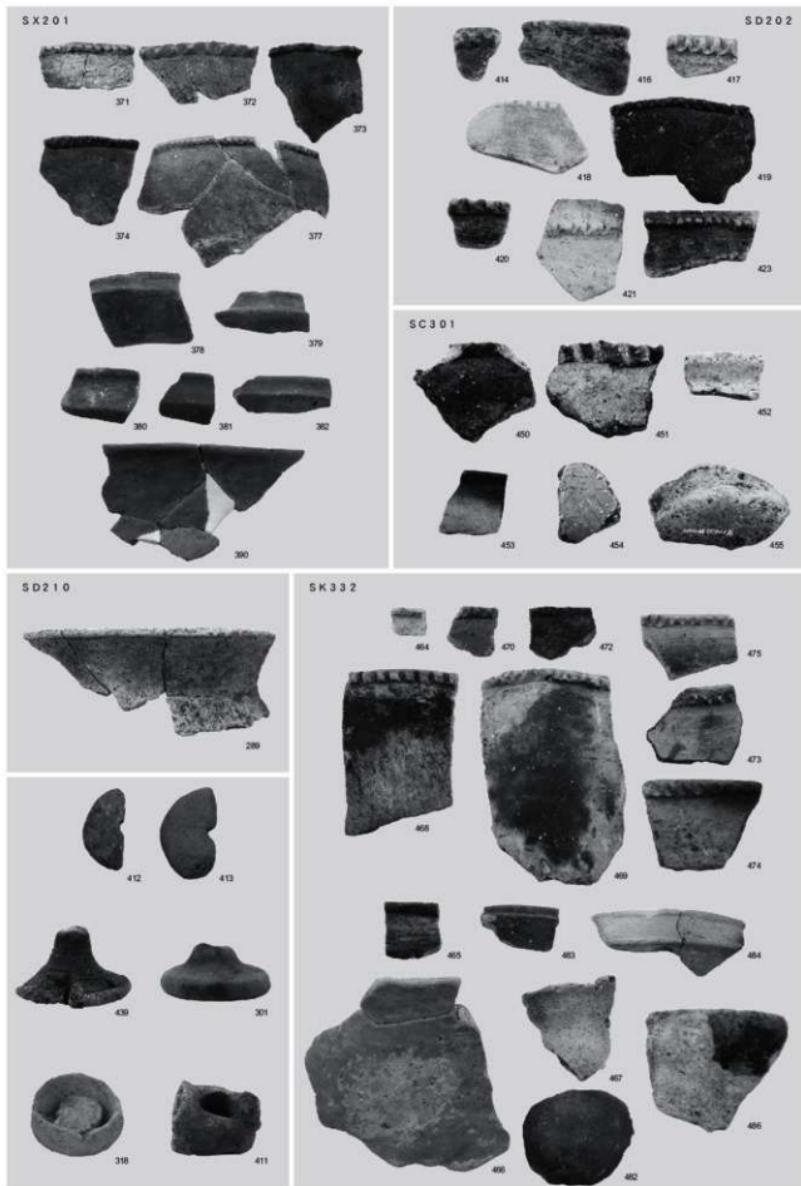
(8) 確認調査遺構検出状況(西から)

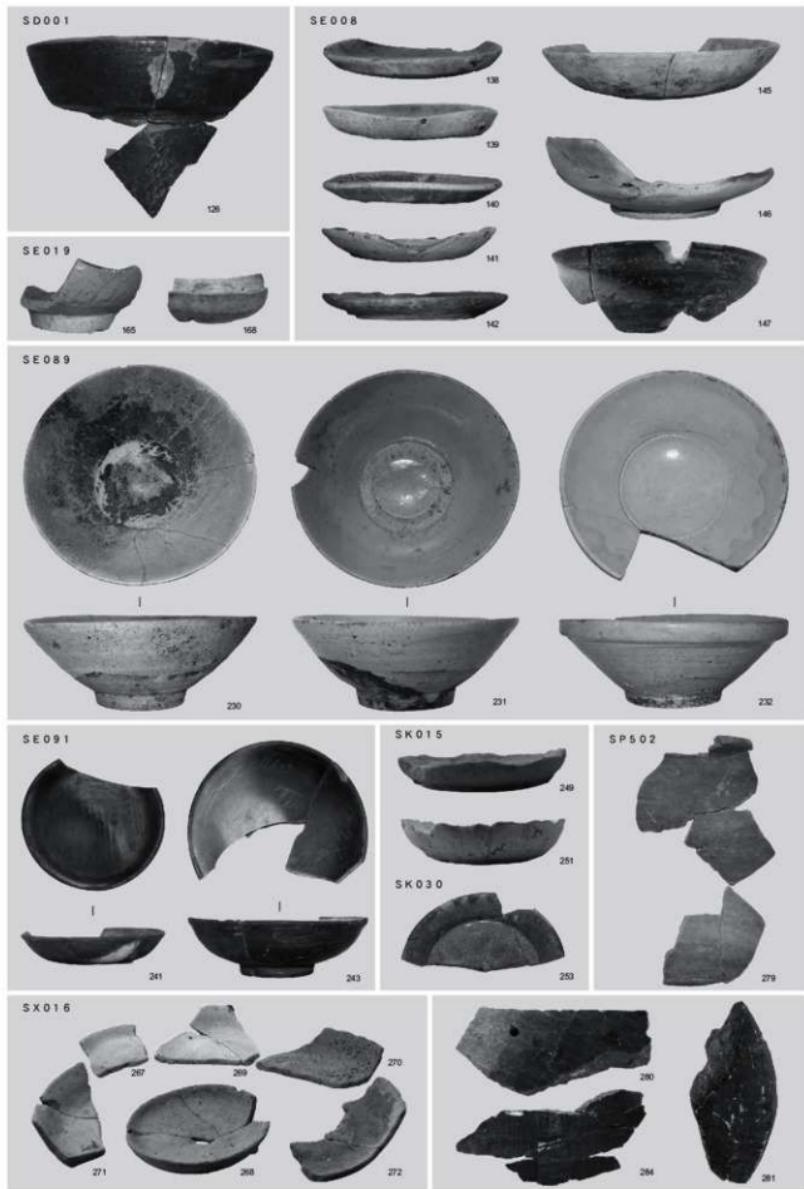
図版 22





図版 24





図版 26



報 告 書 抄 錄

ふりがな	はらいせき14							
書名	原遺跡14							
副書名	—第26次調査報告—							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1167集							
編著者名	北嘉えりか(編) 今井隆博 山崎純男 吉留秀敏 西澤千絵里 株式会社パレオ・ラボ							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8620 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2012年3月16日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
はらいせき 原遺跡	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 さわらはらちよめらない 早良区原7丁目地内	市町村	遺跡番号					
原遺跡	集落	40137	20311	33°33'41"	130°20'36"	20100802 ~ 20110316	4150	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
原遺跡	集落	弥生時代 平安時代	掘立柱建物・竪穴住居 跡・溝・土坑・遺物包含層 欄門・掘立柱建物・溝・ 井戸・土坑	弥生土器・打製石器・磨 製石器・木製品・土製品 土師質土器・須恵器・陶 器・陶磁器・滑石製品・木 製品・刀子・銅錢	突帯文期の倉庫、貯蔵穴、 貯木遺構を確認			
要約	今回の調査では、弥生時代早~前期および平安時代の集落が確認された。弥生時代の遺構は、竪穴住居2軒・掘立柱建物8棟以上・土坑約45基(貯蔵穴や貯木遺構含む)・谷状の落ち込み・ピット多数で、弥生土器・石器・木製品などが出土した。遺構の分布をみると、竪穴住居や掘立柱建物、貯蔵穴は標高が比較的高い位置に集中する一方、標高が低い谷の周囲には湧水を利用した貯木遺構が点在することなどから、環境に合わせた土地利用方法の選択がうかがえた。平安時代の遺構は、掘立柱建物10棟以上・井戸17基・土坑約20基・墓1基・ピット多数が確認され、土師器・陶磁器・瓦器・木製品・鉄製品・銅錢などが出土した。墓には、完形の青磁碗や土師皿、鉄製刀子などが副葬されていた。出土遺物からみて、この集落は10世紀から12世紀にかけて断続的に営まれたと推定される。							

**はら い せき
原遺跡14**

— 第26次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1167集

2012(平成24)年3月16日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
(092) 711-4667

印刷 有限会社 森田印刷所
福岡市中央区大手門2-1-21
(092) 721-5223